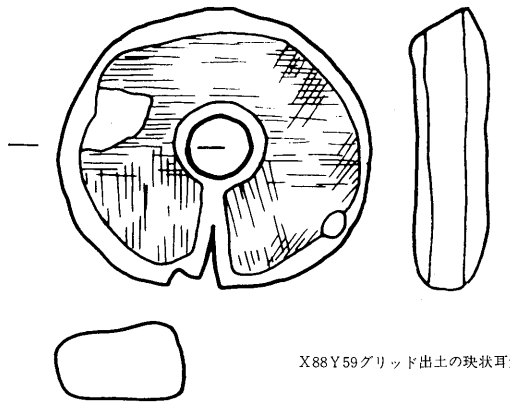
横俵遺跡群Ⅴ

1992

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

横倭遺跡群 V



X88Y59グリッド出土の玦状耳飾

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

1．赤城山と横俵遺跡群

2．熊の穴・上横俵遺跡全景

1．熊の穴・上横俵遺跡全景

2．横俵遺跡群出土の石器

はじめに

名峰赤城山の南斜面に広がる前橋市は、人口28万人を有する群馬県の県都であります。利根川の水や赤城山南麓の豊かな自然に恵まれた市域には、今から2万年以上も前の旧石器時代から近世に至るまで、人々が連綿として暮らし続けていた証しとしての多くの埋蔵文化財が眠っております。

特に、市の北東部に広がる荒砥地区は、遺跡の密集地として広く知られており、国・県・市の指定となっている史跡も数多く分布しております。

前橋市では、市の活性化を推進するために大胡町・粕川村と接するこの地区に工業団地を造成することになりました。造成に先立って行われた遺跡の分布調査の結果、団地予定地内に広く遺跡が分布していることが分かりました。

開発と埋蔵文化財の協議を行った結果、工区毎に年次を定めて発掘調査を実施することになりました。発掘調査は、昭和63年度から開始され、本年で第4年次の調査を迎えることとなりました。

本年度は、平成2年度に行われた地区の北と東にあたる約12,500㎡の区域で実施されました。北地域では、昨年度確定することができなかった縄文時代の遺物包含層の範囲が確定でき、包含層全体の性格を把握することができました。また、東区では、やはり昨年度確認された古墳時代後期から末期の古墳群の続きとして小円墳4基が調査され、「上毛古墳総覧」に記載されている本古墳群の正確な分布状況を知ることができました。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、予定通り進められるよう調整していただきました前橋工業団地造成組合の職員の方々、また冷夏多雨という天候不順の中、発掘調査に従事していただきました作業員の方々に対し、厚く感謝申し上げる次第であります。

なお、本報告書が当地区の古代史を解明して行くうえで少しでも役に立てば幸いと存じます。

平成4年3月13日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長　遠藤次也

例　　言

1．本報告書は、前橋工業団地造成組合（管理者　小寺弘之）が造成する荒砥工業団地に係る横俵遺跡群発掘調査報告書である。

2．遺跡は、群馬県前橋市西大室町28－1番地ほかに所在する。

3．調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団　団長　遠藤次也が施工者　前橋工業団地造成組合管理者　小寺弘之と委託契約を締結し実施した。

調査担当者および調査期間は以下の通りである。

発掘・整理担当者　都所敬尚・大山知久・上野克巳（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係）

試掘・発掘調査期間　　平成3年5月13日～平成3年11月20日

整理・報告書作成期間　平成3年11日21日～平成4年3月13日

4．本書の原稿執筆・編集は都所・大山・上野が行った。整理作業をはじめ図版作成には、阿部シゲ子・桐谷秀子・近藤三代子・下飯有利子・鈴木民江・田口桂子・多田啓子の協力があった。

5．石器石材の鑑定は飯島静男氏（群馬地質研究会員）にお世話になった。

6．発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫で管理されている。

凡　　例

1．挿図中に使用した北は座標北である。

2．挿図に、建設省国土地理院発行の1/20万地形図（宇都宮）と1/2.5万地形図（大胡）を使用した。

3．各遺跡の略称は3E18（上横俵遺跡）、3E19（熊の穴遺跡）、3E24（熊の穴II遺跡）である。

4．各遺構の略称は次の通りである。

ＪＤ…縄文時代の土坑、S…集石、M…古墳、Z…配石墓、H…土師器使用の住居址、D…土坑、K…炭窯址

5．遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。

遺構　　集石…1/30、土坑…1/60、古墳…1/40・1/120、全体図…1/500

遺物　　土器・石器…1/3、一部の土器・石器…2/3、1/4、1/6

6．スクリーントーンの使用は次の通りである。

遺構平面図　　焼土…点

遺構断面図　　As－B…濃点、版築…レンガ

遺物実測図　　繊維含有土器の断面…点、石器摩滅痕…淡点、須恵器断面…黒塗

目　　次

はじめに

I　調査に至る経緯……1

II　遺跡の位置と環境
　1　遺跡の立地……3
　2　歴史的環境……4

III　調査の経過
　1　調査方針……6
　2　調査経過……8

IV　層　　序……9

V　熊の穴II遺跡の調査
　1　縄文時代……10
　2　古墳～平安時代……14

VI　上横俵遺跡の調査
　1　古墳～平安時代……16
　2　その他の時代……17

VII　熊の穴遺跡の調査……17

VIII　成果と問題点……19

図　版

口絵　1　赤城山と横俣遺跡群
口絵　2　熊の穴・上横俣遺跡全景
口絵　3　熊の穴・上横俣遺跡全景
口絵　4　横俣遺跡群出土の石器

PL. 1　熊の穴II遺跡　縄文時代の遺構
2　熊の穴II遺跡　古墳時代の遺構
3　熊の穴II遺跡　M－11・12号墳
4　熊の穴II遺跡　M－13・14号墳
5　上横俣遺跡　M－2号墳
6　縄文式土器
7　縄文式土器
8　縄文式土器
9　縄文式土器
10　縄文時代の石器
11　縄文時代の石器
12　縄文時代の石器

挿　図

頁

Fig. 1　横俣遺跡群の位置……vi
2　横俣遺跡群調査経過図……1
3　横俣遺跡群位置図……2
4　横俣遺跡群周辺遺跡図……5
5　グリッド設定図……7
6　発掘調査経過図……8
7　熊の穴II遺跡標準土層図……9
8　熊の穴・上横俣遺跡遺構全体図……28
9　熊の穴II遺跡A・B区全体図…29・30
10　上横俣・熊の穴遺跡全体図……31・32
11　縄文時代の集石・土坑……33
12　縄文時代の土坑……34
13　M－11号墳墳丘図……35
14　M－12号墳墳丘図……36
15　M－13号墳墳丘図……37
16　M－11号墳石室平面図……38
17　M－11号墳石室展開図……39
18　M－12号墳石室平面図……40
19　M－12号墳石室展開図……41
20　M－13号墳石室平面図……42
21　M－13号墳石室展開図……43
22　M－14号墳墳丘図、
石室平面・床面図……44
23　Z－2号配石墓展開図・
K－1号炭窯址……45
24　M－1・3号墳墳丘図……46
25　M－2号墳墳丘図……47・48
26　M－2号墳石室展開図……49
27　H－11号住居址……50
28　古墳時代の土坑……51
29　縄文式土器(1)‥Ⅰ～Ⅲ群土器……52
30　縄文式土器(2)‥Ⅳ群土器……53
31　縄文式土器(3)‥Ⅳ群土器……54
32　縄文式土器(4)‥Ⅳ～Ⅵ群土器……55
33　縄文式土器(5)‥Ⅵ群土器……56
34　縄文式土器(6)‥Ⅵ群土器……57
35　縄文式土器(7)‥Ⅵ～Ⅷ群土器……58
36　縄文時代の石器(1)……59

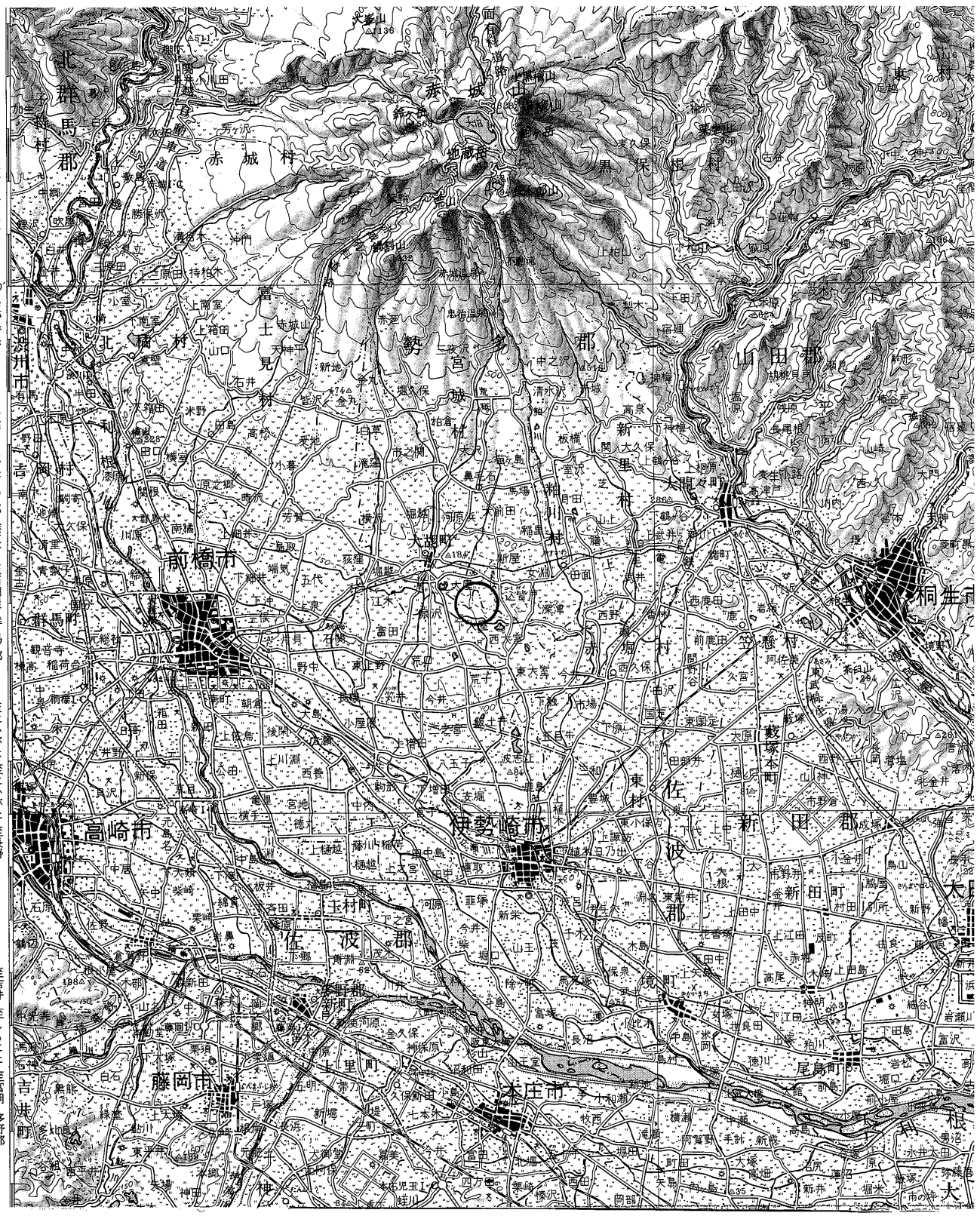
37　縄文時代の石器(2)……60
38　縄文時代の石器(3)……61
39　縄文時代の石器(4)……62
40　縄文時代の石器(5)……63
41　縄文時代の石器(6)……64
42　古墳時代以降の遺物……65
43　縄文時代遺物包含層の遺物分布……66

表

頁

Tab. 1　包含層出土の縄文式土器一覧……12
2　縄文時代の石器石材一覧……13
3　縄文式土器観察表……22～24
4　縄文時代の石器観察表……25～27
5　古墳～平安時代の遺物観察表……27

横俵遺跡群の位置（○印）（1/20万地形図）



I　調査に至る経緯

横俵遺跡群の発掘調査は前橋工業団地造成組合（管理者　小寺弘之）から依頼された荒砥工業団地予定地の約55haを対象に昭和63年度から実施されているものである。

昭和63年度は試掘調査、平成元年度は調査団直営・委託合わせて３パーティが、２年度は直営・委託１パーティずつが開発優先順位の高い場所から順に本調査を実施してきた。

４年次にあたる平成３年度の調査は、平成３年５月13日付で委託契約が締結され事業実施の運びとなった。調査範囲は、熊の穴II・上横俵・熊の穴遺跡の各隣接地にあたる未調査部分（３遺跡合計面積：約12,500m²）であり、調査団が直営で本調査を実施した。さらに、調査中に主要地方道伊勢崎・大胡線沿いのプラス看板予定地の試掘調査も行った。現地での発掘調査は平成３年５月13日から11月20日まで行い、整理作業は平成３年11月21日から平成４年３月13日までであった。なお、今年度調査を実施した３遺跡の名称は、各々が隣接している遺跡の名称を踏襲し、それぞれ熊の穴II遺跡、上横俵遺跡、熊の穴遺跡とした。

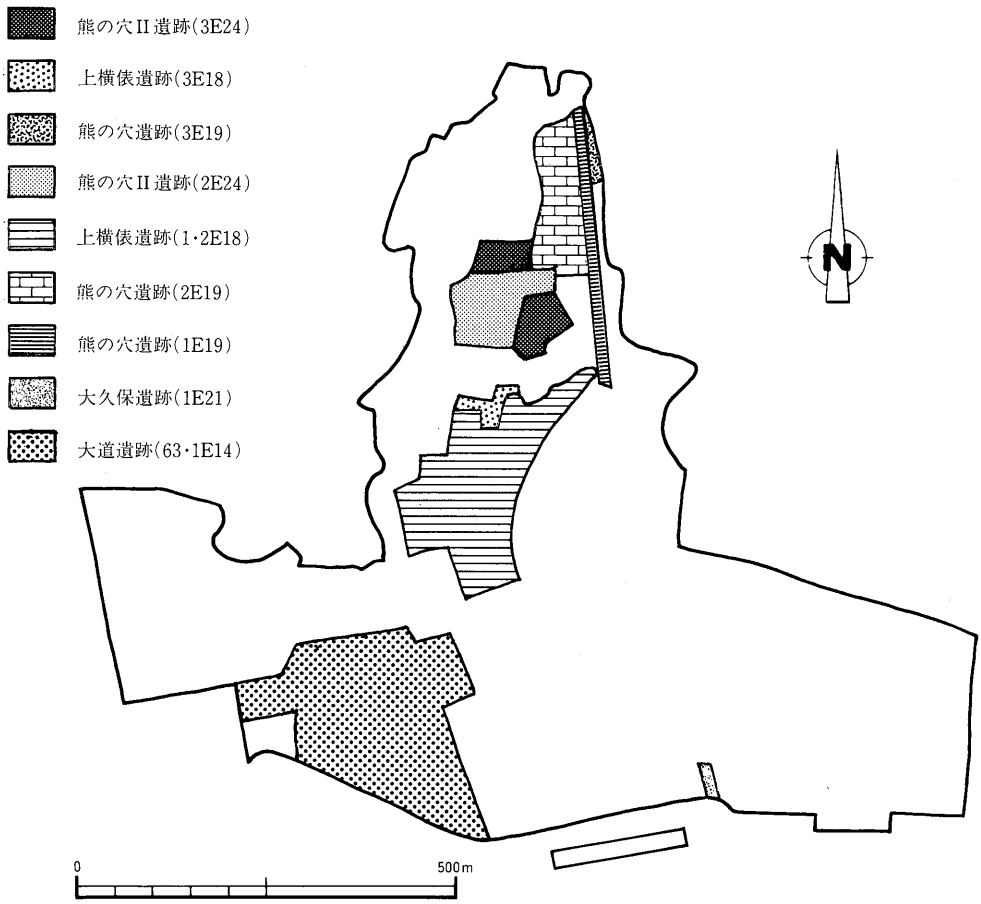
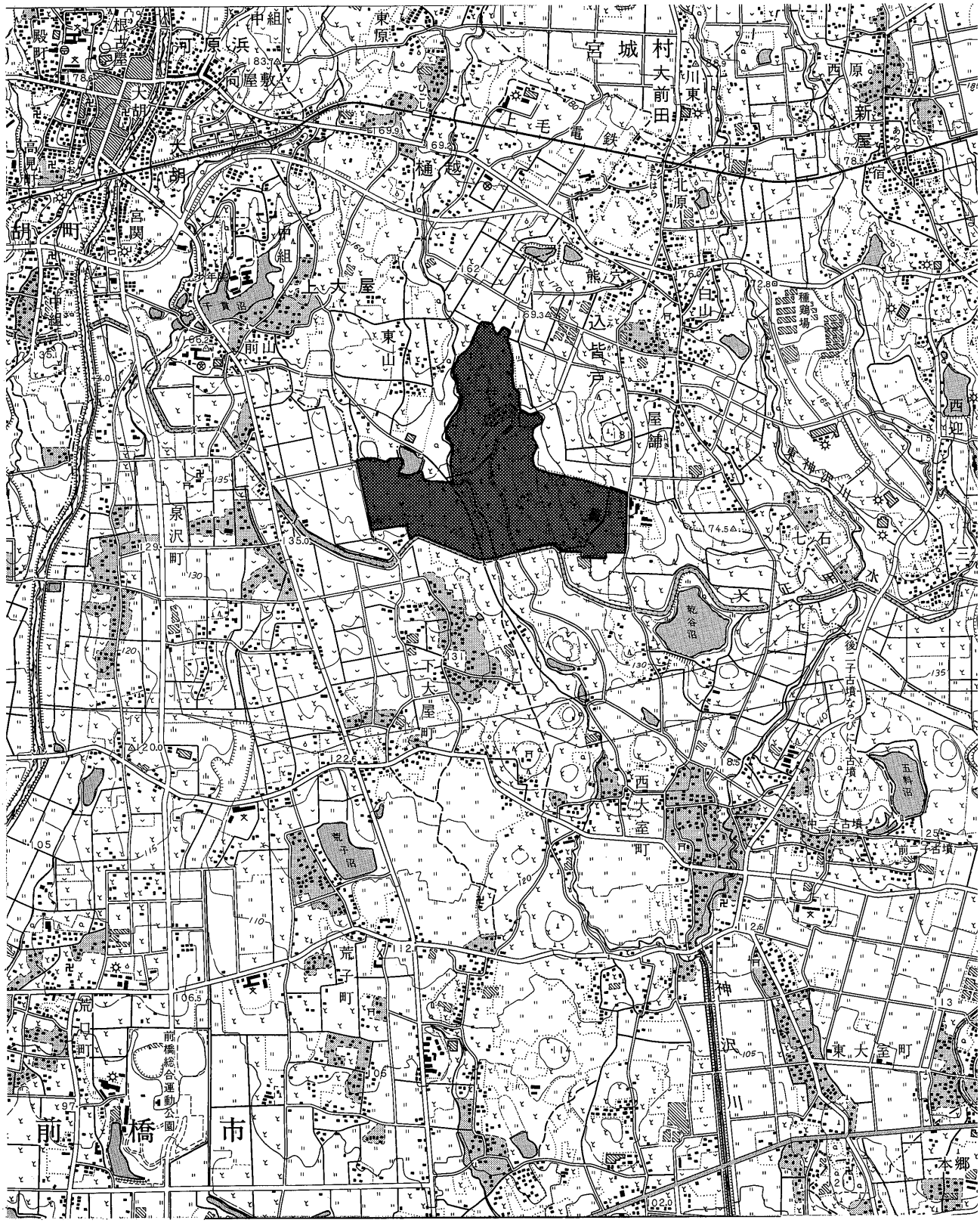


Fig. 2　横俵遺跡群調査経過図

横俵遺跡群位置図（1/2.5万地形図）



2

1:25,000 大胡

500m 0 500 1000 1500

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

横俵遺跡群は前橋市西大室町字熊の穴・上横俵・中横俵・大久保、下大屋町字上諏訪山・大道に所在している。前橋市の市街地からは東へ約9㎞の位置にあり、東西約1.2㎞、南北約1㎞、面積約55haという広大な範囲に及んでいる。遺跡群の周辺には、西方約500mに主要地方道伊勢崎・大胡線が南北に、北方約500mには主要地方道前橋・大間々・桐生線が東西に走っている。また、上毛電鉄樋越駅・北原駅へは約1㎞の近距離にある。すなわち、北は大胡町、東は粕川村に接する、前橋市の北東端とも言える場所に立地している。

熊の穴・熊の穴II・上横俵遺跡の3遺跡は、こうした横俵遺跡群のなかでも北側にあたる丘陵部に位置している。熊の穴遺跡は丘陵から低地へ向かうなだらかな斜面に立地し、とくに今回の調査部分はその端部にあたる。また、熊の穴II・上横俵遺跡については、主に丘陵の斜面に立地しており、群集墳の存在が古くから知られていた場所でもある。遺跡地の西側は急峻な崖であり、谷底を流量の少ない神沢川が南流している。北側から東側にかけては遺跡地を迂回するように細い谷底平野が南北に形成され、この谷底平野をはさんだ粕川村側にはなだらかな丘陵が南北に横たわっている。このような丘陵地形は赤城山南麓地帯に源をもつ荒砥川、神沢川、粕川等の流域で数多くみられ、これらの河川が南流することによって営まれたものがほとんどであるが、本遺跡地の独立丘陵はこれらのものとは異なり、主に赤城山の形成過程に由来するものである。

本遺跡群の所在する地域一帯は、今から、約20～30万年前におこった赤城山の山体崩壊に起因する大規模な岩屑なだれ（梨木泥流）によって形成された斜面を基盤としており、熊の穴II・上横俵遺跡が立地する小山のような地形は、その際に山体を構成していた地層が比較的まとまった形で運ばれてきたもので、周囲より高く突出している。この突出部は、とくに「流れ山」と呼ばれる、本遺跡地の基盤層と考えられるものである。このことは各遺跡地の頂上部付近に露出している安山岩の巨石からも推察できるが、最低地・頂上部2カ所の地層観察用の深堀により、実際に確認することができた。最低地ではAs-B・As-C等を含む黒土層の下に、As-YP・As-SP・As-BP・AT・暗色帯・Hr-HP等の関東ローム層が約3mも厚く堆積し、その下が岩盤になっていたが、頂上部では黒土層から暗色帯までわずか1m足らずで、その下は岩盤に覆われている。頂上部のローム層の堆積が最低地に比べ極端に少ないのは、風や流水等によって低地方面に流されたためであろう。

なお、本遺跡地は戦後の昭和23年に新たな開墾が行われた土地が中心であり、現況では桑畑や野菜畑を主とした畑として利用されていた。今年度まで検出されたほとんどの古墳はそれらの開墾時に削平、破壊されたものと考えられ、残存状態は良好ではなかった。しかし、昭和の開墾から昨年度の旧石器の検出まで、人々の残した痕跡を確認することができたとも考えられよう。

2 歴史的環境

横俵遺跡群がある赤城山南麓に位置する荒砥地区は、関東ローム層を基盤とする洪積台地を南下する河川・小支流が開析し、地形的に原始古代から人々が生活を営む上での好適地である。そのため、遺跡が濃密に分布し、とくに古墳については県下でも最も密な分布がみられる地域の一つとなっている。近年では土地改良事業や大規模な開発事業が極めて急激にかつ広範囲にわたって行われ、それらに伴う発掘調査によって検出された遺跡が今現在も爆発的に増え続けている。

昨年度、本遺跡群でもナイフ形石器をはじめとする旧石器が発見されたが、周辺では柳久保遺跡群頭無遺跡(48e)で細石刃やナイフ形石器等を伴う3枚の文化層が、尖頭器を中心に出土した三屋遺跡(15)、西原遺跡(86)、剝片を中心とした川籠皆戸遺跡(52)等があげられる。

縄文時代では、草創期から後期まで検出されている。中でも、上縄引遺跡(82)、北山遺跡(83)、天神風呂遺跡(8)で検出された早期～中期の集落を筆頭に、谷津遺跡(12)、稲荷山遺跡(74)、荒砥上諏訪遺跡(69)等がある。後期は本遺跡群内の大道遺跡(1e)で配石遺構が発見された。

弥生時代は、荒口前原遺跡(41)で中期末の住居址が調査されている。また、乾谷沼、五料沼周辺では北山遺跡(83)、下縄引遺跡(81)、久保皆戸遺跡(75)、西原遺跡(86)で後期の住居址が密集し検出されている。さらに、七ツ石遺跡(84)では、弥生時代終末期から古墳時代初頭への過渡期とみられる住居址が10数軒調査されているが、全般に大規模な集落は未だ検出されていない。

古墳時代になると、荒砥地区には国指定史跡となっている西大室の3二子古墳(77・78・79)をはじめ、数多くの古墳が築造されている。本遺跡群の東方に隣接する七ツ石古墳群(85)では、7世紀中葉ものとされる巨石巨室を持つ古墳が2基、西方約1.7kmには6世紀初頭の箱式棺状石室を持つ山ノ上・茂木両古墳(10)が、さらに南方には、阿久山古墳群(65)、伊勢山古墳群(66)、中島古墳群(67)等が連続的に位置している。また、本遺跡群内の熊の穴・上横俵古墳群(1a・d)のような群集墳は、大稲荷・小稲荷遺跡(28・26)、水口山遺跡(27)、舞台遺跡(58)等でも発見されている。一方、集落は急激な増加がみられる。前期は内堀遺跡群(80)、荒砥宮田遺跡(38)、荒砥諏訪西遺跡(36)、荒砥東原遺跡(62)、大室小学校校庭遺跡(68)等で、中期は集落址のほかに荒砥荒子遺跡(56)、梅木遺跡(76)、丸山遺跡(17)で豪族居館址が発見されている。続く後期では北山遺跡(83)、天神風呂遺跡(8)、渋沢遺跡(89)、前田遺跡(90)等で集落址が検出されている。

奈良・平安時代に至ると、近隣した台地上に多数の集落が出現する。北山遺跡(83)、大久保遺跡(49)、西迎遺跡(88)等がそれらにあたる。また、柳久保水田址(48f)、荒砥諏訪西遺跡(36)、荒砥宮田遺跡(38)、荒砥前田遺跡(40)等のような、荒砥・宮川流域に位置する遺跡では、As-B軽石によって埋没した水田址が集落址とともに発見されている。他の特殊遺構としては、古代勢多郡衙と推定される上西原遺跡(32)、その南に位置する荒子小学校校庭遺跡(51)からは須恵器窯址及び銅印が検出されている。また、上大屋・樋越地区遺跡群(9)からは須恵器窯址、炭窯址、製鉄址遺構を含む八ガ峰生産址遺構が発見され本地域の発展の様子を窺うことができる。

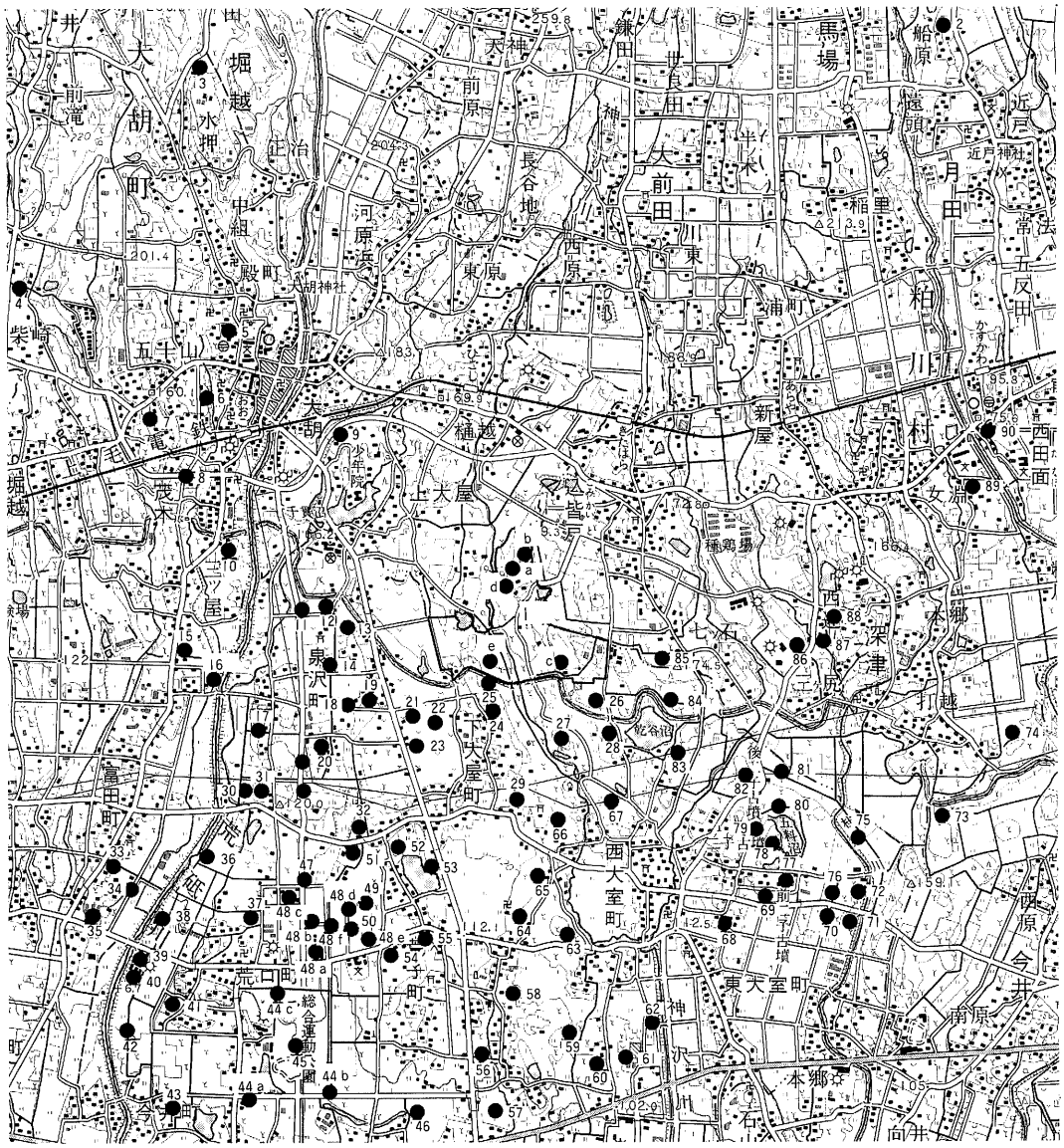


Fig. 4 横倭遺跡群周辺遺跡図

1．横倭遺跡群（a．熊の穴II遺跡 b．熊の穴遺跡 c．大久保遺跡 d．上横倭遺跡 e．大道遺跡） 2．月田古墳群 3．甲諏訪遺跡 4．柴崎古墳群 5．殿町遺跡 6．天神A・B・C地点遺跡 7．堀越古墳 8．天神風呂遺跡 9．八ケ峰生産址遺構 10．山ノ上・茂木古墳 11．山崎遺跡 12．谷津遺跡 13．寺東遺跡 14．寺前遺跡 15．三屋遺跡 16．荒砥355号墳 17．丸山遺跡 18．東前田北遺跡 19．東原西遺跡 20．新山遺跡 21．東原B遺跡 22．中山A・B遺跡 23．村主遺跡 24．山王遺跡 25．大道遺跡 26．小稲荷遺跡 27．水口山遺跡 28．大稲荷遺跡 29．明神山遺跡 30．御殿山古墳 31．北原遺跡 32．上西原遺跡 33．東原古墳群 34．東原遺跡 35．宮下遺跡 36．荒砥諏訪西遺跡 37．荒砥諏訪遺跡 38．荒砥宮田遺跡 39．権現山古墳 40．荒砥前田遺跡 41．荒口前原遺跡 42．荒砥北原遺跡 43．荒砥北三木堂遺跡 44．荒砥大日塚遺跡 45．鶴谷遺跡群 46．荒砥上之坊遺跡 47．柳久保遺跡 48．柳久保遺跡群（a．下鶴谷遺跡 b．柳久保遺跡 c．諏訪遺跡 d．中鶴谷遺跡 e．頭無遺跡 f．柳久保水田址） 49．大久保遺跡 50．頭無遺跡 51．荒子小学校校庭遺跡 52．川篭皆戸遺跡 53．堤東遺跡 54．荒砥下押切遺跡 55．荒砥中屋敷遺跡 56．荒砥荒子遺跡 57．元屋敷遺跡 58．舞台遺跡 59．立野古墳群 60．天神遺跡 61．丸山古墳群 62．荒砥東原遺跡 63．富士山I遺跡 64．下境I遺跡 65．阿久山古墳群 66．伊勢山古墳群 67．中島古墳群 68．大室小学校校庭遺跡 69．荒砥上諏訪遺跡 70．荒砥五反田遺跡 71．荒砥上川久保遺跡 72．荒砥上川久遺跡 73．茶臼山古墳 74．稲荷山遺跡 75．久保皆戸遺跡 76．梅木遺跡 77．前二子古墳 78．中二子古墳 79．後二子古墳 80．内堀遺跡群 81．下縄引遺跡 82．上縄引遺跡 83．北山遺跡 84．七ツ石遺跡 85．七ツ石古墳群 86．西原遺跡 87．三ケ尻遺跡 88．西迎遺跡 89．渋沢遺跡 90．前田遺跡

III 調査の経過

1 調査方針

昭和63年度から始まった横俵遺跡群の発掘調査は、今年度で4年次を迎えた。調査範囲があまりにも広大なため、平成2・3年度は調査団および委託調査により並行して調査が実施されてきた。昨年度まで開発優先順位の高い場所から調査を行ってきたが、今年度はそれらの遺跡の隣接地にあたる場所で遺構、遺物の存在する可能性が高い地区をねらって調査を実施した。そのため今回の調査区は大きく3カ所に分かれている。それは、平成元年度に調査された市道556号線の熊の穴遺跡の東側にあたる南北に細長い調査区、2年度に調査を行った神沢川の東側の丘陵地である熊の穴II遺跡の北側及び東側の拡張部分、元年度・2年度に委託により調査が実施された熊の穴II遺跡の南側にあたる上横俵遺跡の拡張部分である。そこで、各遺跡の名称は各々隣接する遺跡の呼称をそのまま踏襲し使用した。そのため、各遺跡の名称及び範囲については今後検討する必要がある。さらに、熊の穴II遺跡については南北に走る幅約7mの農道によって分断され、なおかつ2カ所の調査区が約50mほど離れているため、それぞれ北側の調査区をA区、南東側をB区と呼ぶことにした。また、調査は基本的には一昨年度及び昨年度の調査方針に準じて行った。すなわち、調査区の呼称方法については、本遺跡群全体をとらえたグリッドを設定し、4mピッチで西から東へX1、X2、X3…と、北から南へY1、Y2、Y3…と番付し、グリッドの呼称は北西杭の名称を使用した。X100、Y75の公共座標は第IX系+44.6、−58.7kmである。

今年度の調査区は調査済み地区の隣接地であり、遺構・遺物の存在する可能性が極めて高かったため、基本的には試掘調査は行わず、ただちに本調査に入り古墳〜平安時代のプラン確認を実施した。それと並行して公共座標に基づく植杭を荒砥工業団地内の基準点及び昨年度のグリッド杭を利用し、必要に応じて4m方眼で行った。水準についても同様に、遺跡内に20m間隔、海抜高0.5m単位で設定し使用した。また、それぞれの調査区の表土剝ぎ、熊の穴II遺跡A区の一部及びB区の縄文時代面の試掘調査は重機（バックフォー0.7㎥）を用い、時間の節約に努めた。

縄文時代遺物包含層の調査は、20mピッチで土層観察用のセクション・ベルトを残し、4mグリッド単位で移植ゴテ、ねじり鎌等を使い、人力で硬質（ハード）ローム上面まで掘り下げた。さらに、グリッド毎の収納遺物数を1/200の図面に記し、遺物包含層の範囲を把握しながら、そのつどその後の調査行程を検討しながら調査を行った。旧石器時代の試掘調査も人力で2mグリッド単位でAT層の上面まで掘り下げた。

図面作成は、平板・簡易遣り方測量を用い、原則的に1/20の縮尺で、必要に応じて1/10・1/40の縮尺で作成した。遺構の遺物については平面分布図を作成し、台帳に各種記録をとりながら収納した。包含層の遺物はグリッド単位で収納したが、重要遺物については分布図・遺物台帳の記載を行い収納した。また、プラン確認の段階で現況図を作成し、その後の調査に活用した。

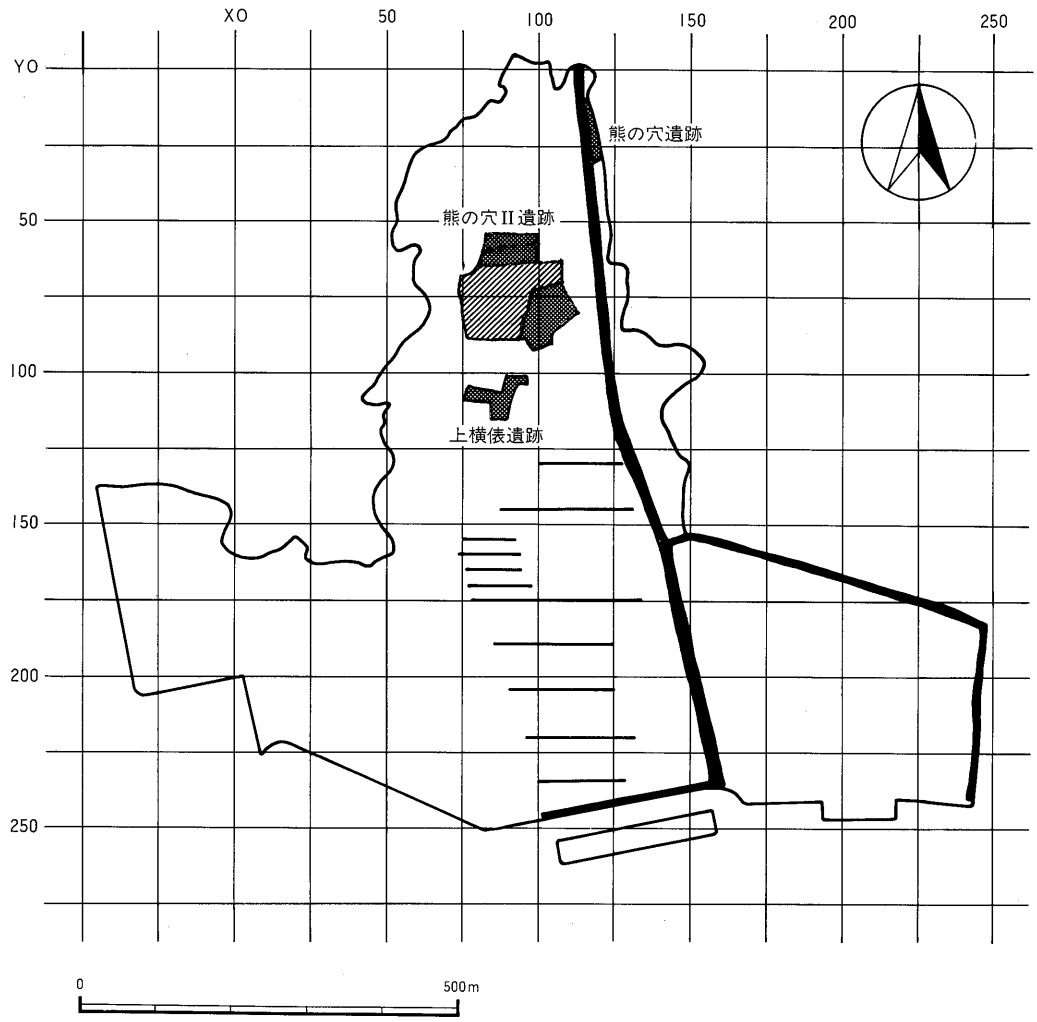


Fig. 5 グリッド設定図

試掘調査

1．旧石器時代面

昨年度の出土地点の北側にほぼ隣接し、同様の地形の場所をねらって２mグリッドを12カ所設定し掘り下げたが、今年度は検出されなかった。

2．縄文時代面

熊の穴II遺跡B区については幅２mのトレンチをグリッドに合わせて、東西方向に８m間隔で３本、南北方向には１本設定して試掘調査を実施した。

3．プラス看板予定地

長さ約20m、幅約10mの調査区について幅２mのトレンチを２本設定して調査を行ったが、遺物が数点検出されたのみで、遺構は確認されなかった。

2 調査経過

今年度の発掘調査は、平成3年5月13日から11月20日までの約6カ月間にわたり実施した。4月に打ち合わせ、準備等を行い、委託契約締結日である5月13日から優先地区である市道556号線東側の公園予定地から調査に入った。556号線の基礎工事がすでに完了していたため重機搬入に苦慮しつつも住居址を検出、5月中にはこの部分の調査を終えることができた。これと並行して5月下旬からは作業員を増員し、本年度の主地区である熊の穴II遺跡の拡張部分の調査を本格的に開始した。表土剝ぎの結果、A区では昨年度の延長で縄文時代の遺物が多数出土し、B区では昨年度の調査でプラン確認されていた住居址らしきシミが古墳の周堀の一部であることが判明、石室も確認することができた。6月も引き続き熊の穴II遺跡の調査を中心に実施した。調査区内に家畜小屋が残っていたこと、花木の移植等の問題で調査も思うように進まなかったが、B区から新たに古墳2基が検出された。7月はA区で包含層の広がりが想定されたため北側に拡張を行った。B区では3基の古墳の内部精査を実施した。石室内に崩落している巨石の除去に手間取りながらも、床面の石敷も確認することができた。また、昨年度民間委託により調査を実施した上横俵遺跡の拡張部分の表土掘削を開始、一部調査済みの古墳の周堀を1基、破壊が著しい古墳1基を確認することができた。この古墳の付近には、昭和8年に当地を開墾する際造られた「御尊霊塔」なる石碑が転がっており、当時の人々の信仰の様子を知ることができた。さらに、大正～昭和のものと思われる炭窯を1基検出した。同遺跡では8月にもさらに1基の古墳の周掘が検出された。9月は毎週訪れた大型台風や活発な秋雨前線の影響から、全景写真撮影が延び延びとなってしまい作業の進捗も思わしくなかった。このような状況の中で包含層の調査を続けた熊の穴II遺跡A区からはいわゆる「陥し穴」と思われる土坑が数基検出された。また、B区では精査の結果、さらに1基の小古墳が検出された。10月には念願の全景写真撮影を完了、終盤からは旧石器の試掘調査に入ったが、今年度は遺物は検出されなかった。11月は全体の精査及び古墳の掘り方の調査を実施。11月20日に現場の引っ越しを行い現場作業終了となった。横俵遺跡群の調査も残すところあとわずかとなり、周囲の景色も一変した。こうした時代の流れが感じられる一連の調査だったと感じるものである。

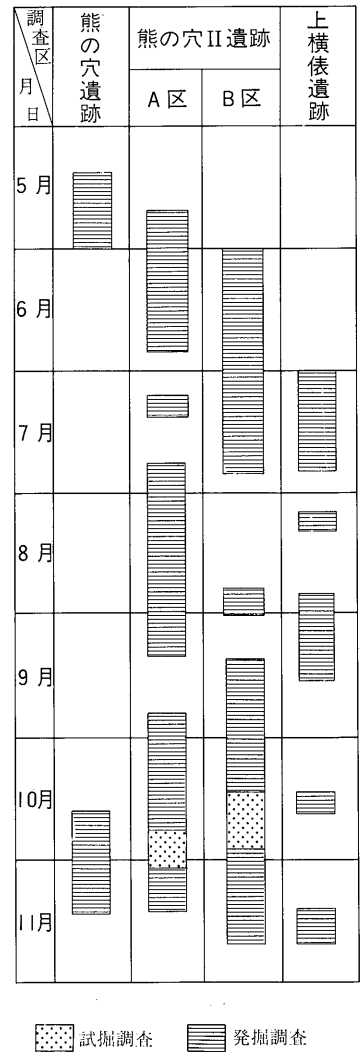


Fig. 6 発掘調査経過図

Ⅳ 層　　序

本遺跡群は、赤城火山の山体崩壊に起因する大規模な岩屑なだれ（梨木泥流）によって形成された斜面を基盤としている。基盤層の上は赤城・浅間・榛名等の諸火山によって噴出された火山灰が風化し、形成されたローム層が覆っているが、それらは低地部を中心に吹きだまるかたちで堆積していったため、一般にローム層は、台地の頂上部に薄く、縁辺に厚く堆積している。つまり、遺跡の層序は各地点により堆積状況に違いはあるが、基本的にはFig. 7の通りである。

Ⅰ　層　黒褐色粗砂層。粘性をわずかに有し、軟らかいが締まる。As-Cを20～30%含む。

Ⅱ　層　黄褐色粗砂層。粘性を有し、軟らかいが締まる。ローム土が50%以上含まれる。

Ⅲ　層　黄褐色軟質（ソフト）ローム層。粘性を有し、軟らかいが締まっている。均一な層であり、縄文時代遺物包含層となっている。また、古墳時代の遺構がこの層で確認できる。

Ⅲa層　黄褐色軟質（ソフト）ローム層。粘性を有し、軟らかいが締まる。この層からも縄文時代の遺物が出土するが、数は極端に減少する。また、縄文時代の一部の遺構もこの層から確認できる。

Ⅳ　層　黄褐色硬質（ハード）ローム層。上部にAs-ＹＰがブロック状に入る。粘性・締まりともに有り。縄文時代遺構確認面。

Ⅴ　層　黄褐色硬質（ハード）ローム層。As-ＳＰを霜降り状に含む。粘性・締まりともに有り。

Ⅵ　層　黄褐色硬質（ハード）ローム層。As-ＢＰが入り、下部に純層をブロックで含む。

Ⅶ　層　黄褐色硬質（ハード）ローム層。As-ＢＰをわずかに含む。

Ⅷ　層　明黄褐色微砂層。粘性を有し、締まりは弱い。広域テフラＡＴが入る。昨年度の調査では旧石器がこの直下で検出された。

Ⅸ　層　暗褐色ローム層。暗色帯。粘性・締まり強い。

Ⅹ　層　明黄褐色硬質（ハード）ローム層。粘性・締まりともに強い。

Ⅺ　層　明黄褐色硬質（ハード）ローム層。粘性・締まりともに強い。

Ⅻ　層　明黄褐色軽石層。Hr-ＨＰ。

XIII　層　褐色粘土層。粘性・締まりともに非常に強い。

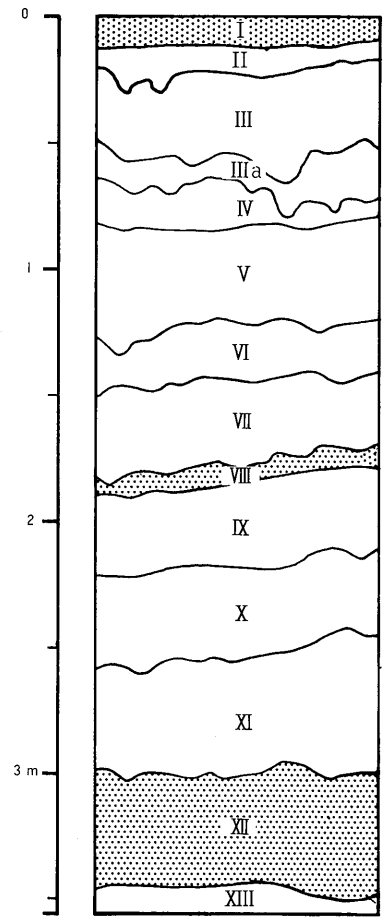


Fig. 7　熊の穴Ⅱ遺跡標準土層図

V　熊の穴II遺跡の調査

1　縄文時代

本遺跡は最頂部165mを測る横俵遺跡群の中でも最も標高の高い丘陵の斜面上および斜面からなだらかに下る台地上に位置している。昨年度の調査では南～東側への斜面上から前期後半諸磯ａ・ｂ式の土器を伴う住居址２軒、竪穴状遺構１基、集石３基、土坑27基が検出された。さらに、遺構の量が少ないにもかかわらず縄文式土器8,740点、石器6,035点が出土した遺物包含層が確認された。今年度はその北側の隣接地にあたる丘陵の東～北側への斜面上（Ａ区）の調査を実施するため、当初から遺構量に関係なく遺物包含層の存在が予想されていた。調査の結果、遺構は集石４基、土坑９基のみと少なかったが、遺物包含層から縄文式土器7,688点、石器2,840点が出土した。これは昨年度の調査と同様、遺物包含層から出土した遺物の量から考えると遺構が少ないという本遺跡の特徴を表すものである。

遺構の名称については、集石はＳ－３号まで、土坑はＪＤ－27号まで昨年度の調査ですでに検出されていたため、今年度はＳ－４号、ＪＤ－28号から呼ぶこととした。

遺物包含層からは、昨年度と同様に土器は草創期撚糸文系から後期後半加曽利Ｂ式までのものが断続的に検出された。そのうち主体をなすものは早期後半条痕文系および前期後半の竹管文系であり、検出された遺構の所産時期も主にその時期であると考えられる。

また、Ｓ－６号集石は精査の結果、古墳時代の配石墓（Ｚ－２）に名称変更したため、欠番扱いとなる。

1　集　石

Ｓ－４号集石（Fig. 11）

位　置　X83、Y63グリッド

形　状　粗粒安山岩の円礫を主体に構成される。礫の総数26個。径は５～20cm程の大きさであった。

掘り方　認められなかった。

Ｓ－５号集石（Fig. 11）

位　置　X84、Y63グリッド

形　状　粗粒安山岩を主体とした21個の円礫からなる。礫の径は10cm程度。

掘り方　認められなかった。

Ｓ－７号集石（Fig. 11、ＰＬ. 1）

位　置　X91、Y60・61グリッド

形　状　粗粒安山岩の円礫を主体に礫34個から構成されている。礫の径は10～20cmを測る。

掘り方　認められなかった。

Ｓ－８号集石（Fig. 11）

位　置　X86、Y58・59グリッド

形　状　径10～20cm程の粗粒安山岩の円礫およびその熱を受けて割れたと思われる破片から構成される。礫の総数21個。

掘り方　認められなかった。

2 土　坑

ＪＤ－28号土坑（Fig. 11）

位　置　X88・89、Y63・64グリッド

形　状　長径222cm、短径210cmの円形を呈し、深さは116cmを測る。壁に中段をもつものの、平坦な底面に２つの坑底穴をもち、いわゆる「陥し穴」と考えられる。

ＪＤ－29号土坑（Fig. 11、ＰＬ. 1）

位　置　X85、Y62・63グリッド

形　状　長径128cm、短径112cmの円形を呈し、深さ32cmを測る。底面は平坦である。土坑の上部に40cm程の大きさの台形に近い偏平な安山岩を有する。

ＪＤ－30号土坑（Fig. 11）

位　置　X90・91、Y59グリッド

形　状　長径110cm、短径106cmの円形を呈し、深さ36cmを測る。

ＪＤ－31号土坑（Fig. 12、ＰＬ. 1）

位　置　X91・92、Y59グリッド

形　状　長径228cm、短径144cmの楕円形を呈する。深さは116cmを測る。底面は隅丸長方形を呈し、平坦である。坑底穴はないものの壁は垂直に立ち上がり、いわゆる「陥し穴」と考えられる。

ＪＤ－32号土坑（Fig. 12）

位　置　X92、Y60グリッド

形　状　長径166cm、短径144cmの楕円形を呈し、深さは82cmを測る。平坦な底面をもち、西側はややオーバーハングしている。

ＪＤ－33号土坑（Fig. 12）

位　置　X85、Y63グリッド

形　状　長径92cm、短径84cmの円形を呈する。深さは36cmを測る。

ＪＤ－34号土坑（Fig. 12）

位　置　X85、Y63・64グリッド

形　状　長径51cm、短径35cmの楕円形を呈し、深さは28cmを測る。

ＪＤ－35号土坑（Fig. 12）

位　置　X89、Y59グリッド

形　状　長径98cm、短径86cmの楕円形を呈し、深さは45cmを測る。底面は平坦であった。

ＪＤ－36号土坑（Fig. 12、ＰＬ. 1）

位　置　X95・96、Y64グリッド

形　状　長径216cm、短径130cmの楕円形を呈する。深さは124cmを測る。平坦な底面に２つの坑底穴をもち、いわゆる「陥し穴」と考えられる。

3 包含層の遺物

土　器（Fig. 29～35・43、ＰＬ. 6～9）

縄文時代遺物包含層の調査は、昨年度本調査を実施し、包含層の延長が予想されていた熊の穴の丘陵の頂上付近にあたる今年度の調査区の南西部分から遺物の出土状況に応じて順次実施した。ほとんどの遺物がソフトローム層内から層位に関係なく検出されたため、分層発掘は行わなかった。調査グリッドはＡ区のX81～X96、Y55～Y64であり、そのうち頂上部からやや下がった場所と丘陵の縁辺の２つの地点において土器が集中して出土した。出土した土器を時期的にみ

ると草創期撚糸文土器から後期の加曽利B式土器まで断続的にみられた。そこで、昨年度の分類と同様に時期的に大きくⅠ群からⅧ群までに分類した。Ⅰ群土器としたものは草創期撚糸文系土器群である。さらに細かな撚糸文、粗大な撚糸文（花輪台式）、撚糸条痕文の3つに分かれ、そのうち主体を占めるものは細かな撚糸文である。周辺遺跡においても検出例は少なく貴重な事例となった。II群土器は早期前半無文系土器群である。出土点数は少ないが、中には結晶片岩を含むものもみられた。III群土器は早期前半の沈線文系土器群の田戸上層式土器である。沈線文あるいは貝殻沈線文が認められたがこれも出土点数は少ない。IV群土器は早期後半の条痕文系土器群を扱った。条痕、縄文条痕、無文の3つに分けられ、出土点数もVI群土器に次いで多かった。V群土器は黒浜式土器をはじめとする前期前半繊維縄文系土器群であるが、昨年度に比べかなり点数が少なかった。VI群土器としたものは竹管文系土器群の前期後半諸磯ａ・ｂ、浮島、興津式土器である。本遺跡の主体となるものであり、南側に隣接する昨年度の調査区においても全体の約3分の1を占めるものである。平成元年度からの熊の穴における調査でも住居址をはじめとする遺構も数多く検出されており、縄文時代のうちで当地が一番繁栄した時期といえよう。続くVII群土器は五領ケ台、加曽利Ｅ2・3式といった縄文中期土器群であるがこれも出土点数は少ない。最後にⅧ群土器は後期の称名寺、堀之内、加曽利B式土器からなる縄文後期土器群である。

土器の分布をみると昨年度とほぼ同様な傾向がみられる。Ⅰ群は丘陵の頂上部からやや下がった比較的緩やかな斜面上に集中をみせる。II・III群と点数は少なく斜面上に散在するのみであるが、IV群になると爆発的な増加をみる。Ⅰ群と同様な分布をみせるが、その数は膨大になり、広範囲に分布している。V群で数は少なくなり、そして、再びVI群で一気に増加する。遺跡地のほぼ全域から土器が出土しているが、頂上からやや下がった地点と丘陵の縁辺部の2地点で集中をみせる。VII・Ⅷ群についても点数は少ないが、縁辺部に移行して行く傾向がみられる。つまり、当地は縄文時代において早期後半および前期後半の2つの時期をピークとし発展するものの、その前後の時期については衰退を繰り返しているという特徴が伺われる。また、明確な遺構を持たない遺物分布が何を意味するかは不明な点が多い。おそらく未検出の遺構の存在も考慮する必要があるだろう。なお、検出された土器のうち、不明としたものは小片あるいは時期判別不可能な無文のものであり、あわせて今後の課題となった。

Tab. 1　包含層出土の縄文式土器一覧

分類	今年度(3E24) 点数	割合	昨年度(2E24) 点数	割合	合計	割合
Ⅰ群 草創期 撚糸文系	713	9.3	465	5.3	1,178	7.2
II群 早期前半 無文系	25	0.3	32	0.4	57	0.3
III群 早期前半 沈線文系	32	0.4	24	0.3	56	0.3
IV群 早期後半 条痕文系	2,436	31.7	2,026	23.1	4.462	27.2
V群 前期前半 繊維縄文系	15	0.2	155	1.8	170	1.0
VI群 前期後半 竹管文系	2,523	32.8	2,763	31.6	5,286	32.2
VII群 縄文中期土器群	19	0.2	52	0.6	71	0.4
Ⅷ群 縄文後期土器群	90	1.2	127	1.5	217	1.3
不明	1,835	23.9	3,096	35.4	4,931	30.1
合計	7,688	100%	8,740	100%	16,428	100%

石　器（Fig. 36～41・43、PL.10～12）

縄文時代の石器は合計2,840点検出された。器種別でみると昨年度同様に石鏃、削器、打製石斧が目立つ。石鏃はすべて無茎式のものであり、そのうち珪質頁岩製の局部磨製石鏃が1点検出されている。また、打製石斧は短冊形から分銅形まで幅広く検出されている。さらに、未製品と考えられる玦状耳飾2点が本遺跡では初めて出土した。どちらも関東山地北部産出のものと思われる滑石製であり、遺跡地に数点散在する黒色・緑色片岩とともに当時、彼の地域との交易があったことを裏付ける事例であろう。

次に、使用石材であるが、産地との距離、大きさ、硬さや緻密さ、粘り等から便宜的に第1群から第5群石材に分類した。第1群石材としたものは黒曜石、チャート等の珪化が顕著で、緻密な加工に適する石材である。それらの産地は限定され、当然遠隔地から搬入されたものである。貴重な石材であるため、有舌尖頭器、石鏃等の小形の石器に多用されている。その中でも本遺跡では特にチャートが好んで多く使用され、それに比べて黒曜石、珪質頁岩は少ないという特徴がみられる。第2群石材は黒色頁岩、黒色安山岩を代表とする県内産の一般的石材である。産地が

Tab. 2　縄文時代石器石材一覧

石材群	第1群石材				第2群石材						第3群石材						第4群石材			第5群石材		その他	合計
石材 / 種類	A 黒曜石	B チャート	C 珪質頁岩	D 珪質凝灰岩	E 黒色頁岩	F 頁岩	G 黒色安山岩	H 灰色安山岩	I 変質安山岩	J 細粒安山岩	K 石英閃緑岩	L ひん岩	M 輝緑岩	N ホルンフェルス	O 流紋岩	P 蛇紋岩	Q 滑石	R 黒色片岩	S 緑色片岩	T 粗粒安山岩	U 砂岩	V その他	
石槍		1																					1
有舌尖頭器			1																				1
石鏃	3	16	1	1			12							1									34
局部磨製石鏃			1																				1
玦状耳飾																	2						2
石匙					3		1																4
削器					32	3	2														2		39
打製石斧			1		50	3	18		1	4				3				1	2		7	(1)2	92
片刃状石斧						1																	1
磨製石斧																1							1
磨石					2		2		2		11	2			1					14	3	(2)1	38
凹石																				10			10
磨石・凹石																				2			2
敲石										3													3
礫器					1																		1
スタンプ形石器													1										1
蜂の巣石																				2			2
石皿																				4			4
剝片・砕片	6	251	3		1,880	33	317	10	3	14		3		21	2				9	10	33	(3)8	2,603
合計	9	268	7	1	1,968	40	352	10	6	21	11	5	1	25	3	1	2	1	11	42	45	11	2,840

※その他については、(1)雲母石英片岩1点、凝灰質砂岩1点。(2)変質蛇紋岩1点。(3)赤色珪質岩1点、珪質凝片岩1点、雲母石英片岩1点、閃緑岩1点、変質玄武岩1点、変玄武岩1点、デイサイト1点、輝緑凝灰岩1点。

近いため比較的容易に手に入れられ、さらに「粘り」の強い性質をもつことから、削器、打製石斧といった中形の石器に多く利用されている。他の赤城山麓の遺跡においても同様な傾向がみられている。また、石鏃にも利用されているが、第1群のものよりはるかに粗末で、軟弱なものである。多種多様な機能・用途を満足するのに充分な性格を備えていたとも考えられる石材である。第3群石材は、石英閃緑岩やひん岩等である。再加工には不向きで円礫のまま利用されるものであるため、目的に合った素材を河床から採取し使用したと考えられる。磨石に多く利用されている。第4群としたものは滑石、黒色・緑色片岩である。産地が限定されるため、物流研究に有利な資料である。第5群は赤城山麓では至るところにみられる粗粒安山岩および砂岩である。巨大な原材料が簡単に入手できるため蜂の巣石や磨石、凹石等に多く利用されている。

それぞれの石器の分布には偏在性があまりみられず、さらに層位に関係なく出土しているため土器との共伴関係を把握することはできなかったが、どれも丘陵の頂上部からやや下がった比較的緩やかな斜面および丘陵の縁辺に集中をみせている。

2　古墳～平安時代

本遺跡では昨年度の調査で古墳時代終末期の古墳が9基確認された。今回の調査ではB区と呼んだ昨年度の調査区の南東の隣接地から4基の古墳が検出された。規模・形状とも昨年度のものと同様のものであり、一連の古墳群の全貌を明らかにすることができた。ただ、どれも昭和23年に行われた開墾や近年の耕作等により、盛土を削平されており、主体部についても破壊されていたものが多かった。また、M－11号墳についてはその前庭部が既存の家畜飼育用の小屋の下に位置するため今回調査不可能であった。どの古墳の主体部も、安山岩の河原石あるいは山石を自然石の状態で使用し構築されており、その使用石材及び古墳の様相からみると、所産時期は7世紀後半代のものと考えられる。

A区から検出されたZ－2号配石墓は、縄文時代遺物包含層掘削中にS－6号集石としていたものを調査中名称変更したもので、昨年度1基検出されているためZ－2と呼ぶことにした。

1　古　　墳

M－11号墳［綜覧記載漏れ：西大室町上横俵57－2番地］（Fig. 13・16・17、PL. 2・3）

位　置　X93～97、Y79～83グリッド　　**標　高**　155.5m

墳　丘　高さ1.35m。墳丘長東西10.84m、南北(9.16)m。総長東西15.36m、南北(13.28)m。

前　庭　家畜飼育用の小屋の下に位置し、今年度は調査不可能であった。

主体部　形態は掘り方を有する両袖型横穴式石室で、安山岩の自然石による乱石積。主軸方位はS－12°－E。主軸長は4.04m。玄室は長さ2.50m、幅1.54m、羨道長1.54m、羨道幅0.80m。

遺　物　復元できたものは周堀から検出された須恵高台椀（4）である。ほかにも土師器の破片が数多く検出されている。

M－12号墳［綜覧荒砥村96号墳：西大室町上横俵57－1番地］（Fig. 14・18・19、PL. 3）

位　置　X100～104、Y86～89グリッド　　**標　高**　153.5m

墳　丘　高さ1.50m。墳丘長東西10.88m、南北（10.60）m。総長東西15.08m、南北13.80mを測るが、一部耕作等の攪乱が数カ所において認められた。また、南東部の一部は蚕室を建てる際に削平、破壊されている。

前　庭　規模は羨門部から主体部主軸方向南側に3.85mを、深さは0.88mを測る。

主体部　主軸方位はS－20°－E。主軸長3.80m、玄室長2.16m、玄室幅1.10m、羨道長1.64m、羨道幅0.73mで、形態は掘り方を有する横穴式両袖型割石乱石積である。また、掘り方からは裏込めの石が大量に検出された。

遺　物　周堀から土師器の破片が数多く検出されたが、復元できたものはなかった。

M－13号墳［綜覧記載漏れ：西大室町上横俵57－1番地］（Fig. 15・20・21、PL. 4）

位　置　X104～107、Y82～85グリッド　　**標　高**　155.2m

墳　丘　高さ1.10m。墳丘長東西7.28m、南北（7.00）m。総長東西11.60m、南北（10.70）m。北側については耕作により破壊が著しい。

前　庭　規模は羨門部から主体部主軸方向南側に2.24mを、深さは0.53mを測る。

主体部　主軸方位はS－5°－E。主軸長3.36m、玄室長1.98m、玄室幅1.10m、羨道長1.38m、羨道幅0.64mで、形態は掘り方を有する横穴式両袖型割石乱石積である。

遺　物　周堀から土師器の破片が数点が検出されたが、復元できたものはなかった。。

M－14号墳［綜覧記載漏れ：西大室町上横俵57－1番地］（Fig. 22、PL. 4）

位　置　X108～109、Y82・83グリッド　　**標　高**　155.2m

墳　丘　高さ0.60m。墳丘長東西2.95m、南北（2.04）m。総長東西4.20m、南北5.10m。

前　庭　規模は羨門部から主体部主軸方向南側に1.53mを、深さは0.44mを測る。

主体部　主軸方位はS－10°－E。主軸長0.94m、玄室長0.55m、玄室幅0.42m、羨道長0.39m、羨道幅0.32mで、形態は横穴式両袖型割石乱石積である。

2　配石墓

Z－2号配石墓（Fig. 23、PL. 2）

位　置　X82、Y56・57グリッド　　**標　高**　161.3m　　**方　位**　N－35°－E

形　状　A区の丘陵の北東方向へ向かう斜面上に穴を掘り、石組みが存在するだけのものである。斜面上に位置するためか、北側に並んでいたと思われる石はすでに崩れて散乱し、南側の石組みのみ残存していた。そのため規模は長軸1.85m、短軸は測定不可能であった。配石間の空間についても長軸1.25m、短軸測定不可能、深さは0.25mを測る。用途については不明であるが、今回の調査では配石墓と呼んだ。

VI 上横俵遺跡の調査

1 古墳～平安時代

本遺跡は以前から上横俵古墳群の存在が確認されており、昨年度まで委託によって2年間調査が実施されてきた。その結果、丘陵の南～東斜面上を中心に古墳および周溝墓が合計26基確認された。今年度の調査区は昨年度までの調査区の北側の拡張部分であり、丘陵の東斜面上に位置している。本遺跡地は昭和初頭から戦後にかけて開墾が実施されている場所であり、今回の調査途中でも昭和8年に開墾する際、いくつかの古墳を破壊してしまうためその供養を行ったと思われる「御尊霊塔」なる慰霊碑が発見された。また、今回の調査では古墳1基、昨年度までで石室および周堀の一部が調査済であった古墳の未調査部分の西側の周堀2基を検出した。3基とも開墾やその後の耕作による破壊が著しく、昭和10年調査の『上毛古墳総覧』作成時においても規模不明と記されているものである。また、M－2号墳はそれにもましてその周堀が調査区外に延びているため北側の一部が調査不可能であった。今回の調査においてはそれぞれの遺構の呼称については独自に行ったため、今後、民間委託で調査を行ったものとの照合を行わなければならない。（委託による報告書は横俵遺跡群IV）

1 古　墳

M－1号墳［綜覧荒砥村第101号墳：西大室町上横俵62番地］（Fig. 24、PL. 4）

位　置　X89～91、Y111～114グリッド（周堀のみ）　　**標　高**　150.7m

備　考　平成元・2年度に委託によって調査された23号古墳と呼ばれたものの西側の周堀にあたる。（詳細は横俵遺跡群IVを参照）

M－2号墳［綜覧荒砥村第100号墳：西大室町上横俵62番地］（Fig. 25・26、PL. 4・5）

位　置　X90～95、Y104～109グリッド　　**標　高**　148.8m

墳　丘　高さ（2.60）m。墳丘長東西12.50m、南北（11.40）m。総長東西19.50m、南北（19.20）m。

前　庭　規模は羨門部と思われる部分から主体部主軸方向南側に長さ（2.46）mを、深さは0.60mを測る。北西側は攪乱をうけている。

主体部　主軸方位はS－1°－W。主軸長（4.58）m。開墾によるものと思われる破壊が著しく、奥壁および西壁の一部のみを確認。形態は横穴式両袖型割石乱石積と思われる。

M－3号墳［綜覧荒砥村第102号墳：西大室町上横俵62番地］（Fig. 24、PL. 4）

位　置　X89～91、Y115～117グリッド（周堀のみ）　　**標　高**　150.1m

備　考　平成元・2年度に委託によって調査された21号古墳と呼ばれたものの西側の周堀にあたる。（詳細は横俵遺跡群IVを参照）

2 その他の時代

1 炭窯址

K－1号炭窯（Fig. 23、PL. 5）

位 置 X85～87、Y116・117グリッド

形 状 丘陵の東斜面を利用して構築されていた。全長5.10m、幅2.30mの不整形を呈し、残存壁高80cmを測る。壁面は非常によく焼けており、焼土が多量に出土した。また、構築材は楕円状に1～3段が残存していた。

備 考 形状から明治時代以降に使用していたものと思われる。

Ⅶ 熊の穴遺跡の調査

本遺跡は平成元年度に調査団直営による調査が行われ、縄文時代の住居址4軒、土坑19基と遺物包含層および古墳時代の住居址10軒、古墳1基、井戸1基、土坑27基、溝1条が検出された。また、2年度の委託による調査では、同じく縄文時代および古墳時代前期を中心とした遺構が多数確認されている。今回の調査区は元年度に調査が実施された市道556号線の東側にあたり、隣接した部分での遺構・遺物の分布状況から昨年度までの成果との関わりが予想された。調査の結果、古墳時代前期の住居址1軒、土坑14基が検出された。また、1948（昭和23）年以来、赤城山南麓地域における後期弥生式土器の研究の中で熊の穴遺跡を調査した周東隆一氏が調査したものと思われる住居址らしきものが1軒確認されたが、破壊がひどかったため今回は調査不可能として扱った。さらに、縄文時代については遺構はもとより同時期の遺物包含層も確認されなかった。これは、地形的に今年度の調査区が西側の丘陵から続く台地の縁辺部にあたり、東側の谷地へ下る緩やかな傾斜地であることが起因していると思われる。

1 住居址

H－11号住居址（Fig. 27、PL. 5）

位 置 X117・118、Y24・25グリッド

面 積 (13.43)m　**方 位** N－90°－E

形 状 長軸（4.10）m、短軸3.86mの隅丸方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は38cmを測る。西壁は調査区外のため確認できなかった。

床 面 使用面がハードローム層まで掘り込まれていなかったため、やわらかく検出が難しかったが、一部堅緻面も認められた。また、北東側が一部低くなり、いわゆるベッド状遺構と思われるものが確認できた。住居址に関係する柱穴は認められなかった。

炉 址 中央よりやや北側に検出。楕円形を

呈し、長径85cm、短径56cm、深さ13cmを測る。

貯蔵穴 北東隅に（P1）が検出された。規模は長径45cm、短径40cm、深さ33cmを測る。

遺　物 土師甕（2・3・4）が3点出土した。

2 土　坑

D－31号土坑（Fig. 28）

位　置 X117、Y23グリッド

形　状 長径48cm、短径40cmの円形を呈する。深さは62cmを測る。

D－32号土坑（Fig. 28）

位　置 X117、Y23グリッド

形　状 長径44cm、短径40cmの円形を呈する。深さは48cmを測る。

D－33号土坑（Fig. 28）

位　置 X118・119、Y23・24グリッド

形　状 長径120cm、短径95cmの楕円形を呈し、深さは38cm、底面は平坦。

D－34号土坑（Fig. 28）

位　置 X117、Y26グリッド

形　状 長径38cm、短径36cmの円形。深さは20cmを測る。

D－35号土坑（Fig. 28）

位　置 X118、Y27グリッド

形　状 長径40cm、短径36cmの円形を呈する。深さは28cmを測る。平坦な底面をもつ。

D－36号土坑（Fig. 28）

位　置 X117、Y28グリッド

形　状 長径44cm、短径42cmの円形を呈する。深さは42cmを測る。

D－37号土坑（Fig. 28）

位　置 X118、Y28・29グリッド

形　状 長径55cm、短径48cmの円形を呈する。深さは38cmを測る。

D－38号土坑（Fig. 28）

位　置 X118・119、Y29グリッド

形　状 長径44cm、短径42cmの円形を呈する。深さは32cmを測る。

D－39号土坑（Fig. 28）

位　置 X119、Y31グリッド

形　状 長径70cm、短径68cmの円形を呈する。深さは24cmを測る。

D－40号土坑（Fig. 28）

位　置 X119、Y31・32グリッド

形　状 長径62cm、短径52cmの円形を呈する。深さは38cmを測る。平坦な底面をもつ。

D－41号土坑（Fig. 28）

位　置 X120、Y33・34グリッド

形　状 長径70cm、短径58cmの楕円形を呈し、深さは46cmを測る。底面は平坦。

D－42号土坑（Fig. 28）

位　置 X120、Y34グリッド

形　状 長径68cm、短径48cmの楕円形を呈し、深さは40cmを測る。平坦な底面をもつ。

D－43号土坑（Fig. 28）

位　置 X119、Y34グリッド

形　状 長径52cm、短径42cmの楕円形を呈し、深さは16cmを測る。平坦な底面。

D－44号土坑（Fig. 28）

位　置 X119、Y35グリッド

形　状 長径36cm、短径32cmの楕円形を呈し、深さは20cmを測る。平坦な底面をもつ。

Ⅷ　成果と問題点

横俵遺跡群の発掘調査は今年度で4年次を迎えた。今年度の調査は昨年度までの未調査地区である拡張部分について行ったため、各遺跡とも検出された遺構は少なかった。ただ、そのような中でも熊の穴遺跡での縄文時代および古墳時代の遺構分布の範囲、上横俵・熊の穴Ⅱ遺跡における古墳群の構成と位置関係、そして、丘陵地を中心に位置する熊の穴Ⅱ遺跡では、縄文時代の住居址をはじめとする遺構分布や斜面に存在する草創期から後期に至る遺物包含層の様相等を、さらに正確に把握することができた調査であった。そこで以下、各遺跡を総括して時代ごとに今年度の調査の成果をまとめてみたい。

縄文時代

今回の縄文時代の調査は、昨年度、遺物包含層が確認された地点の隣接地を行うため、当初から包含層の存在が想定されていた。そこで、包含層の範囲の確定や遺物の集中地点等を鑑みながら調査を実施した。昨年度の調査で遺構量が少ないにもかかわらず、土器・石器等の遺物が大量に出土したという問題が提起されていたため、未検出の遺構があったのではないかという予想の中で、掘削中は慎重にプラン確認を行いながら調査を進めていったが、今年度は昨年度にまして遺構は少なかった。今回の調査区が丘陵の東から北への斜面上に位置するということもこのことの一因と考えられよう。ただ、遺物の出土量については昨年度並であり、遺構量に遺物の量が比例しないという事例を、本遺跡の所在する丘陵全体の特徴としてとらえることができた。

土器は昨年度同様草創期撚糸文系土器から後期加曽利B式土器まで断続的に検出された。このうち遺跡の主体となる土器型式は、竹管文系土器群とした前期後半諸磯a・b式土器であるが、南側に隣接する昨年度の調査区と比較すると、今年度は条痕文系の土器が多い。特に尖底土器の底部が多く出土し、その中には器形復元できたものもあったが、ほかは小破片が中心で接合資料は数少く、器形、文様構成等についても不明な点が多い。土器全般においては、昨年度より古いものが多く、縄文時代の本丘陵における生活域をとらえる一資料となった。また、検出された遺構は、遺物が出土したものは少ないが、昨年度の調査で諸磯a・b期の土器を伴う住居址、竪穴状遺構等が確認されているため、今年度検出された遺構もこの時期に関わるものであると考えられる。その中でもいわゆる「陥し穴」は確認済みのものも含め丘陵地の縁辺に分布しているが、土坑長軸とコンタの関係は一律ではなかった。同時性の問題や狩猟面の評価は極めて難しい要素を含んでおり、今後に残る大きな課題といえるが、早期後半条痕文系の土器が周辺から多数出土していることは、何らかの意味を示めしているものと思われる。平成元・2年度の熊の穴遺跡の調査でも諸磯a・b期の住居址4軒、数基のいわゆる「陥し穴」、および縄文前期を主体とした遺物包含層が確認されており、当丘陵から台地にかけての、この地の繁栄を想像することができる。赤城山南麓の近隣地区における縄文前期の資料をみると、いずれも前期の遺跡は丘陵状の地形に立地している。本遺跡についても符号する事例となった。ただし、本遺跡のひとつ南の丘陵に位置する上横俵遺跡では、縄文時代の遺構・遺物の検出例は少ない。当時の人々は何を考え本

遺跡の丘陵を選んだのであろうか。

石器石材については、昨年度と同様に黒色頁岩、黒色安山岩の占める割合が多い。少数の出土しかみられなかった石材のうちでは、特筆すべきものに滑石と黒色・緑色片岩をあげることができる。どちらも秩父・多野地方に産地があるものであり、当然、その地域との交流があったものと考えられる。黒色片岩の製品は打製石斧1点のみの出土であり、加工に際しての剝片が遺跡内から検出されていないことから、おそらく原産地の周辺で加工されたものを搬入したのであろう。また、棒状を呈する緑色片岩製のものが遺跡内から数点出土していることは、緑色片岩製の石器が単なる実用品ではなく、何らかの特殊な意味をもつ道具としての性格を有していると推定される。滑石製の玦状耳飾についても同様のことが考えられるが、今回出土したものが未製品であるということは、ある程度まで加工したものを搬入し、遺跡内で完成させるという工程をとっていたのか、あるいは原石を遺跡内で初めから加工しようとしたものであったのか定かではないが、これらの事例を解明することは今後の課題となった。

2年次にわたる熊の穴Ⅱ遺跡の縄文時代遺物包含層を中心とした調査では、草創期撚糸文土器や前期後半の浮島・興津式土器の検出等、貴重な事例を提供できた。ただ、同時性を示すような土器と石器の関係は、出土層位および分布状況において決定的な根拠を欠いているため把握することはできなかった。同一地点の断続的占地が著しい縄文遺跡の分析は多岐に及ぶ問題を残しており、さらにデータを積み上げて検討していく必要があるだろう。

古墳時代

本遺跡では昨年度の調査で小円墳が9基確認されており、今回の調査で検出された4基をあわせ13基が丘陵の南側の縁辺部に構築され、当時完全な墓域として展開していた本群集墳の様相が明らかになった。ただ、コンタの流れから予想すると、現在の住宅地周辺の未調査部分にも数基が存在する可能性が高い。来年度の調査によって、熊の穴古墳群の全貌が解明されることだろう。古墳の開口部は昨年度のものも含めすべてコンタに対して直角であり、斜面を利用したいわゆる「山寄せ」の形態をとる。規模・形状等をみると粕川村月田古墳群・西原古墳群に類似しており、とくに前庭部はほとんどの古墳において深く掘り込まれている。本古墳群が存在する赤城山南麓においては、このような丘陵状地形および台地の縁辺部に展開する古墳群の類例は多い。また、今回の調査では埴輪は出土しなかったため、いずれの古墳にも埴輪の樹立はなされなかったものと思われる。このことから本古墳群は埴輪消滅後の7世紀後半代のものと考えられる。

今年度確認した古墳のうちM－14号墳は小規模なもので、本古墳群の中でも特殊な事例となった。玄室の長さは55cm、幅42cmと埋葬施設の内部は狭く、当時の成人でさえ伸展で埋葬することはまず不可能であり、乳幼児の埋葬施設だったとも考えられる。ただし、小規模ながら周囲の古墳と同様な構築方法が用いられており、他の古墳の埋葬者と同等の階級の人物が葬られていた可能性が高い。同様な規模・形状をもつものは、本古墳群から比較的近距離にある荒砥二之堰遺跡や赤堀町下触牛伏遺跡でも確認されている。

今年度の上横俵遺跡の調査では3基の古墳を検出した。昨年度まで実施されていた委託による隣接する同遺跡の調査では、古墳および周溝墓が同時期に存在していたものではないが合わせて

約30基確認されており、上横俵遺跡が位置する丘陵についてもその縁辺部全体が墓域となり、いわゆる「山寄せ」の形態をとる古墳群が展開していたことが解明された。しかし、当地は昭和時代に入ってからの開墾等に伴う掘削が激しく、とくに東側の縁辺部に位置する古墳の残存状態は極めて悪かった。このことは、M－2号墳の周辺から発見された「御尊霊塔」なる石碑に昭和8年の春に開墾のため破壊された古墳を供養した旨が銘記されていたことからも、かなり大規模な開墾が実施されたことがうなずける。昭和10年調査の『上毛古墳総覧』をみても、今回周溝のみを確認したM－1号墳、M－3号墳にあたる2基については「畑　原型ヲトゞメズ」と記されている。また、古墳群全体をみると丘陵の東斜面に存在する古墳でさえも開口部は南向きであり、ひとつ北側の丘陵に存在する熊の穴古墳群と様相は異なる。さらに、出土遺物、周溝墓が検出されていること、古墳の規模が熊の穴古墳群に比べて大きいものが多いことなどから、本古墳群は熊の穴古墳群より古いものであると考えられる。なお、上横俵遺跡全般については横俵遺跡群IVを参照していただきたい。

昭和63年度から実施されている横俵遺跡群の調査も残すところわずかになった。今年度までに蓄積された調査結果および周辺遺跡の資料をあわせて比較・検討することによって、旧石器時代に始まる人々の生活の痕跡が残り、現在もまた生まれ変わろうとしているこの横俵の地の古代における全貌が解明される日もそう遠いものではないだろう。

参　考　文　献

群馬県　1988　『群馬県史　資料編1　原始古代1　旧石器・縄文』　群馬県史編さん室
前橋市　1971　『前橋市史　第1巻』　前橋市史編さん委員会
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1985　『荒砥二之堰遺跡』
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986　『下触牛伏遺跡』
北橘村教育委員会　群馬県教育委員会　日本道路公団　1986　『分郷八崎遺跡』
建設省　群馬県教育委員会　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1990　『掘下八幡遺跡』
建設省　群馬県教育委員会　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1991　『飯土井中央遺跡』
建設省　群馬県教育委員会　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1991　『飯土井二本松遺跡　下江田前遺跡』
群馬県教育委員会　1990　『舞台・西大室丸山』
笠懸村教育委員会　1981　『笠懸村和田遺跡』
粕川村教育委員会　1982　『月田古墳群$_{B1}$　昭和55年・56年度発掘調査の概要』
粕川村教育委員会　1985　『西原古墳群$_{K5}$』
粕川村教育委員会　1989　『白藤古墳群』
粕川村教育委員会　1985　『粕川村の遺跡』
大胡町教育委員会　1986　『上大屋・樋越地区遺跡群』
安中市教育委員会　安中市福祉事務所　1990　『榎木畑遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1985　『柳久保遺跡群Ⅰ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1988　『柳久保遺跡群Ⅴ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1988　『柳久保遺跡群Ⅶ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1991　『内堀遺跡群IV』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1990　『横俵遺跡群Ⅰ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1991　『横俵遺跡群III』

Tab. 3　縄文式土器観察表

番号	出土位置	①胎土　②焼成　③色調　④残存	文様要素・文様構成・器形の特徴	備　考
1	X85Y62	①中粒(黒雲母)②良好③にぶい黄橙④口縁部	口縁部内面から頸部まで縄文ＲＬ。胴部に撚糸文Ｌ。	撚糸文系
2	X89Y62	①中粒(黒雲母)②良好③明褐④口縁部	口唇部から頸部まで縄文ＲＬ。胴部に撚糸文Ｒ。	撚糸文系
3	X84Y60	①中粒(黒雲母・白色鉱物)②良好③橙④口縁部	口唇部から頸部に縄文ＲＬ。	撚糸文系
4	X83Y63他	①細粒(黒雲母・白色鉱物)②良好③橙④口縁部	口唇部に縄文ＬＲ。口縁部から頸部に撚糸文Ｌ。	撚糸文系
5	X84Y60	①細粒(黒雲母)②極良③赤褐④口縁部	縄文ＲＬ。	撚糸文系
6	X82Y64	①細粒②良好③橙④口縁部	撚糸文Ｒ。	撚糸文系
7	X83Y60	①細粒(白色鉱物)②良好③橙④口縁部	口唇部から頸部に縄文ＲＬ。	撚糸文系
8	X82Y60他	①細粒②良好③明赤褐④口縁部	撚糸文Ｒ。	撚糸文系
9	X83Y64	①細粒(黒雲母)②良好③橙④口縁部	縄文ＲＬ。	撚糸文系
10	X85Y60	①中粒②良好③赤褐④口縁部	口唇部に縄文ＬＲ。頚部に縄文ＲＬ。	撚糸文系
11	X84Y60	①細粒②良好③赤褐④口縁部	口唇部に縄文ＲＬ。撚糸文Ｌ。	撚糸文系
12	X83Y60	①細粒②極良③明赤褐④口縁部	縄文ＲＬ。	撚糸文系
13	X88Y62	①細粒②不良③にぶい橙④口縁部	撚糸文Ｒ。	撚糸文系
14	X90Y62	①細粒②良好③にぶい赤褐④口縁部	撚糸文Ｒ。	撚糸文系
15	X82Y60	①細粒②極良③明赤褐④口縁部	口縁部折り返し。縄文ＲＬ。	撚糸文系
16	X82Y58	①細粒(黒雲母)②良好③明赤褐④口縁部	縄文ＲＬ。	撚糸文系
17	X82Y60	①細粒(白色鉱物)②良好③橙④口縁部	縄文ＲＬ。	撚糸文系
18	X82Y57	①中粒(黒雲母・白色鉱物)②良好③明赤褐④底部	撚糸文Ｒ。	撚糸文系
19	X84Y60	①中粒(白色鉱物)②極良③灰④口縁部	口縁部無文帯・沈線・粗大な撚糸文Ｒ。	花輪台
20	X87Y59	①中粒(白色鉱物)②極良③にぶい黄褐④口縁部	口縁部無文帯。	花輪台
21	X84Y61	①中粒(白色鉱物)②良好③にぶい褐④胴部	粗大な撚糸文Ｒ。	花輪台
22	X87Y63	①細粒②極良③にぶい赤褐④胴部	撚糸条痕文。	撚糸文系
23	X82Y57	①中粒②良好③明赤褐④口縁部	撚糸条痕文。	撚糸文系
24	X82Y60	①細粒(黒雲母)②不良③橙④口縁部	撚糸条痕文。	撚糸文系
25	X84Y62	①細粒(長石)②良好③明赤褐④底部	撚糸条痕文。	撚糸文系
26	X84Y50	①中粒②良好③明赤褐④胴部	撚糸条痕文。	撚糸文系
27	X82Y57	①細粒(白色鉱物)②良好③明黄褐④口縁部	無文。	無文系
28	X90Y62	①中粒(白色鉱物)②良好③明黄褐④底部	無文。	無文系
29	X91Y59	①細粒(黒雲母)②良好③橙④口縁部	無文。	無文系
30	X86Y63	①細粒②良好③にぶい赤褐④胴部	沈線。	田戸上層
31	X85Y58	①細粒(白色鉱物)②良好③にぶい赤褐④胴部	沈線。貝殻腹縁。	田戸上層
32	X85Y57	①粗粒②不良③にぶい赤褐④胴部	沈線。貝殻腹縁。	田戸上層
33	X83Y59	①細粒②不良③にぶい橙④胴部	沈線区画内に貝殻腹縁を充填。	田戸上層
34	X96Y56	①中粒(白色鉱物)②良好③赤褐④胴部	横位沈線。貝殻腹縁。	田戸上層
35	X83Y63	①中粒(白色鉱物)②良好③橙④胴部	横位・斜位沈線。	田戸上層
36	X83Y63	①細粒(白色鉱物)②不良③にぶい赤褐④胴部	沈線。貝殻腹縁。	田戸上層
37	X84Y61	①繊維②良好③にぶい黄橙④口縁部	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。貝殻腹縁。	条痕文系
38	X86Y60	①繊維②良好③にぶい黄橙④口縁部	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。絡条体圧痕。	条痕文系
39	X86Y60	①繊維②良好③橙④口縁部	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。肥厚する口唇部に刻み。	条痕文系
40	X83Y60	①繊維②不良③灰黄褐④口縁部	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。口唇部隆起帯に刻み。	条痕文系
41	X84Y59	①繊維②不良③明黄褐④口縁部	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。口唇部から胴部に絡条体圧痕。	条痕文系
42	X81Y59他	①繊維②良好③橙④口縁部	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。絡条体圧痕。	条痕文系
43	X82Y64	①繊維②良好③にぶい橙④口縁部	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。肥厚する口唇部に刻み。絡条体圧痕。補修孔。	条痕文系
44	X91Y60他	①繊維②不良③橙④口縁部	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。口唇部に刺突。格子目の隆帯に刺突状の刻み。	条痕文系
45	X87Y63	①繊維②良好③橙④胴下部	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。	条痕文系
46	X85Y62他	①繊維②良好③にぶい橙④１／３	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。現存高16.9cm。	条痕文系
47	X82Y58	①繊維②良好③にぶい黄橙④底部	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。	条痕文系
48	X86Y64	①繊維②良好③にぶい橙④底部	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。	条痕文系
49	X85Y63	①繊維②不良③橙④底部	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。	条痕文系
50	X87Y51	①繊維②良好③にぶい橙④底部	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。	条痕文系

番号	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様要素・文様構成・器形の特徴	備考
51	X82Y57	①繊維②良好③にぶい橙④底部	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。	条痕文系
52	X82Y60他	①繊維②良好③にぶい黄橙④口縁部	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。口唇部に小さな刻み。	条痕文系
53	X82Y61他	①繊維②良好③にぶい橙④1／4	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。口径29.0cm。高さ30.2cm。	条痕文系
54	X83Y62他	①繊維②良好③にぶい橙④胴部	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。現存高21.7cm。	条痕文系
55	X85Y62	①繊維②不良③にぶい黄橙④胴部	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。	条痕文系
56	X83Y61他	①繊維②良好③にぶい橙④1／4	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。現存高21.1cm。	条痕文系
57	X85Y62	①繊維②不良③にぶい橙④胴部	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。	条痕文系
58	X82Y57	①繊維②良好③橙④胴部	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。	条痕文系
59	X83Y61他	①繊維②良好③にぶい黄橙④口縁部～胴部	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。	条痕文系
60	X85Y64	①繊維②良好③明赤褐④胴部	内外面ともアナダラ属による貝殻条痕。	条痕文系
61	X83Y63	①繊維②不良③明赤褐④胴部	半截竹管による綾杉状の平行沈線。	黒浜
62	X87Y61	①繊維②良好③にぶい橙④口縁部	縄文ＲＬ。	黒浜
63	X84Y62	①繊維②良好③にぶい赤褐④胴部	半截竹管による平行沈線・コンパス文。	黒浜
64	X87Y62	①繊維②良好③橙④胴部	半截竹管による平行沈線・コンパス文。	黒浜
65	X85Y63	①細粒(白色鉱物)②極良③褐灰④口縁部	半截竹管による連続爪形文と刻み。	諸磯a
66	X120Y35	①細粒(白色鉱物)②極良③にぶい赤褐④口縁部	半截竹管による連続爪形文と刻み。	諸磯a
67	X85Y63	①細粒(金雲母)②極良③にぶい赤褐④頸部～胴部	無文。	諸磯
68	X83Y59	①中粒②極良③赤褐④頸部	平行沈線。隆帯。	諸磯b
69	X96Y79	①細粒(白色鉱物)②極良③明赤褐④胴部	半截竹管による連続爪形文と刻み。	諸磯a
70	X94Y61他	①中粒(白色鉱物)②不良③にぶい橙④底部	無文。	諸磯
71	X86Y56	①中粒(黒雲母)②良好③にぶい黄橙④胴部	櫛歯状工具による波状文。地文に縄文ＲＬ。	諸磯a
72	X86Y57	①中粒(黒雲母)②極良③橙④口縁部	口唇部に刻み。半截竹管による平行沈線を連続爪形文で充填。円管文。	諸磯a
73	X86Y56	①細粒(黒雲母)②良好③にぶい黄④胴部	半截竹管による平行沈線を連続爪形文で充填。地文に縄文ＲＬ。	諸磯a
74	X94Y56	①細粒(黒雲母)②極良③明赤褐④胴部	円管文。肋骨文。	諸磯a
75	X86Y56	①細粒(黒雲母)②良好③浅黄④口縁部	半截竹管による平行沈線を連続爪形文・斜め刻みで充填。櫛歯状工具による波状文。地文に縄文RL。	諸磯a
76	X93Y57他	①中粒(石英)②良好③明黄褐④胴部	半截竹管による平行沈線を連続爪形文で充填。地文に縄文ＬＲ。	諸磯b
77	X94Y60他	①中粒(白色鉱物)②良好③橙④胴部	半截竹管による平行沈線を連続爪形文で充填。地文に縄文ＬＲ。	諸磯b
78	X93Y60他	①中粒(石英)②良好③にぶい赤褐④口縁部	半截竹管による平行沈線を連続爪形文で充填。地文に縄文。	諸磯a
79	X91Y63他	①細粒②極良③にぶい橙④口縁部～胴部	半截竹管による平行沈線。4単位の波状口縁。波頂部は山形。口径29.0cm。現存高23.8cm。	諸磯b
80	X94Y59他	①細粒②極良③にぶい褐④口縁部	半截竹管による平行沈線の横線・孤線。	諸磯b
81	X86Y56他	①中粒②良好③橙④胴部	半截竹管による平行沈線。地文に縄文ＲＬ。	諸磯b
82	X95Y56	①中粒(白色鉱物)②良好③にぶい褐④口縁部	半截竹管による平行沈線。	諸磯b
83	X83Y64	①中粒(黒雲母)②良好③明赤褐④胴部	半截竹管による平行沈線・鋸歯文。地文に縄文ＬＲ。	諸磯b
84	X95Y58	①中粒(黒雲母)②極良③明赤褐④口縁部	半截竹管による平行沈線。	諸磯b
85	X83Y58	①中粒(黒雲母)②良好③にぶい橙④頸部	半截竹管による平行沈線。地文に縄文ＲＬ。	諸磯b
86	X95Y59他	①細粒②良好③にぶい赤褐④口縁部～胴部	半截竹管による平行沈線。地文に縄文ＲＬ。現存高22.8cm。	諸磯b
87	X93Y57他	①細粒②極良③にぶい橙④胴部	浮線文。地文に縄文ＲＬ。現存高6.4cm。	諸磯b
88	X94Y59他	①中粒②極良③浅黄④胴部	平行する浮線文間に円形刺突。	諸磯b
89	X94Y60	①中粒②良好③にぶい黄④胴部	浮線文を貼付後、縄文ＲＬを施文。	諸磯b
90	X96Y56	①中粒②極良③黄褐④胴部	平行する浮線文間に円形刺突。	諸磯b
91	X83Y59他	①細粒②極良③にぶい橙④胴部～底部	浮線文貼付後、縄文ＲＬ。現存高8.0cm。	諸磯b
92	X83Y61	①粗粒②良好③明赤褐④胴部	地文に縄文ＲＬ。浮線文を貼付後、縄文ＲＬを施文。	諸磯b
93	X88Y62	①粗粒②良好③にぶい赤褐④底部	浮線文に幅広の刻み。地文に縄文ＲＬ。	諸磯b
94	X93Y57	①中粒(白色鉱物)②良好③にぶい橙④口縁部	地文に縄文ＲＬ。浮線文を貼付後、縄文ＲＬを施文。	諸磯b
95	X91Y62	①中粒②良好③灰オリーブ④口縁部	浮線文。	諸磯b
96	X95Y61他	①中粒②良好③褐④胴部	浮線文。地文に縄文Ｌ。	諸磯b
97	X94Y62他	①細粒②極良③にぶい橙④胴部	浮線文。	諸磯b
98	X82Y62	①細粒(石英)②極良③明赤褐④口縁部	縄文ＲＬ。口縁部無文帯。	諸磯
99	X94Y58	①中粒(黒雲母)②良好③明赤褐④底部	縄文ＲＬ。	諸磯
100	X86Y63	①中粒②良好③黄橙④胴部	縄文Ｌ。	諸磯

番号	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様要素・文様構成・器形の特徴	備考
101	X89Y62	①中粒(黒雲母)②良好③浅黄橙④胴部	太い縄文ＲＬをまばらに施文。	諸磯
102	X96Y56他	①細粒②極良③黄褐④口縁部～胴部	貝殻腹縁文による変形爪形文。口唇部に刻み。	浮島
103	X84Y59	①細粒②良好③にぶい黄橙④口縁部	半截竹管による平行沈線。変形爪形文。	浮島
104	X86Y60	①中粒(黒雲母)②良好③にぶい黄橙④口縁部	縄文ＲＬ。口唇部に刻み。	諸磯
105	X93Y64	①粗粒(白色鉱物)②極良③橙④口縁部	口唇部に刻み。沈線。変形爪形文。	浮島
106	X93Y63他	①細粒②良好③暗紫灰④口縁部	半截竹管による平行沈線。口唇部に刻み。	浮島
107	X87Y58	①細粒(白色鉱物)②良好③橙④胴部	疑似貝殻文による横位の連続刺突。2単位の横位連続刺突。	興津
108	X84Y62	①細粒(白色鉱物)②良好③橙④胴部	疑似貝殻文による横位の連続刺突。2単位の横位連続刺突。	興津
109	X98Y80	①中粒(黒雲母)②極良③橙④口縁部	口縁に沿った微隆起区画に2列円形刺突。胴部微隆起による文様区画。0段多条縄文ＬＲ。	加曽利Ｅ4
110	X81Y59	①中粒(白色鉱物)②良好③にぶい橙④把手部	橋状把手。微隆起区画。縄文Ｒ。	加曽利Ｅ
111	X95Y62	①細粒(黒雲母)②極良③橙④口縁部⑤	口縁に沿って沈線区画。縄文ＲＬ。	加曽利Ｅ4
112	X101Y95	①細粒(黒雲母)②極良③橙④胴部	縦位沈線区画中に0段多条縄文ＲＬを充填。	加曽利Ｅ3
113	X108Y79	①中粒(黒雲母)②良好③黄橙④底部	縦位沈線区画。	加曽利Ｅ3
114	X97Y89	①中粒(黒雲母)②良好③にぶい黄④胴部	沈線。縄文ＬＲ。	称名寺1
115	X97Y89	①中粒(黒雲母)②良好③浅黄橙④胴部	沈線。縄文ＬＲ。	称名寺1
116	X97Y80	①細粒(黒雲母)②極良③にぶい黄橙④口縁部	沈線。縄文ＲＬ。隆帯に刻み。	堀之内2
117	X95Y56	①細粒(白色鉱物)②極良③明赤褐④口縁部	平行沈線。ボタン状貼付文。	加曽利Ｂ2
118	X91Y57	①細粒(黒雲母)②極良③にぶい橙④口縁部	沈線。隆帯に刻み。縄文Ｒ。段違いの区画線。	加曽利Ｂ2
119	X91Y56他	①細粒(黒雲母)②極良③橙④口縁部～胴部	紐線文。縄文ＬＲ。	加曽利Ｂ
120	X85Y59	①細粒(白色鉱物)②良好③にぶい黄橙④突起部	円形の突起。中心に円孔。	加曽利Ｂ2
121	X90Y62他	①細粒(黒雲母)②良好③にぶい橙④ 1／2	無文。底に網代痕。1本潜り1本超え。口径17.4cm、高さ16.5cm。	加曽利Ｂ2
122	X99Y87	①中粒(白色鉱物)②良好③明赤褐④底部	無文部。底に網代痕。2本潜り2本超え。	加曽利Ｂ2
123	X91Y57	①中粒(黒雲母)②極良③橙④底部	底に網代痕。4本潜り2本超え。	加曽利Ｂ2
124	X102Y92	①中粒(黒雲母)②良好③にぶい橙④胴部	沈線。段違いの区画線。	加曽利Ｂ2

註) 表の記載は以下の基準で行った。

① 胎土は細粒(0.9㎜以下)、中粒(1.0～1.9㎜)、粗粒(2.0㎜以上)とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載した。

② 焼成は極良・良好・不良の3段階とした。

③ 色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帖(小山・竹原1976)によった。

④ 残存は復元個体に限って記載。その他の小片については所属部位を記載した。

Tab. 4　縄文時代石器観察表

番号	出土位置	器種	長	幅	厚	重さ	石材	備考
1	X83Y62	石鏃	1.0	1.1	0.2	0.1	チャート	平基無茎鏃。小形石鏃。
2	X85Y62	石鏃	1.2	0.9	0.3	0.8	チャート	両側縁が平行を呈し、三角形より五角形に近い。
3	X95Y61	石鏃	1.3	(0.9)	0.3	(0.2)	黒曜石	凹基無茎鏃の左側縁の欠損品。
4	X84Y63	石鏃	2.0	0.3	0.4	0.4	チャート	小型の凸基有茎鏃。
5	X83Y58	石鏃	(1.2)	1.4	0.4	(0.6)	ホルンフェルス	凹基無茎鏃の先端部の欠損品。
6	X85Y65	石鏃	(1.3)	(1.2)	0.5	(0.3)	チャート	左側縁の欠損。
7	X85Y62	石鏃	1.7	1.6	0.5	0.3	チャート	左側縁が外湾する。未成品か。
8	X83Y58	石鏃	2.0	1.4	0.4	0.4	黒曜石	凹基無茎鏃。
9	X88Y62	石鏃	1.7	1.3	0.4	0.6	黒色安山岩	平基無茎鏃。
10	X84Y61	石鏃	(1.6)	1.6	0.4	(0.8)	チャート	先端部の欠損。凹基無茎鏃。
11	X84Y60	石鏃	1.8	0.3	0.5	0.8	黒色安山岩	右側縁が外湾している。
12	X82Y60	石鏃	1.9	(1.2)	0.3	(0.5)	珪質凝灰岩	左側基部の欠損。
13	X85Y61	石鏃	1.7	1.7	0.4	0.5	黒曜石	三角鏃。
14	X93Y62	石鏃	2.3	1.7	0.4	1.1	チャート	両側縁に微細な剝離。
15	表採(3E24)	石鏃	2.7	1.5	0.4	1.4	黒色安山岩	凹基無茎鏃。
16	X83Y62	石鏃	1.9	(1.2)	0.3	(0.3)	チャート	右側基部の欠損。基部に深い抉りが見られる。凹基無茎鏃。
17	X83Y62	石鏃	1.9	(1.4)	0.5	(0.9)	黒色安山岩	左側基部の欠損。平基無茎鏃。
18	X86Y60	石鏃	1.7	1.5	0.3	0.5	チャート	凹基無茎鏃。
19	X86Y60	石鏃	2.5	(1.4)	0.5	(1.2)	チャート	左側基部の欠損。平基無茎鏃。
20	X88Y62	石鏃	2.3	1.3	0.6	0.6	チャート	凹基無茎鏃。
21	X90Y56	石鏃	2.4	1.5	0.4	0.6	チャート	凹基無茎鏃。
22	X90Y56	石鏃	2.5	2.0	0.6	2.2	チャート	基部に粗雑な剝離を残す未成品。
23	X94Y63	石鏃	(1.9)	1.2	(0.4)	(0.8)	チャート	先端部、基部の両端を欠く凹基無茎鏃。
24	X86Y64	石鏃	2.1	(1.5)	0.4	(0.7)	珪質頁岩	左側基部の欠損。凹基無茎鏃。
25	表採(3E24)	石鏃	(2.2)	(1.8)	0.5	(1.5)	黒色安山岩	先端部、左側基部の欠損。凹基無茎鏃。
26	X82Y62	石鏃	2.6	(1.4)	0.5	(1.4)	黒色安山岩	右側基部の欠損。凹基無茎鏃。
27	X95Y57	石鏃	3.0	(1.4)	0.4	(1.6)	黒色安山岩	左側基部の欠損。凹基無茎鏃。
28	X85Y59	石鏃	2.3	(1.6)	0.6	(2.3)	黒色安山岩	左側基部の欠損。平基無茎鏃。
29	X82Y62	石鏃	2.8	1.9	0.6	1.4	黒色安山岩	凹基無茎鏃。
30	X96Y57	石鏃	2.0	1.6	0.4	0.7	チャート	凹基無茎鏃。
31	看板予定地	石鏃	2.4	1.3	0.4	1.0	チャート	両側縁に抉り状の調整を加えている。凹基無茎鏃。
32	表採(3E19)	石鏃	3.0	2.1	0.4	1.5	黒色安山岩	基部に深い抉り、両側縁に抉りが入る。
33	X96Y58	石鏃	2.7	2.3	0.5	1.8	黒色安山岩	凹基無茎鏃。
34	X88Y59	石鏃	3.2	2.5	0.8	4.2	黒色安山岩	全体に粗い剝離が残る未成品。
35	X91Y63	局部磨製石鏃	2.9	1.4	0.4	1.5	珪質頁岩	石器表裏両面中央部が研磨されている。
36	X90Y62	有舌尖頭器	3.5	1.2	0.3	1.0	珪質頁岩	古い時代の中でも最終段階の物か。
37	X84Y61	石槍	5.5	1.6	1.0	6.4	チャート	粗い剝離によって器体を形成。
38	X88Y59	玦状耳飾	2.3	2.4	0.6	5.3	滑石	下端部からの切れ込みが入り切っていない未成品。
39	X89Y59	玦状耳飾	(2.3)	(1.2)	(1.0)	(2.8)	滑石	右側半分の欠損。
40	X85Y61	石匙	5.1	6.0	1.7	32.4	黒色安山岩	横型石匙。
41	X87Y57	石匙	4.5	2.8	0.8	7.5	黒色頁岩	縦型石匙。
42	X83Y60	石匙	4.5	5.6	0.9	16.5	黒色頁岩	横型石匙の未成品もしくは粗製品。
43	X87Y58	石匙	(4.4)	7.6	1.0	(22.5)	黒色頁岩	つまみ部分の欠損。
44	X87Y60	削器	7.2	3.3	1.2	23.7	黒色頁岩	右側縁を中心に調整を加える。
45	X93Y59	削器	6.9	2.3	0.6	9.2	黒色頁岩	右側縁に集中して調整を加える。
46	X92Y57	削器	8.8	3.9	1.7	50.0	黒色頁岩	左側縁に自然面、右側縁に刃部を形成。
47	X106Y76	削器	9.0	3.1	1.4	37.7	黒色頁岩	裏面の右側縁を中心に調整剝離。
48	X83Y60	削器	11.0	2.6	1.2	37.6	黒色頁岩	裏面に自然面を残す。
49	X85Y61	削器	12.7	3.0	1.8	60.0	黒色頁岩	表裏両面に自然面を残し右側縁に刃部を作る。横長剝片を使用。
50	X81Y63	削器	10.2	4.8	1.2	72.7	黒色頁岩	右側縁を中心に調整を加える。

番号	出土位置	器種	長	幅	厚	重さ	石材	備考
51	X85Y63	削器	9.7	5.6	1.4	50.0	黒色頁岩	横長剝片を利用。左側縁に刃部を作る。
52	X86Y61	削器	10.9	4.8	1.9	64.0	黒色頁岩	器体下部に細かい調整を加えて、つまみを作る。
53	X87Y67	打製石斧	5.4	2.4	0.9	20.8	黒色頁岩	裏面に自然面を残す。撥形打製石斧。
54	X84Y58	打製石斧	(8.0)	3.3	1.8	(50.9)	頁岩	器体中央部から刃部にかけての欠損。
55	X89Y63	打製石斧	11.1	7.3	2.5	275.1	黒色頁岩	分銅形打製石斧。裏面に自然面を残す。
56	X83Y60	打製石斧	6.7	4.4	1.0	37.7	黒色頁岩	長剝片を利用。裏面に自然面を残す。
57	X94Y62	打製石斧	9.1	5.1	1.4	98.7	細粒安山岩	裏面に使用痕が見られる。撥形。
58	X85Y61	打製石斧	12.8	9.6	1.9	252.3	黒色頁岩	表面基部に自然面を残す。
59	X96Y77	打製石斧	8.7	5.3	1.1	53.9	黒色頁岩	両側縁に調整剝離が見られる。
60	X83Y62	打製石斧	8.7	5.2	2.1	117.8	黒色頁岩	裏面に自然面を残す。分銅形。
61	X83Y62	打製石斧	20.7	9.1	2.7	900.0	黒色頁岩	基部を中心に自然面を残す。刃部に集中的に剝離を入れ鋭い形状を作る。
62	表採(3E24)	打製石斧	7.6	4.3	1.5	53.1	黒色頁岩	裏面に自然面を残す。
63	X88Y59	打製石斧	7.9	5.3	1.7	91.5	黒色頁岩	両側縁から刃部にかけて細かい調整剝離を行う。
64	X86Y61	打製石斧	8.2	4.6	1.3	67.6	黒色頁岩	右側縁に細かい敲打痕が見られる。
65	X81Y63	打製石斧	7.4	4.4	1.9	72.7	黒色頁岩	ほぼ裏面全体に自然面を残す。
66	X83Y62	打製石斧	7.8	5.4	1.2	73.2	黒色頁岩	裏面に自然面を残す。
67	X92Y70	打製石斧	14.0	4.2	1.7	117.6	黒色片岩	基部に自然面を残す。刃部形成の調整が見られる。
68	X83Y63	打製石斧	14.5	8.0	1.7	179.8	黒色頁岩	右側縁を中心に調整剝離が入る。撥形打製石斧。
69	X82Y63	打製石斧	(12.9)	7.9	1.8	(330.0)	黒色頁岩	表面に自然面を残す。刃部の欠損。分銅形。
70	X85Y61	片刃状石器	8.4	4.8	2.9	109.8	頁岩	基部が尖り、裏面に自然面を残す。刃部を集中的に剝離。
71	X82Y63	磨石	7.1	6.5	2.0	150.0	粗粒安山岩	偏平の円形礫を使用。
72	X83Y61	磨石	7.6	6.9	1.9	160.0	砂岩	摩耗によって器体中央部が凹む。
73	X83Y62	磨石	8.0	6.6	2.0	160.0	粗粒安山岩	偏平の楕円礫を使用。表裏両面に摩耗痕。
74	X86Y61	磨石	7.7	6.9	3.0	240.0	粗粒安山岩	偏平の円形礫を使用。
75	X82Y59	磨石	(10.0)	(8.6)	3.5	(510.0)	石英閃緑岩	裏面の一部欠損。表裏両面を摩耗。
76	X83Y61	磨石	6.3	6.3	1.7	110.0	粗粒安山岩	小型の円形礫を使用。
77	X89Y62	磨石	8.9	6.8	2.5	(240.0)	粗粒安山岩	右側縁の一部欠損。
78	X84Y62	磨石	11.2	6.2	4.4	460.0	変質安山岩	表面は被熱によるはがれ。
79	X94Y61	磨石	11.7	6.1	4.4	460.0	石英閃緑岩	棒状礫の表面のみに摩耗痕。
80	X92Y61	磨石	(11.8)	(6.4)	(2.5)	(270.0)	砂岩	器体右側の欠損。
81	X86Y63	磨石	11.8	10.2	3.3	575.0	粗粒安山岩	偏平な円形礫を使用。表裏両面に摩耗痕。
82	X83Y62	磨石	9.5	9.0	3.9	440.0	粗粒安山岩	表裏両面を使用。
83	X82Y63	磨石・凹石	8.9	(8.2)	3.2	(250.0)	粗粒安山岩	器体右側の欠損。中央部に凹み。表裏両面を摩耗。
84	X84Y61	磨石・凹石	11.1	7.7	4.2	490.0	粗粒安山岩	厚手の楕円礫を利用。
85	X85Y61	凹石	11.3	9.0	5.5	540.0	粗粒安山岩	器体中央部に広範囲に凹み。
86	X87Y61	凹石	10.3	6.4	4.3	360.0	粗粒安山岩	長楕円礫を利用。
87	X81Y61	凹石	10.3	8.1	5.4	525.0	粗粒安山岩	表裏両面にそれぞれ一ケ所の凹みを持つ。
88	X96Y59	凹石	14.1	7.4	6.4	640.0	粗粒安山岩	棒状礫の中央に凹みが2箇所見られる。
89	表採(3E19)	凹石	11.8	10.4	6.7	(500.0)	粗粒安山岩	器体の一部欠損。
90	X84Y61	凹石	11.4	8.1	4.7	491.0	粗粒安山岩	表裏両面に凹みを持つ。
91	X94Y58	凹石	11.5	9.8	5.7	725.0	粗粒安山岩	表面に二ケ所の凹みをもつ。
92	X95Y59	凹石	11.0	(8.2)	4.4	(400.0)	粗粒安山岩	右側縁の欠損。
93	X83Y63	凹石	10.6	8.9	3.4	450.0	粗粒安山岩	器体下部に敲打痕。偏平の楕円礫を利用。
94	X83Y63	凹石	9.1	8.0	3.4	350.0	粗粒安山岩	偏平の円形礫を使用。
95	X85Y61	敲石	(8.7)	6.5	3.6	(250.0)	粗粒安山岩	器体下部の欠損。
96	X81Y64	敲石	12.1	10.0	4.2	670.0	粗粒安山岩	器体上部に敲打痕。
97	X83Y61	敲石	13.1	10.0	7.9	900.0	粗粒安山岩	握り状の把手を持つ。
98	X83Y62	礫器	6.2	9.2	5.4	300.0	黒色頁岩	円形礫の約半分を使用。
99	X92Y56	スタンプ形石器	10.2	5.8	3.6	330.0	輝緑岩	棒状礫を利用。
100	3E19(H-11)	蜂の巣石	10.9	9.5	4.5	500.0	粗粒安山岩	小型の蜂の巣石。片面のみ利用。

番号	出土位置	器種	長	幅	厚	重さ	石材	備考
101	表採(3E24)	蜂の巣石	14.8	12.0	6.2	1130.0	粗粒安山岩	楕円礫の両面を使用。
102	X83Y63	石皿	16.6	18.4	5.3	2330.0	粗粒安山岩	器体の一部に摩耗痕。

註) 表の記載で、大きさについての単位はcm、gであり、現存値は( )で示した。

Tab. 5 古墳～平安時代遺物観察表

番号	出土位置	器形	大きさ 口径・器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	器形・製作技法の特徴
1	H－11	土師甕	15.5(16.8)	①細粒②良好③にぶい黄橙④口縁部～胴部1/3	外面刷毛後ナデ。内面刷毛目ナデ。
2	H－11	土師甕	14.3(22.5)	①中粒②良好③にぶい黄褐④1/2	外面胴部篦磨き、口縁部輪積痕、頸部刷毛後ナデ。内面刷毛後ナデ。
3	H－11	土師甕	－(5.4)	①細粒②良好③明黄褐④1/6	外面刷毛後ナデ。肩部～胴部篦磨き。内面刷毛後ナデ。
4	M－11	須恵高台椀	16.3 8.4	①細粒②良好③灰白④1/2	体部回転篦調整。底部糸切り後仮付け高台。底、篦調整。

註) 表の記載は以下の基準で行った。

① 胎土は細粒(0.9㎜以下)、中粒(1.0～1.9㎜)、細粒(2.0㎜以上)とした。

② 色調は土器外面で観察し、色名は新版土色帖(小山・竹原1976)によった。

③ 大きさについての単位はcmであり、現存値は( )で示した。

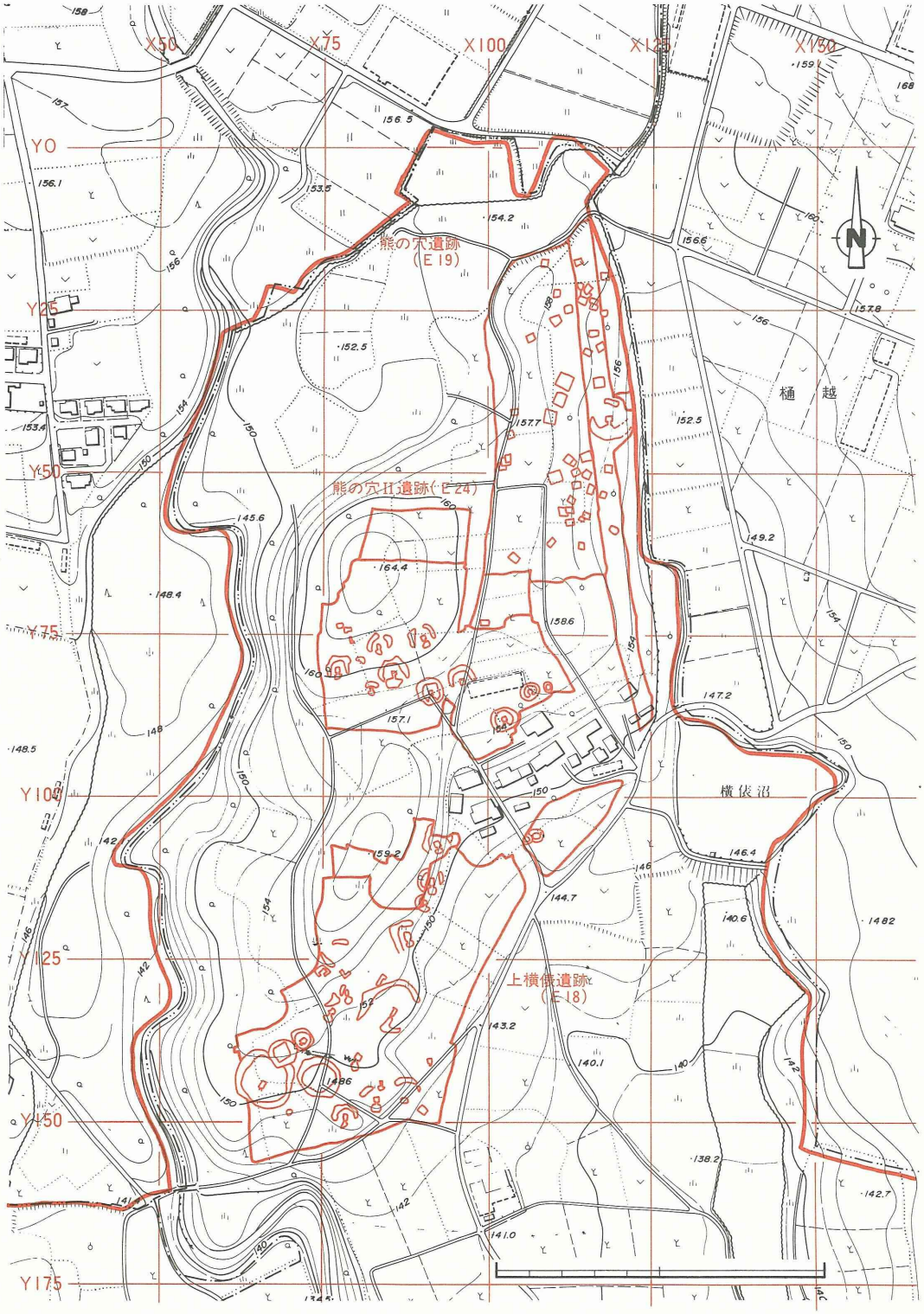
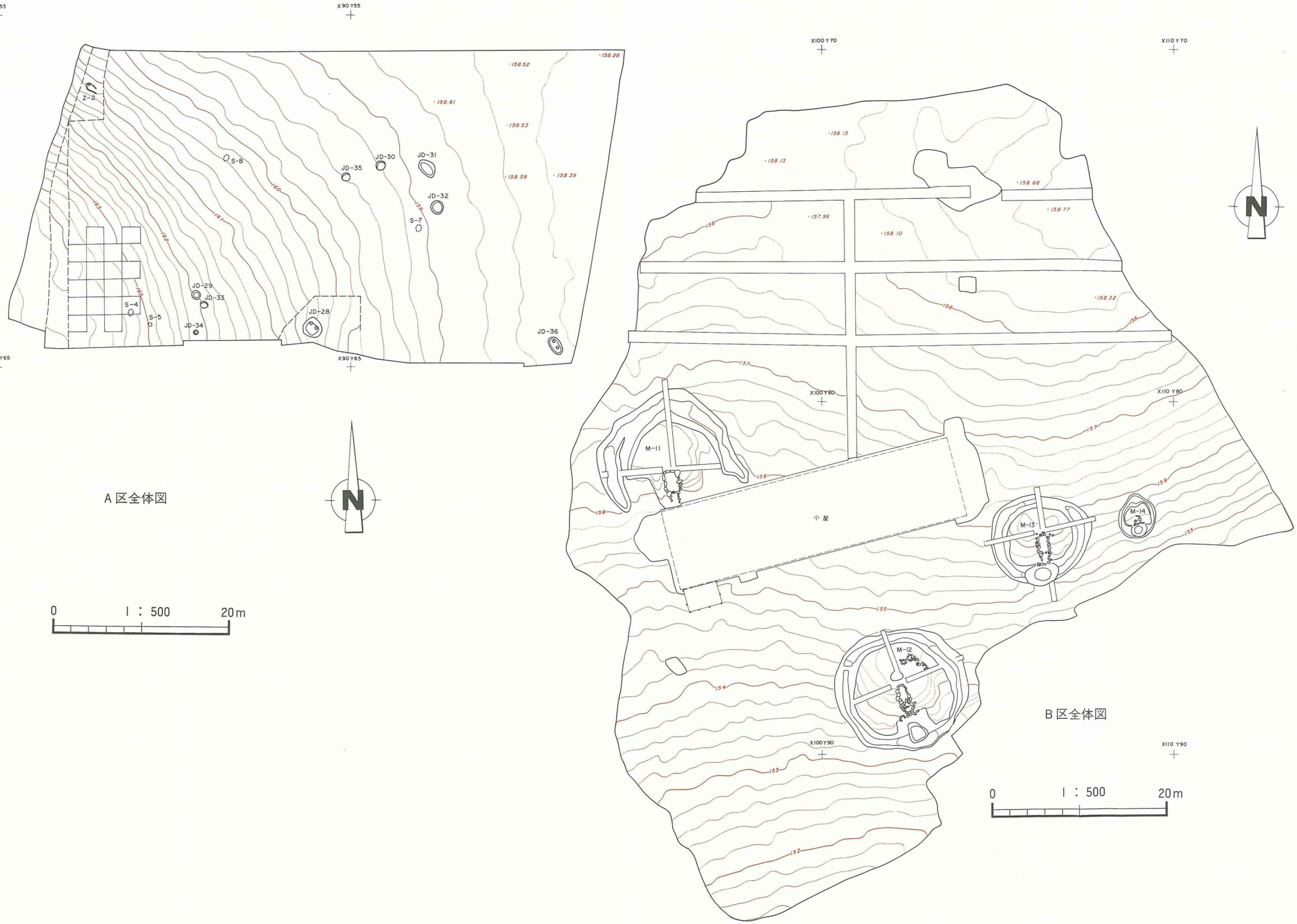


Fig. 8　熊の穴・上横俵遺跡遺構全体図



A区全体図

B区全体図

Fig. 9　熊の穴II遺跡A・B区全体図

上横倹遺跡全体図

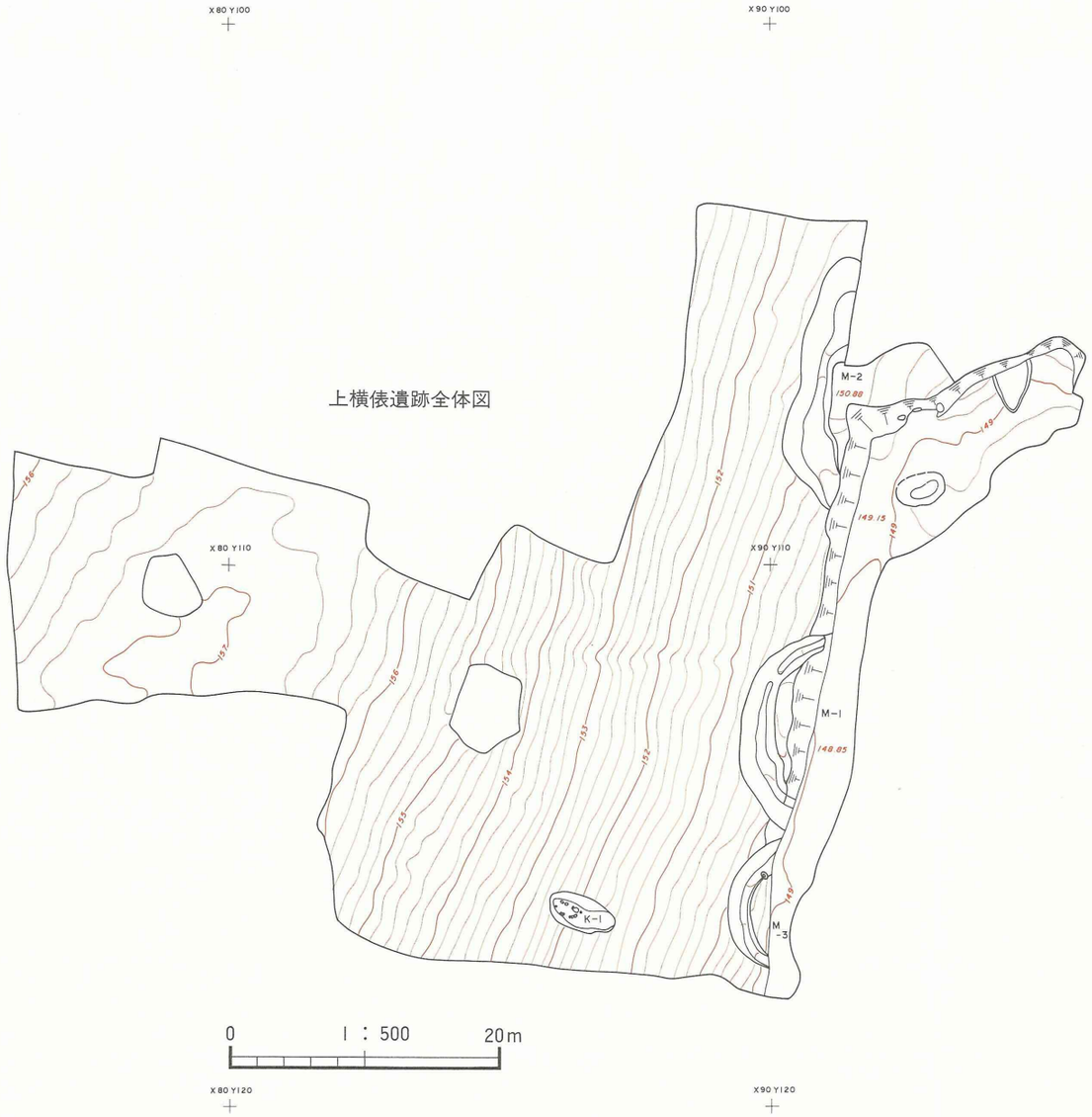
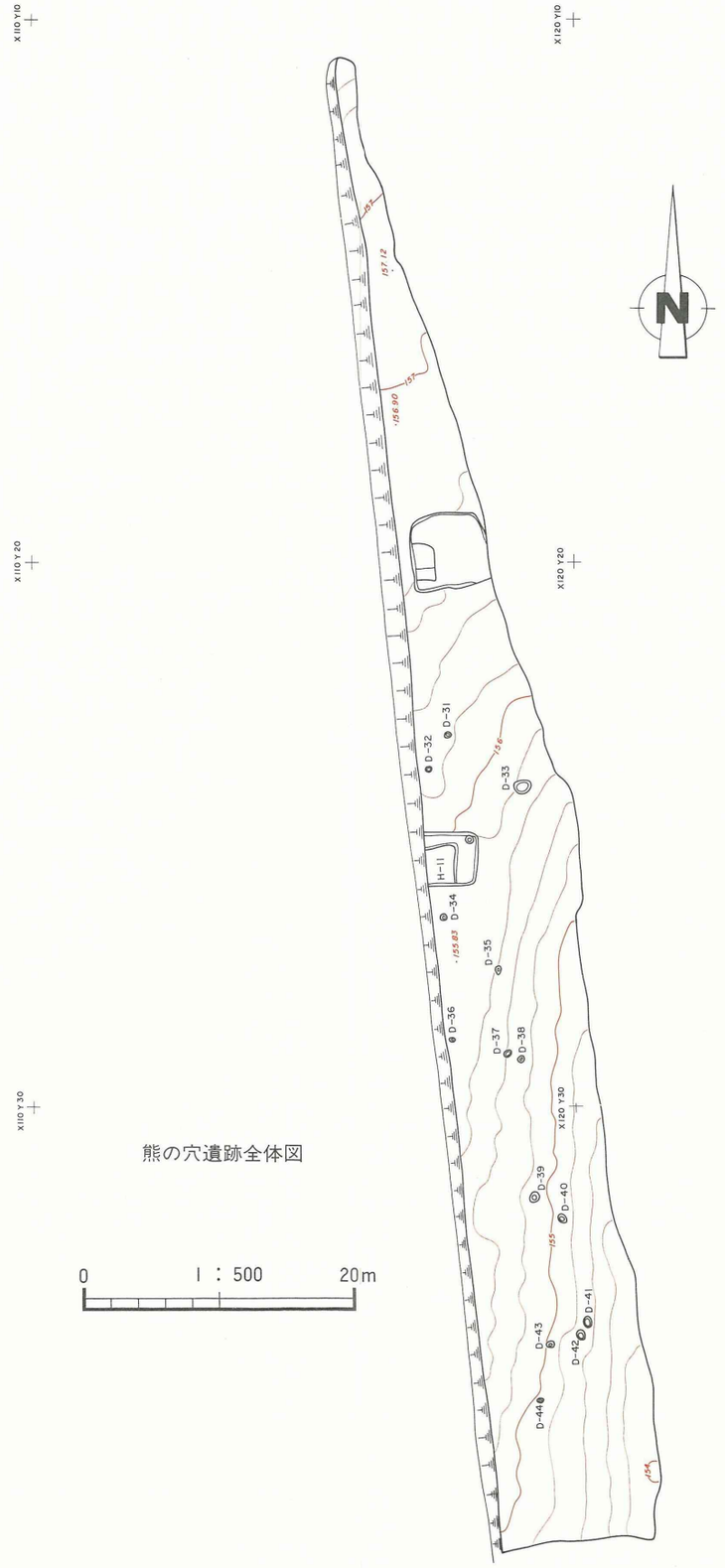
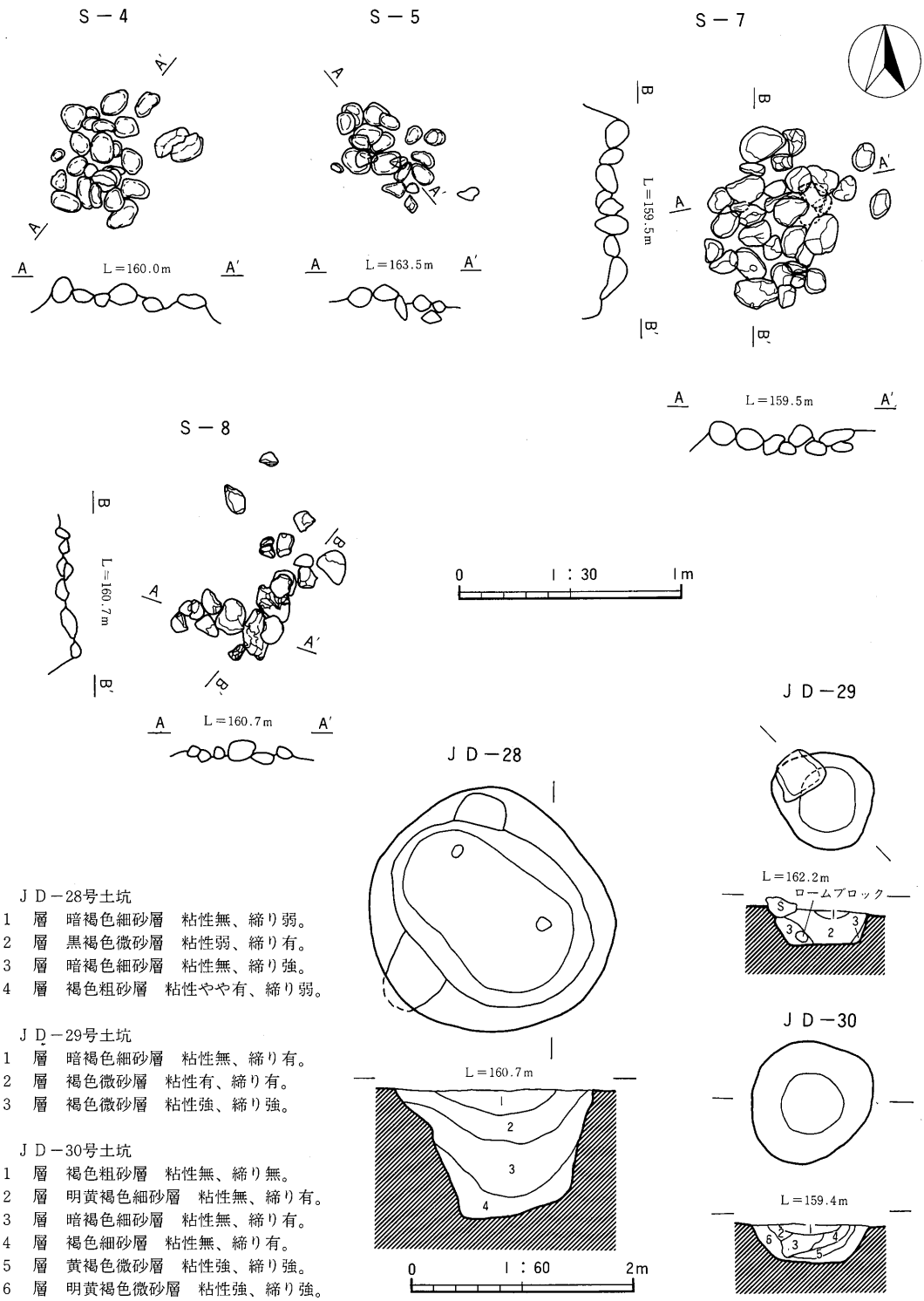


Fig. 10　上横倹・熊の穴遺跡全体図

熊の穴遺跡全体図



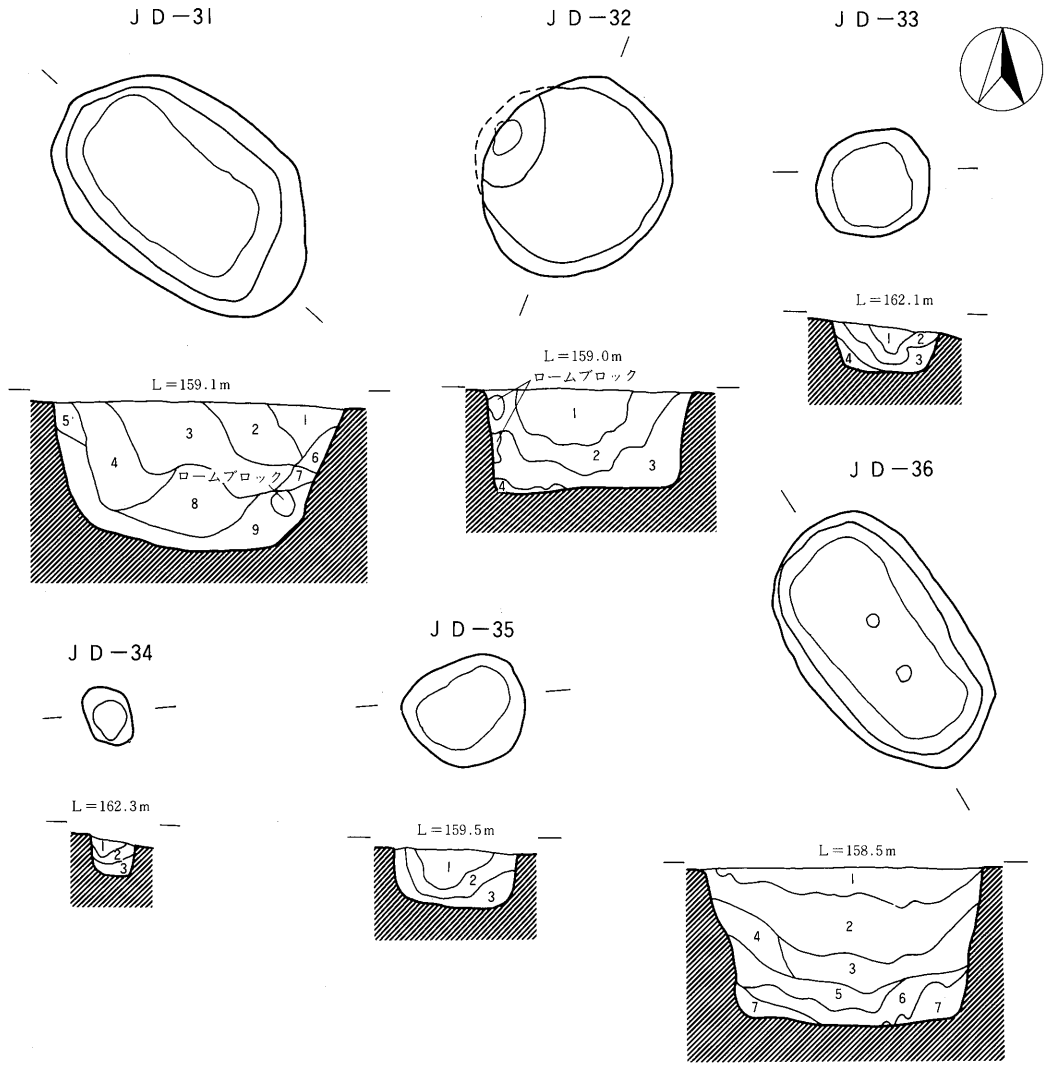


J D－28号土坑
1 層 暗褐色細砂層 粘性無、締り弱。
2 層 黒褐色微砂層 粘性弱、締り有。
3 層 暗褐色細砂層 粘性無、締り強。
4 層 褐色粗砂層 粘性やや有、締り弱。

J D－29号土坑
1 層 暗褐色細砂層 粘性無、締り有。
2 層 褐色微砂層 粘性有、締り有。
3 層 褐色微砂層 粘性強、締り強。

J D－30号土坑
1 層 褐色粗砂層 粘性無、締り無。
2 層 明黄褐色細砂層 粘性無、締り有。
3 層 暗褐色細砂層 粘性無、締り有。
4 層 褐色細砂層 粘性無、締り有。
5 層 黄褐色微砂層 粘性強、締り強。
6 層 明黄褐色微砂層 粘性強、締り強。

Fig. 11 縄文時代の集石・土坑



ＪＤ－31号土坑

1　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締り弱。
2　層　黒褐色細砂層　粘性弱、締り弱。
3　層　黒褐色細砂層　粘性有、締り有。
4　層　黒褐色細砂層　粘性強、締り有。
5　層　暗褐色微砂層　粘性有、締り強。
6　層　褐色微砂層　粘性有、締り有。
7　層　暗褐色細砂層　粘性有、締り強。
8　層　暗褐色細砂層　粘性有、締り有。
9　層　暗褐色細砂層　粘性強、締り強。

ＪＤ－32号土坑

1　層　暗褐色粗砂層　粘性弱、締り弱。
2　層　褐色粗砂層　粘性有、締り弱。
3　層　褐色細砂層　粘性強、締り強。
4　層　黄褐色微砂層　粘性強、締り強。

ＪＤ－33号土坑

1　層　褐色細砂層　粘性弱、締り弱。
2　層　褐色細砂層　粘性弱、締り有。
3　層　黄褐色細砂層　粘性有、締り有。
4　層　黄褐色微砂層　粘性強、締り強。

ＪＤ－34号土坑

1　層　褐色細砂層　粘性弱、締り弱。
2　層　黄褐色微砂層　粘性有、締り有。
3　層　黄褐色微砂層　粘性強、締り強。

ＪＤ－35号土坑

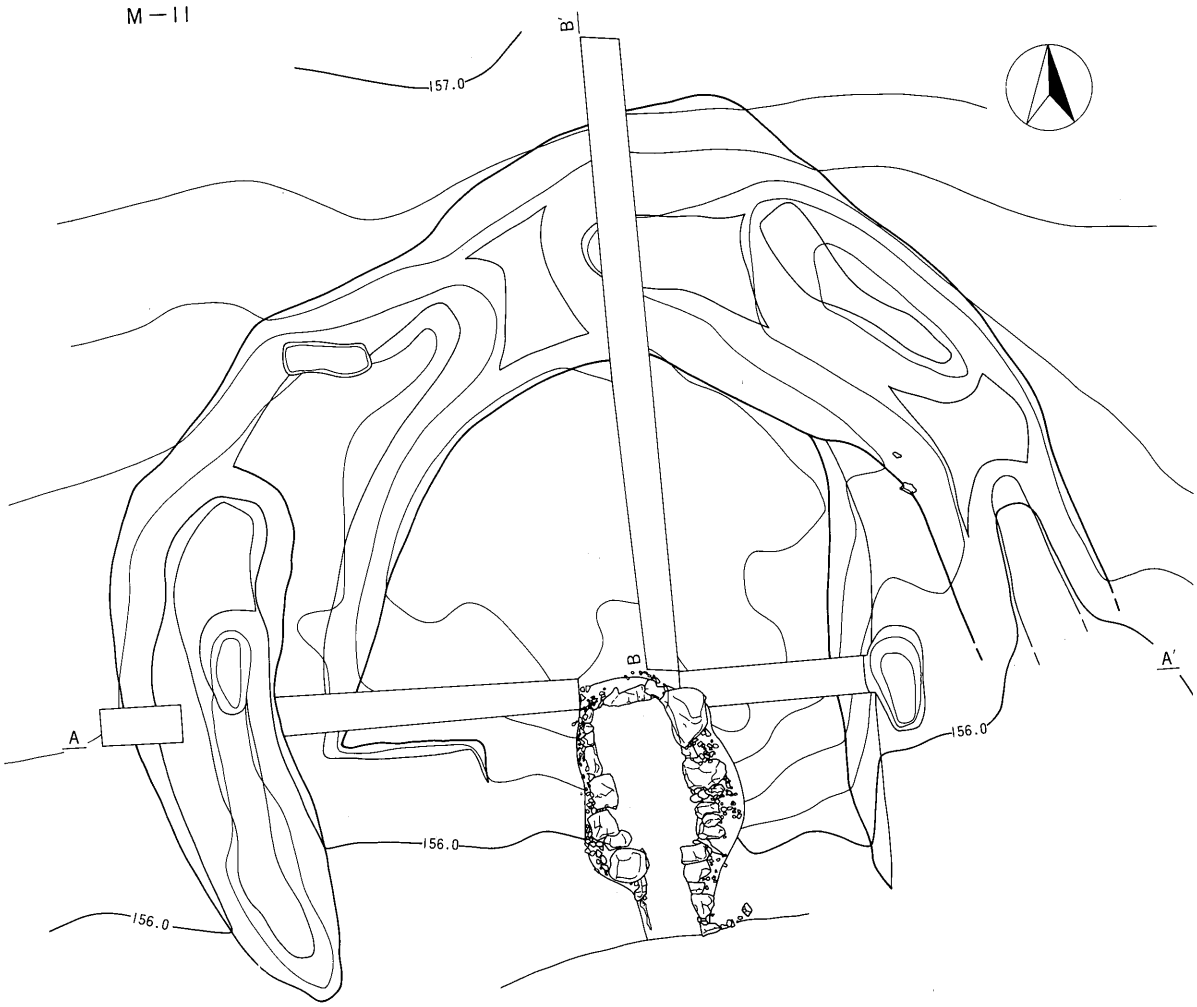
1　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締り有。
2　層　褐色細砂層　粘性有、締り有。
3　層　黄褐色微砂層　粘性強、締り強。

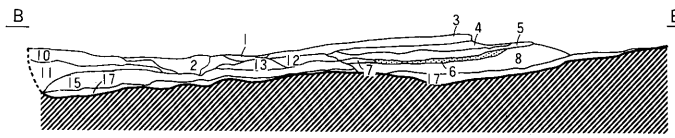
0　1：60　2m

ＪＤ－36号土坑

1　層　黒褐色細砂層　粘性弱、締り弱。
2　層　黒褐色細砂層　粘性有、締り有。
3　層　黒褐色細砂層　粘性有、締り強。
4　層　暗褐色細砂層　粘性有、締り強。
5　層　褐色細砂層　粘性強、締り強。
6　層　褐色微砂層　粘性強、締り強。
7　層　暗褐色微砂層　粘性強、締り強。

Fig. 12　縄文時代の土坑



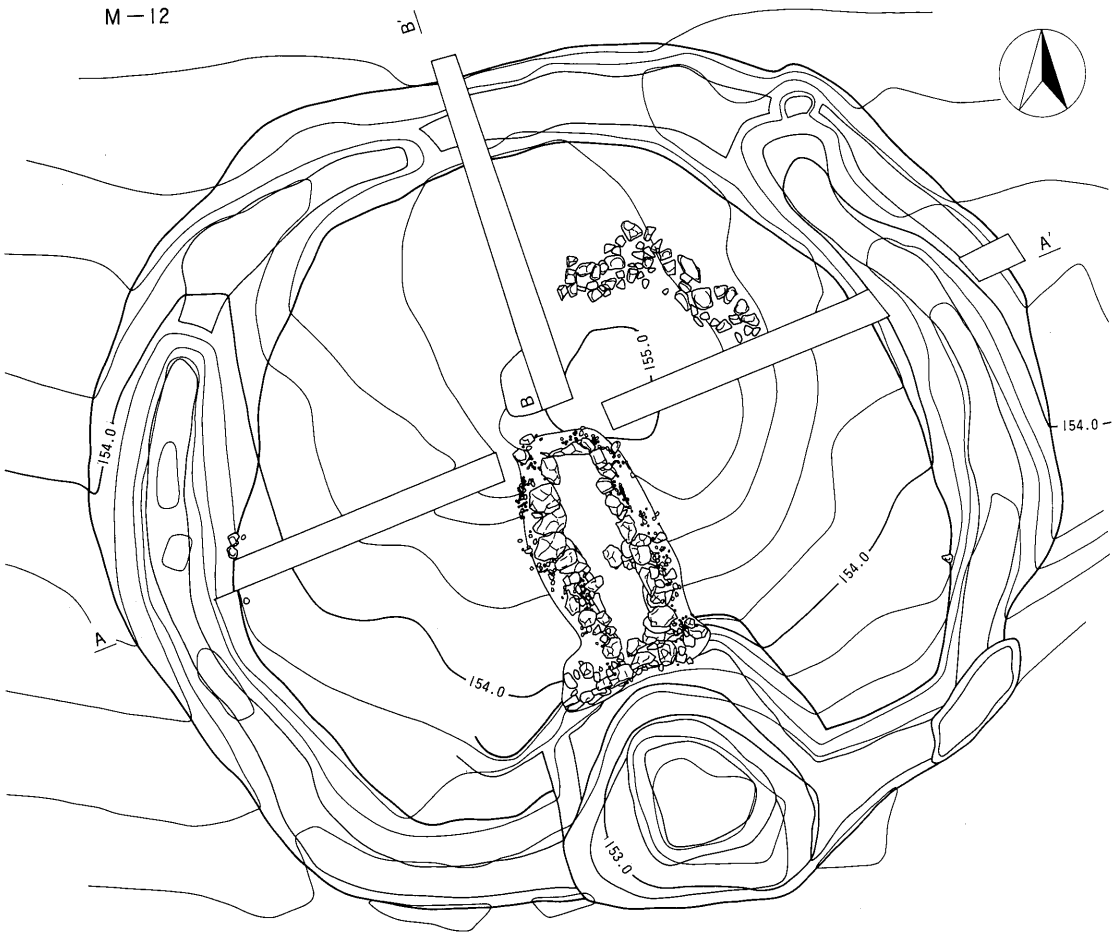


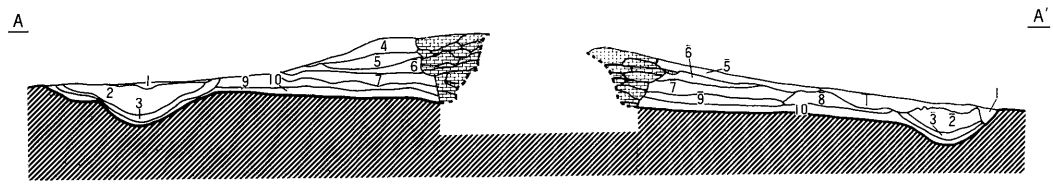
M－11号墳

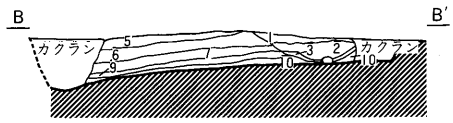
1　層　黒褐色細砂層　粘性弱く、締り弱い。
2　層　黒褐色細砂層　粘性無し、締り無し。
3　層　黒褐色細砂層　粘性あり、締り強い。(旧道路下)
4　層　黒褐色細砂層　粘性無し、締りあり。(旧道路下)
5　層　黒褐色細砂層　粘性弱く、締り強い。(旧道路下)
6　層　黒褐色粗砂層　粘性無く、締り弱い。(As－B純層)
7　層　黒褐色粗砂層　粘性弱く、締り弱い。
8　層　黒色細砂層　粘性弱く、締りあり。
9　層　黒褐色細砂層　粘性あり、締りあり。
10　層　黒褐色細砂層　粘性弱く、締りあり。
11　層　暗褐色細砂層　粘性弱く、締りあり。
12　層　黒褐色細砂層　粘性弱く、締りあり。
13　層　暗褐色細砂層　粘性弱く、締り弱い。
14　層　黒色細砂層　粘性あり、締りあり。
15　層　黒色細砂層　粘性弱く、締りあり。
16　層　黒褐色細砂層　粘性あり、締りあり。
17　層　黒褐色微砂層　粘性あり、締りあり。

0　1：120　4m

Fig. 13　M－11号墳墳丘図





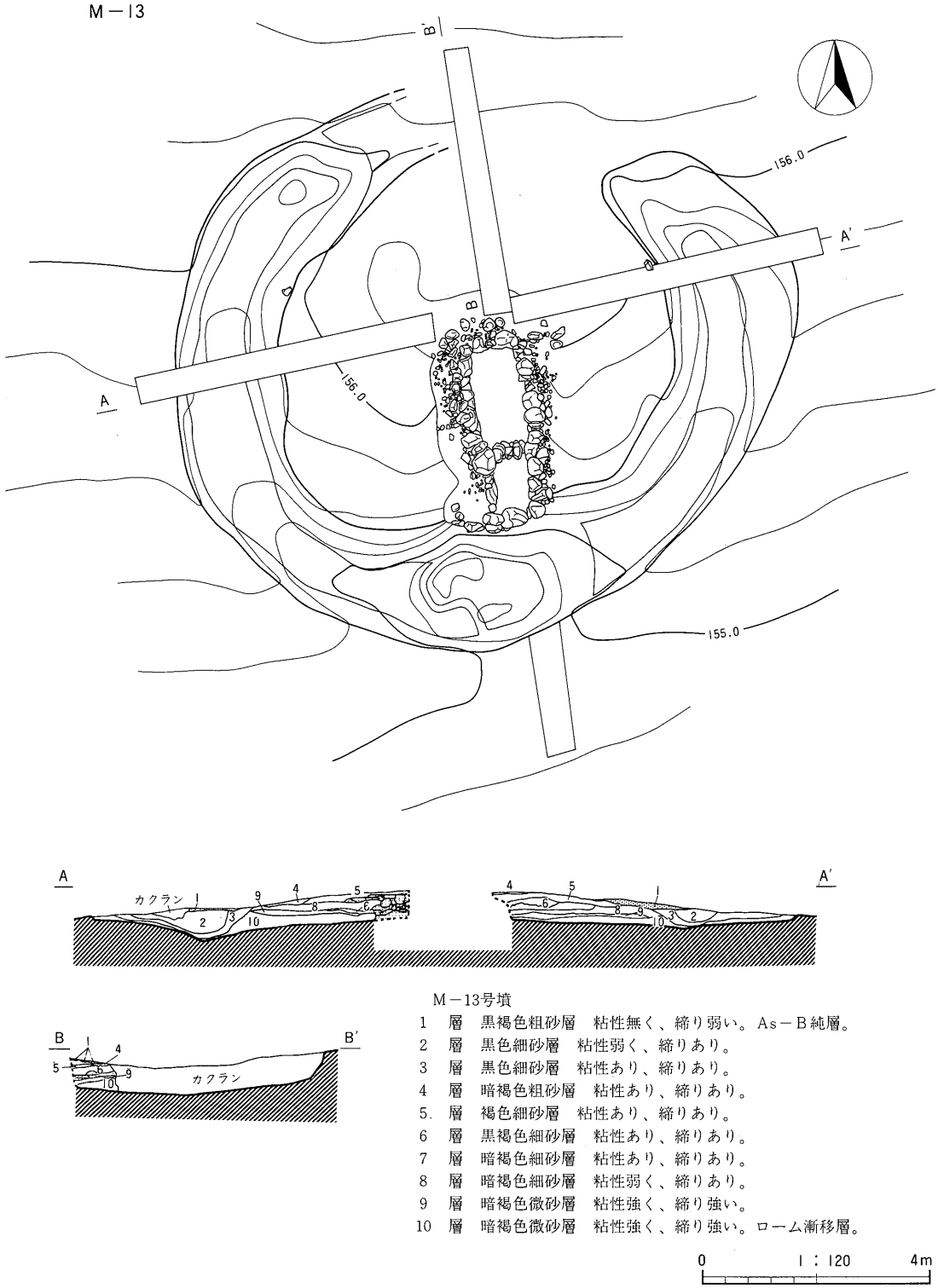


M－12号墳

1　層　黒褐色粗砂層　粘性無く、締りあり。
2　層　黒色細砂層　粘性弱く、締りあり。
3　層　黒褐色細砂層　粘性弱く、締りあり。
4　層　暗褐色細砂層　粘性無く、締りあり。
5　層　暗褐色細砂層　粘性弱く、締りあり。
6　層　褐色細砂層　粘性弱く、締りあり。
7　層　黒褐色細砂層　粘性弱く、締りあり。
8　層　暗褐色細砂層　粘性弱く、締りあり。
9　層　黒褐色細砂層　粘性あり、締りあり。
10　層　暗褐色微砂層　粘性あり、締りあり。

0　1：120　4m

Fig. 14　M－12墳墳丘図



M－13号墳

1　層　黒褐色粗砂層　粘性無く、締り弱い。As－B純層。
2　層　黒色細砂層　粘性弱く、締りあり。
3　層　黒色細砂層　粘性あり、締りあり。
4　層　暗褐色粗砂層　粘性あり、締りあり。
5　層　褐色細砂層　粘性あり、締りあり。
6　層　黒褐色細砂層　粘性あり、締りあり。
7　層　暗褐色細砂層　粘性あり、締りあり。
8　層　暗褐色細砂層　粘性弱く、締りあり。
9　層　暗褐色微砂層　粘性強く、締り強い。
10　層　暗褐色微砂層　粘性強く、締り強い。ローム漸移層。

0　1：120　4m

Fig. 15　M－13号墳墳丘図

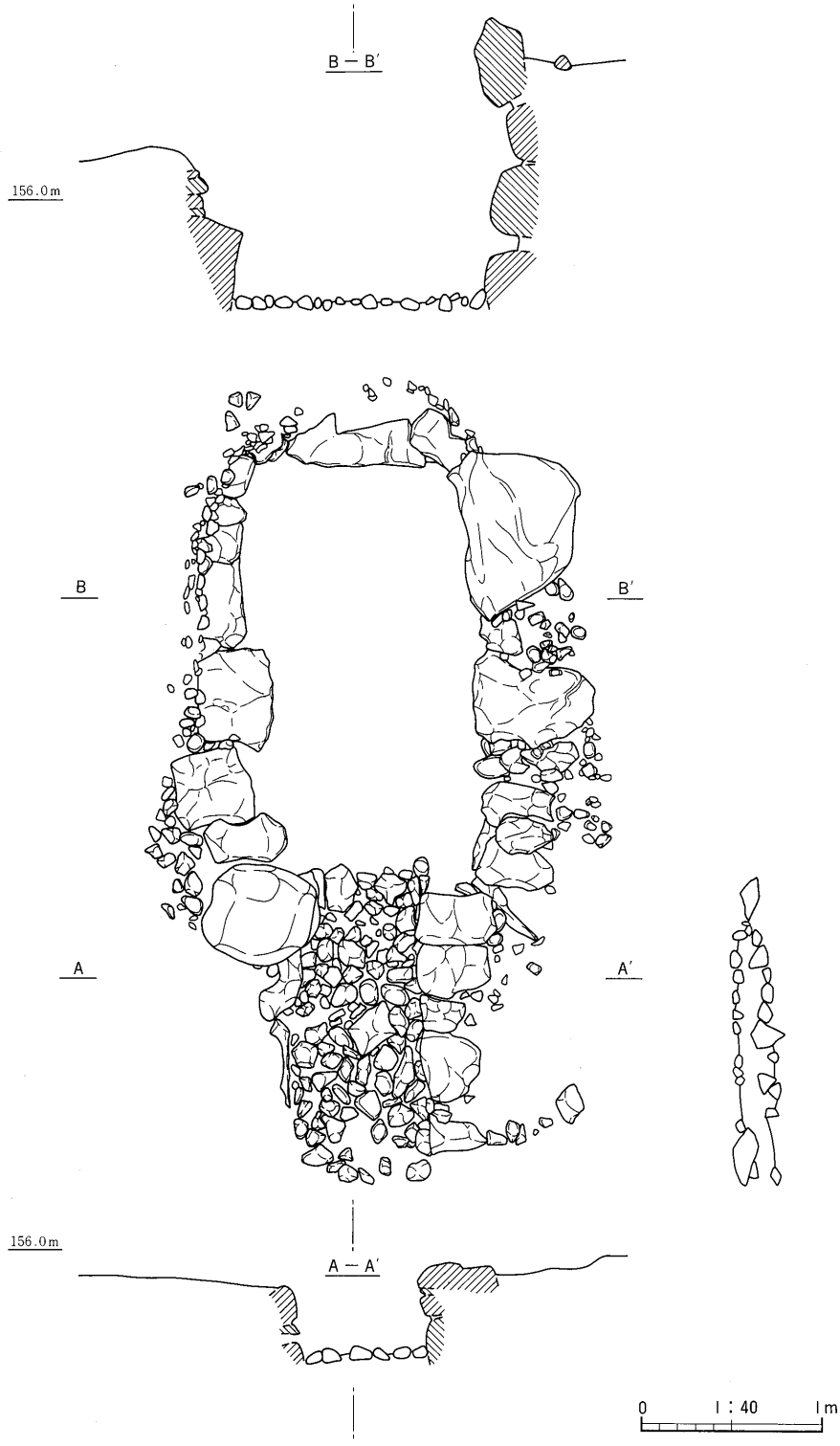


Fig. 16　M－11号墳石室平面図

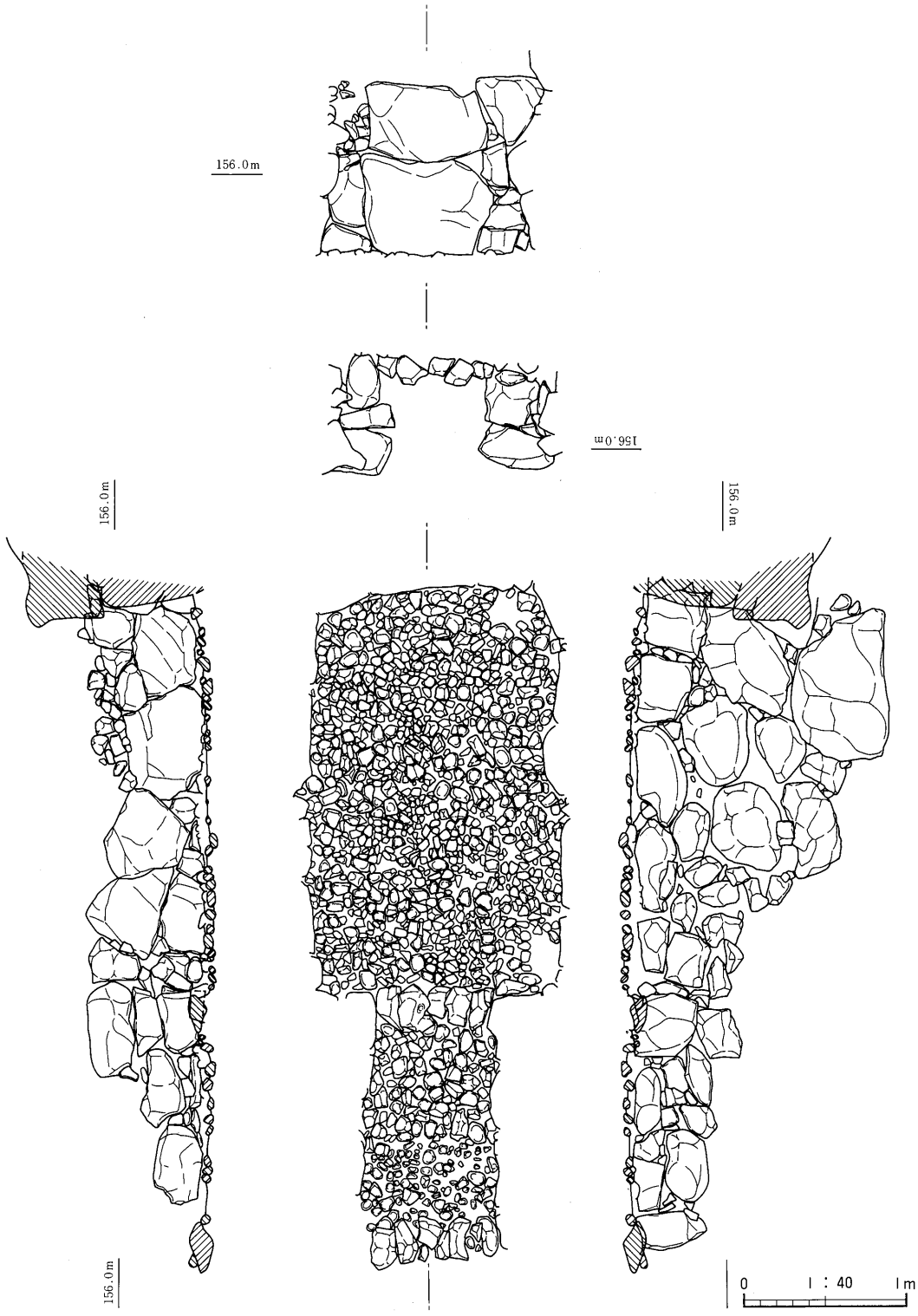


Fig. 17　M－11号墳石室展開図

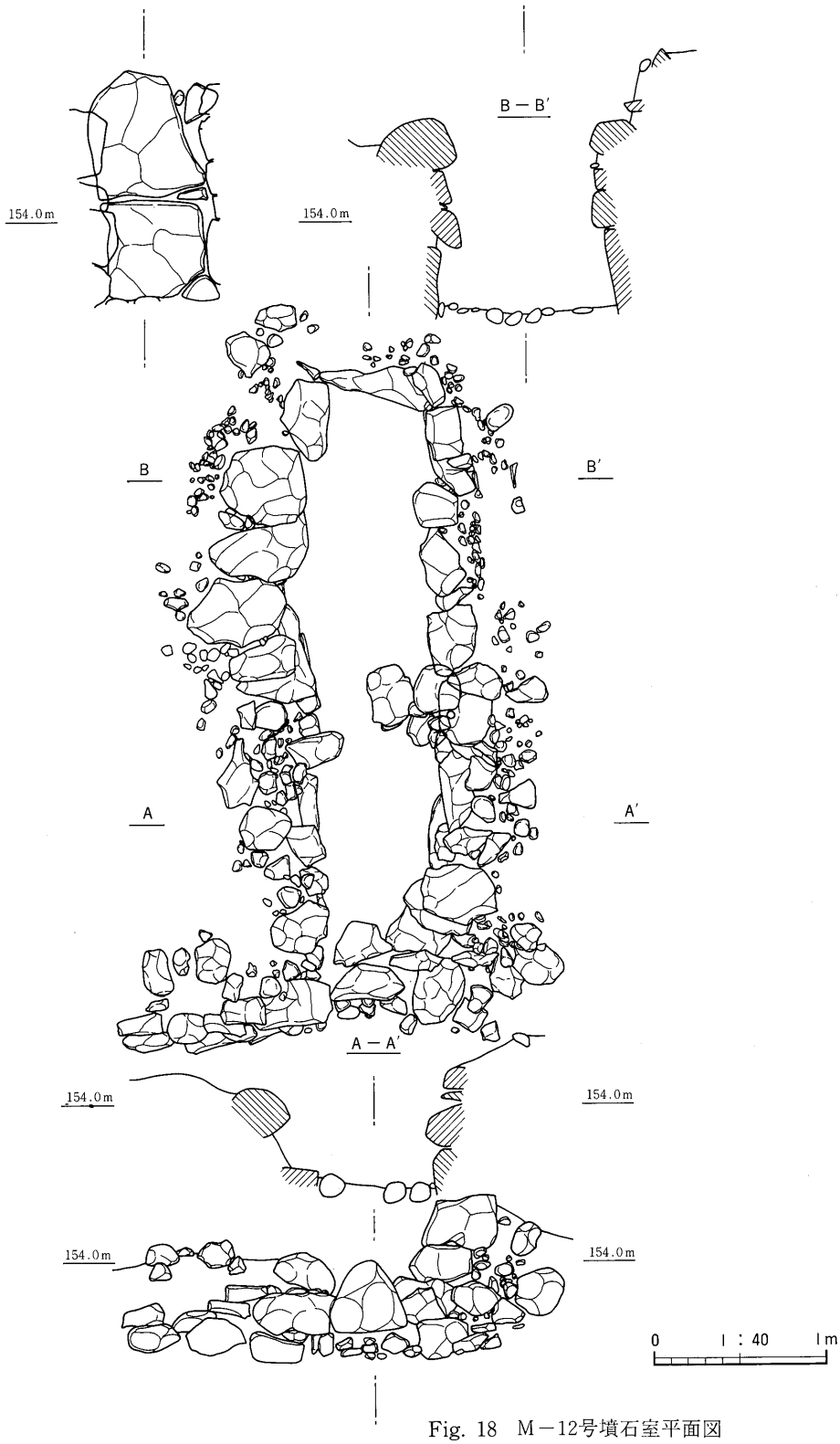


Fig. 18　M－12号墳石室平面図

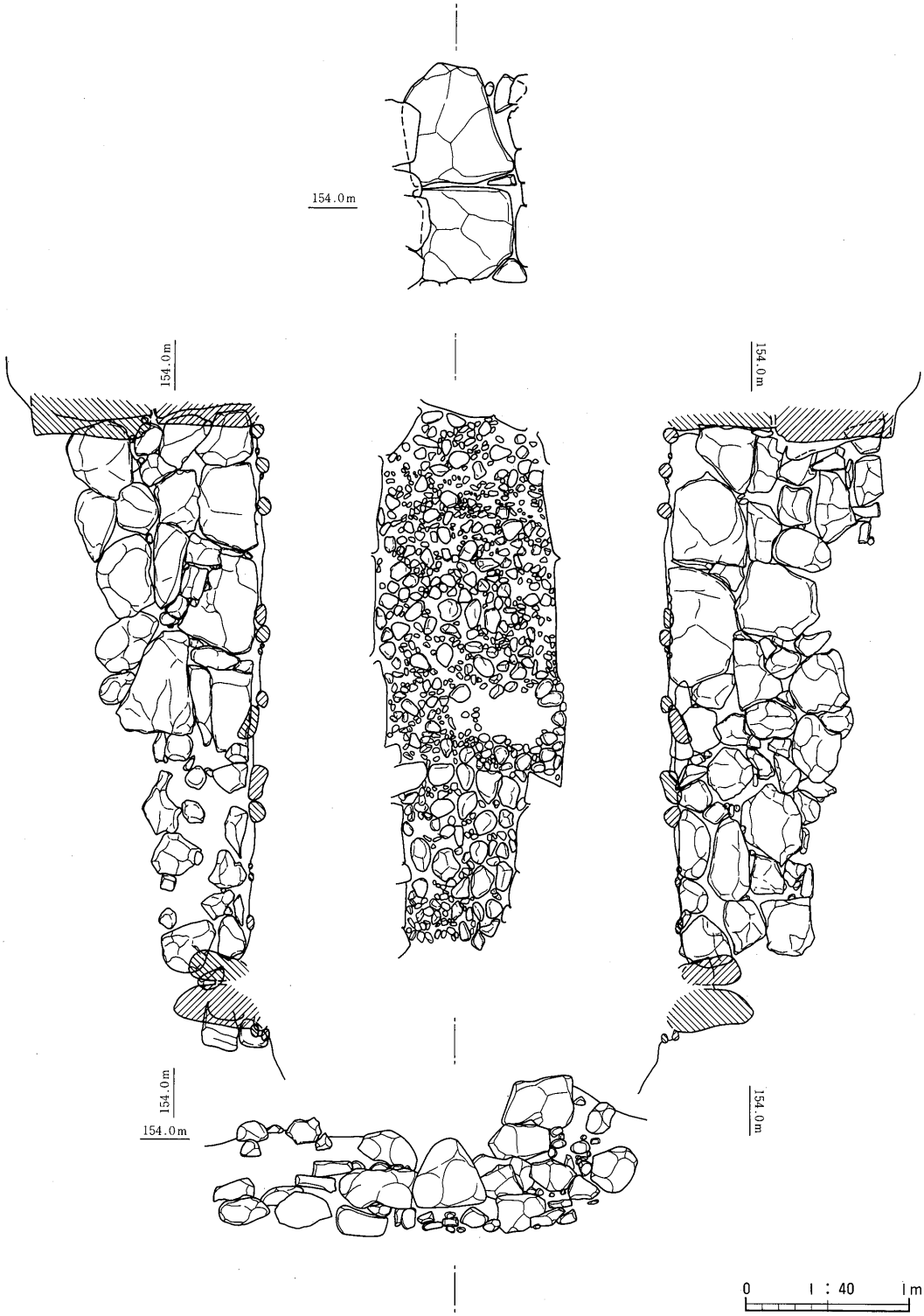


Fig. 19　M－12号墳石室展開図

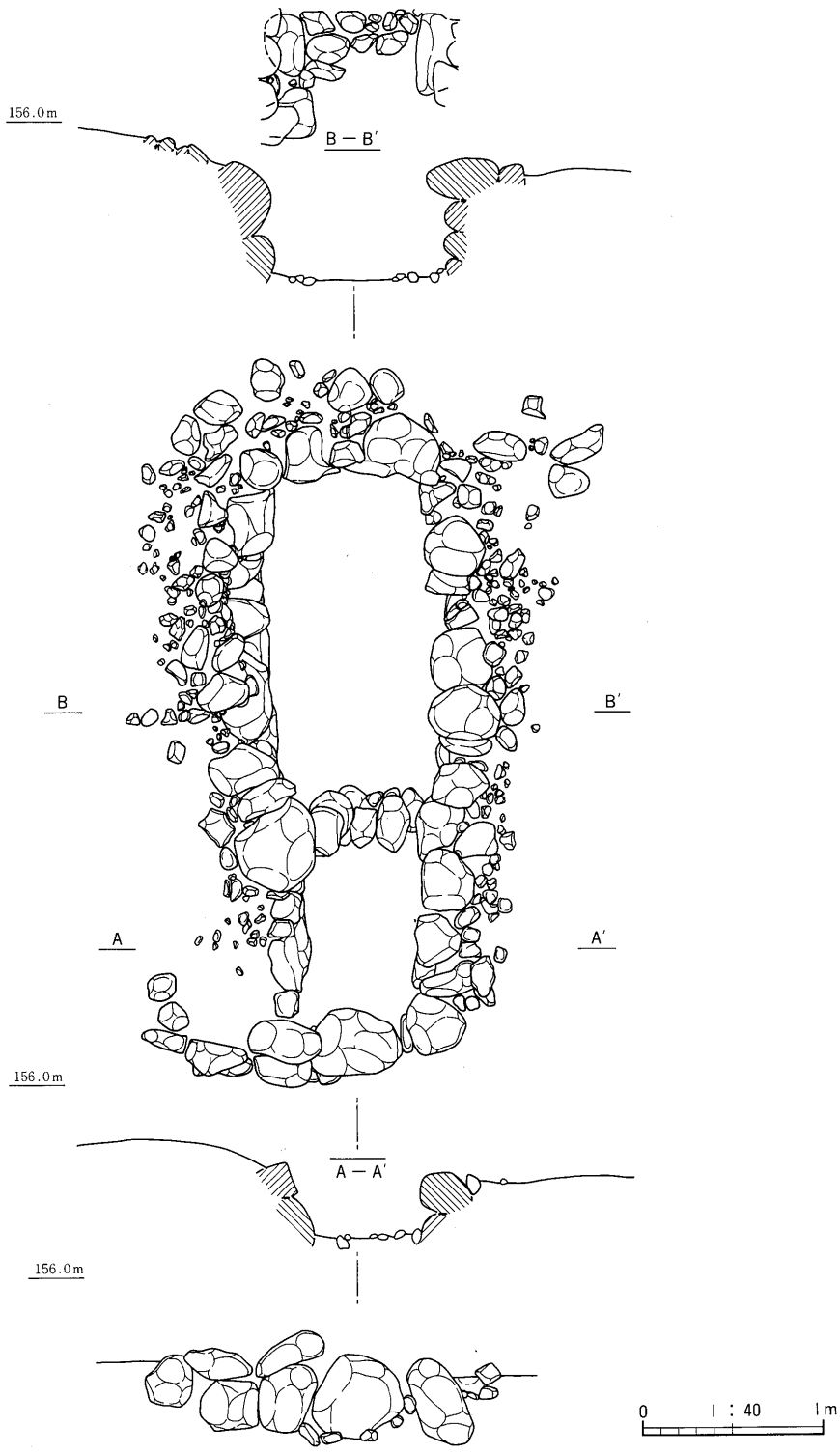


Fig. 20　M－13号墳石室平面図

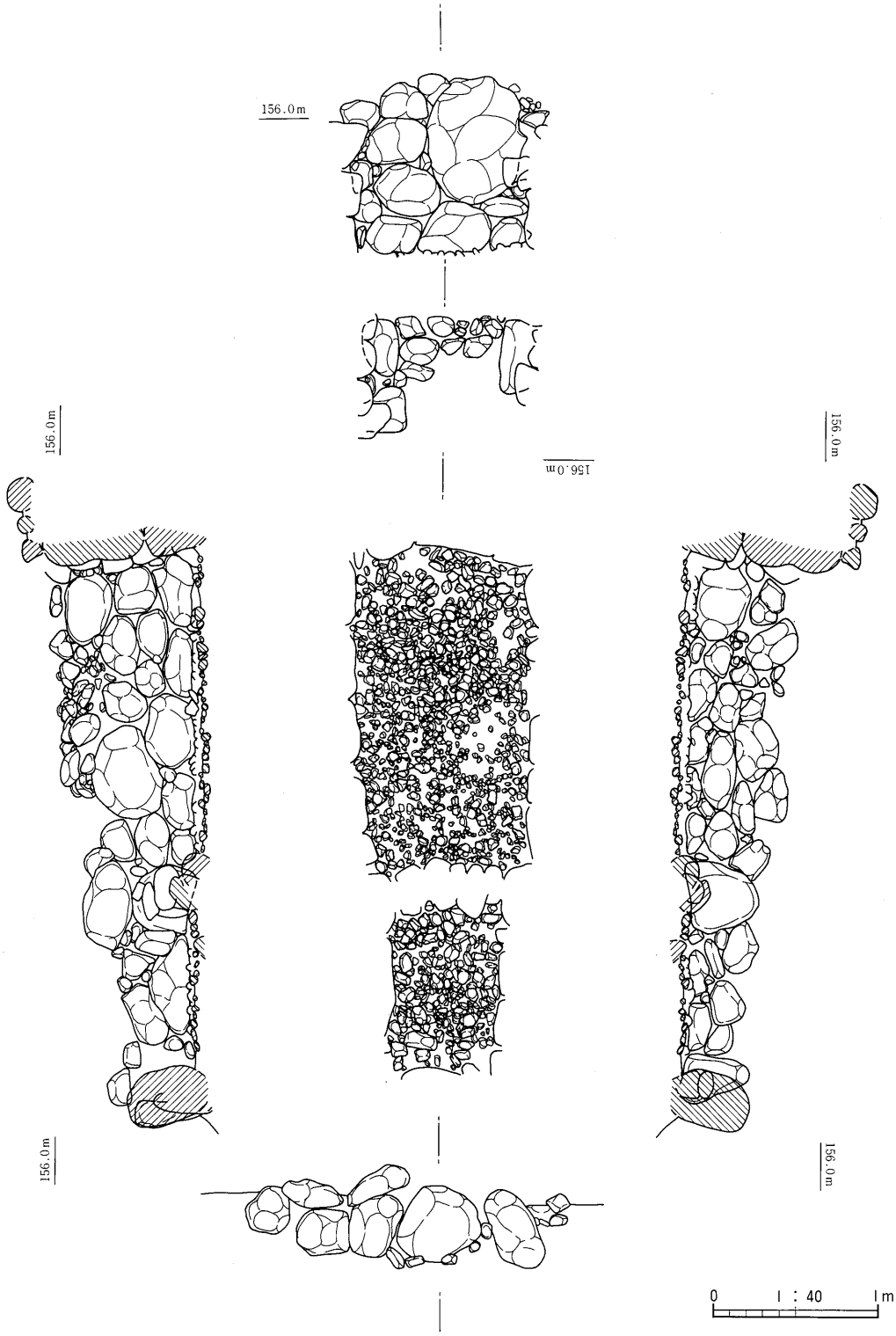


Fig. 21 M－13号墳石室展開図

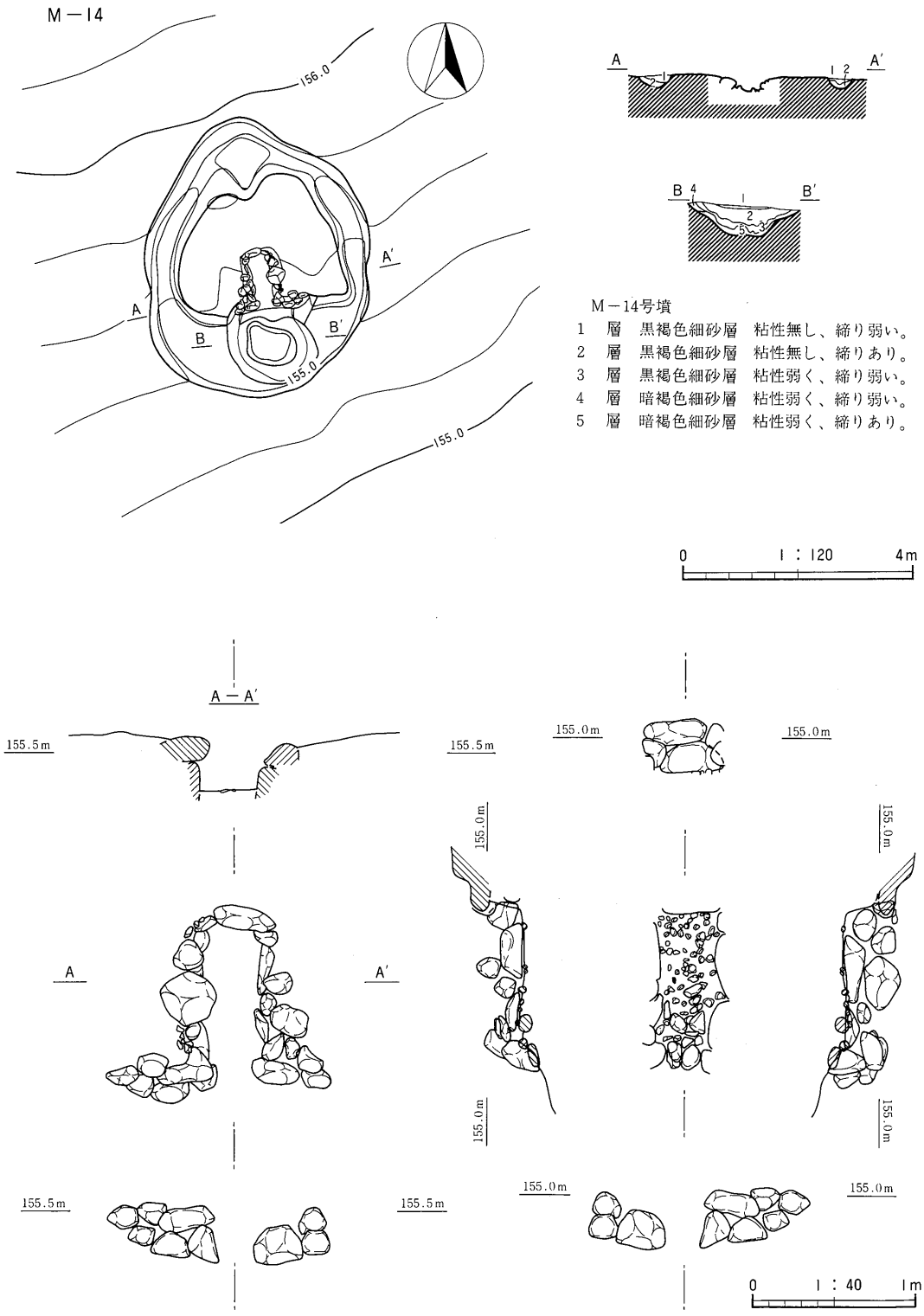
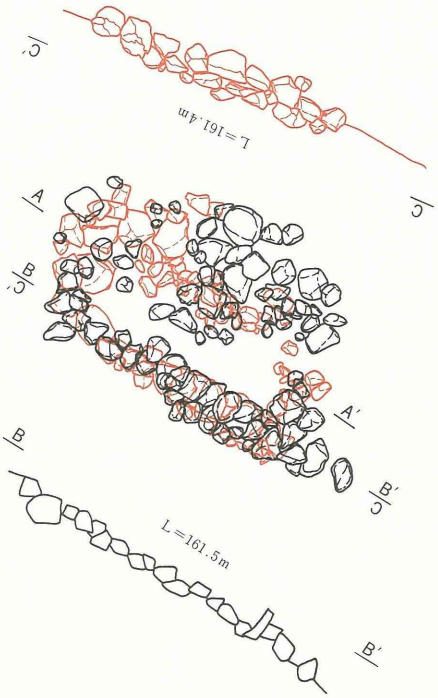
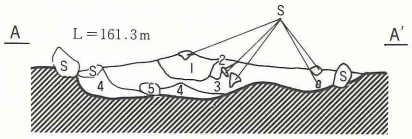


Fig. 22 M－14号墳墳丘図・石室平面図・展開図

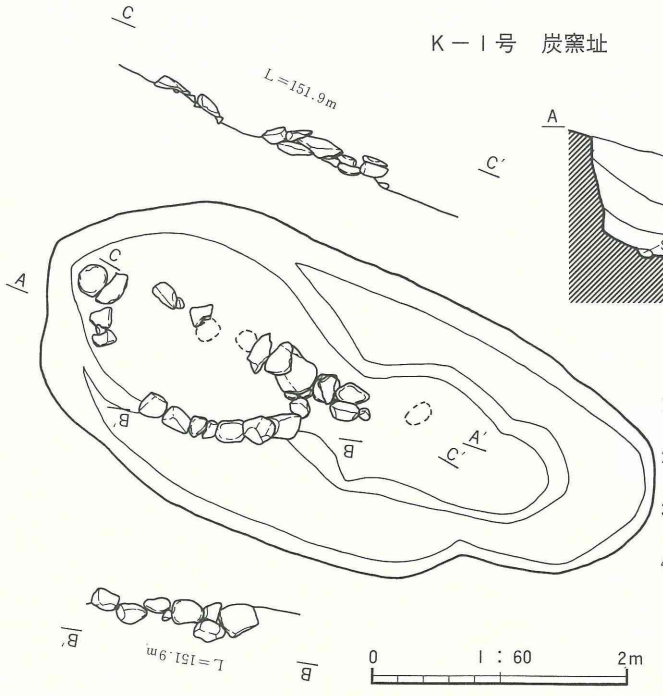
Z－2号　配石墓

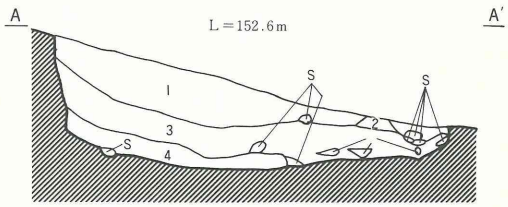




Z－2号配石墓
1　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締り弱。
2　層　黄褐色微砂層　粘性強、締り強。ロームブロック
3　層　暗褐色細砂層　粘性無、締り無。
4　層　褐色細砂層　粘性弱、締り無。ローム漸移層。

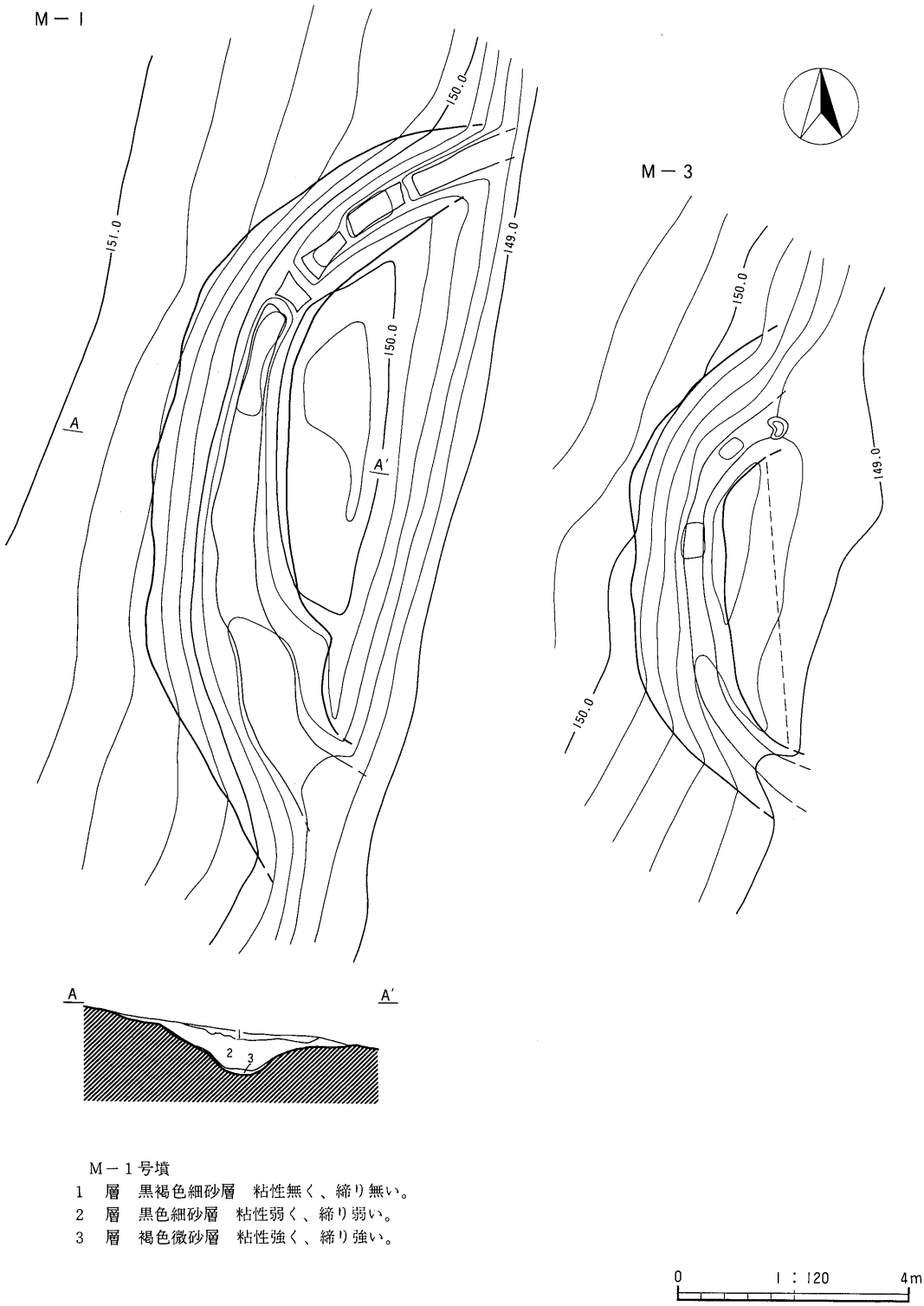
K－1号　炭窯址





K－1号炭窯址
1　層　暗褐色細砂層　粘性無、締りやや有。
　　1～2㎜焼土ブロック5％含む。
2　層　褐色細砂層　粘性無、締りやや有。
　　1～10㎜焼土ブロック20％含む。
3　層　赤褐色細砂層　粘性無、締りやや有。
　　1～20㎜焼土ブロック10％含む。
4　層　明赤褐色細砂層　粘性無、締りやや有。
　　1～50㎜焼土ブロック30％含む。

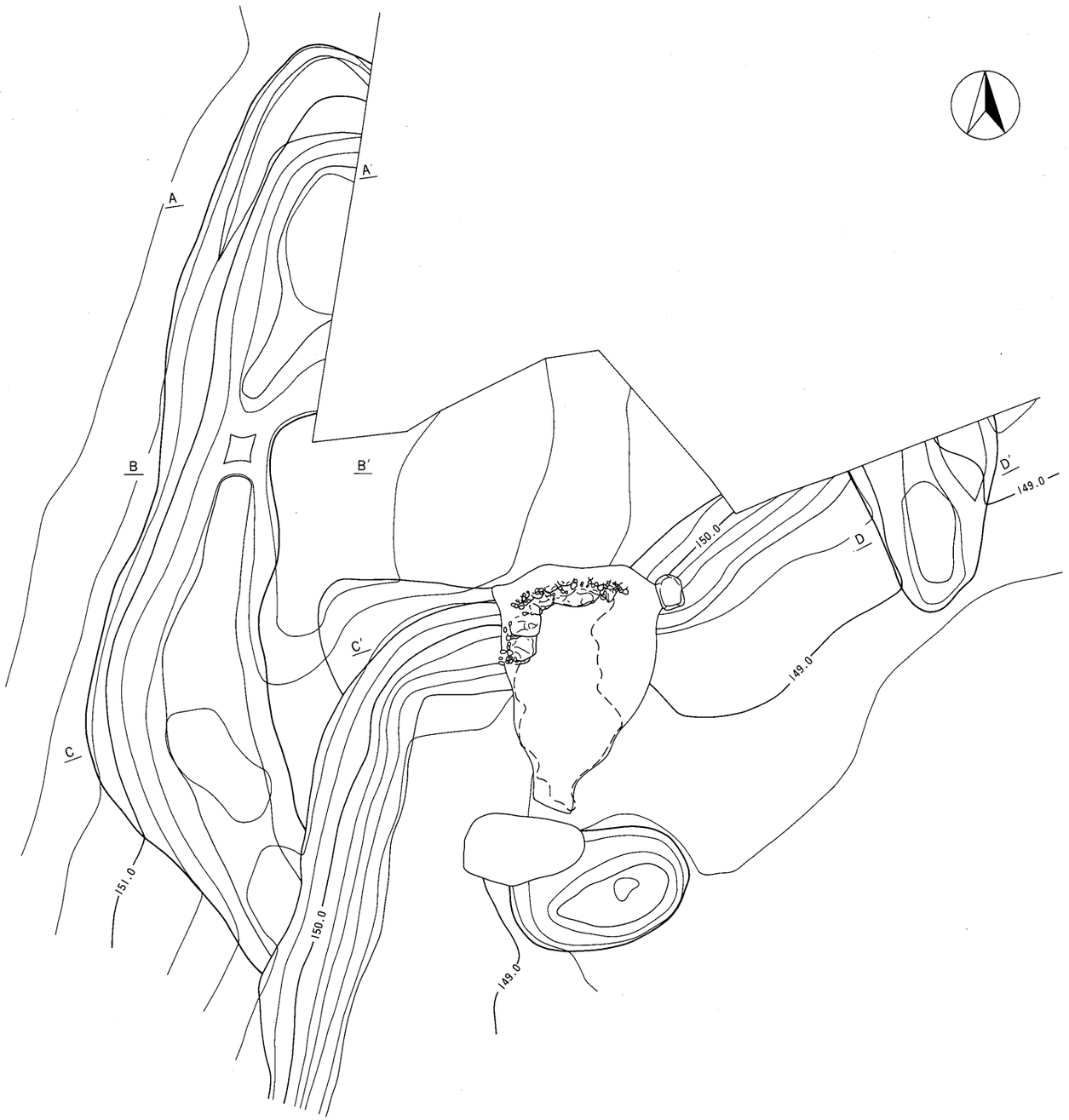
Fig. 23　Z－2号配石墓・上横俵遺跡K－1号炭窯址

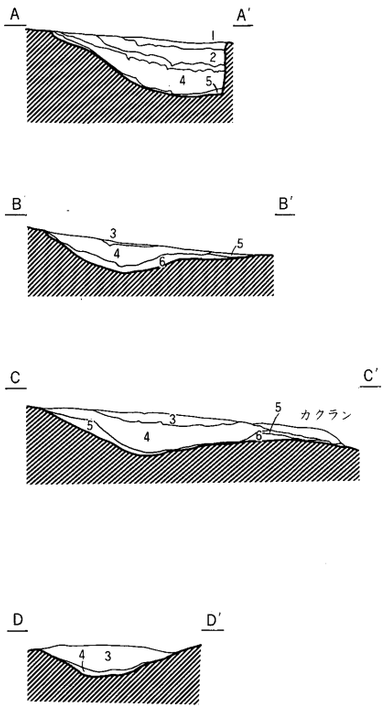


M－1号墳
1　層　黒褐色細砂層　粘性無く、締り無い。
2　層　黒色細砂層　粘性弱く、締り弱い。
3　層　褐色微砂層　粘性強く、締り強い。

Fig. 24　M－1・3号墳墳丘図

M－2





M－2号墳

1　層　黒褐色細砂層　粘性無く、締り弱い。
2　層　黒褐色細砂層　粘性弱く、締り弱い。
3　層　黒褐色細砂層　粘性無く、締り弱い。
4　層　黒色細砂層　粘性弱く、締り弱い。
5　層　褐色微砂層　粘性強く、締り強い。
6　層　暗褐色細砂層　粘性あり、締りあり。

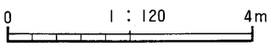


Fig. 25　M－2号墳墳丘図

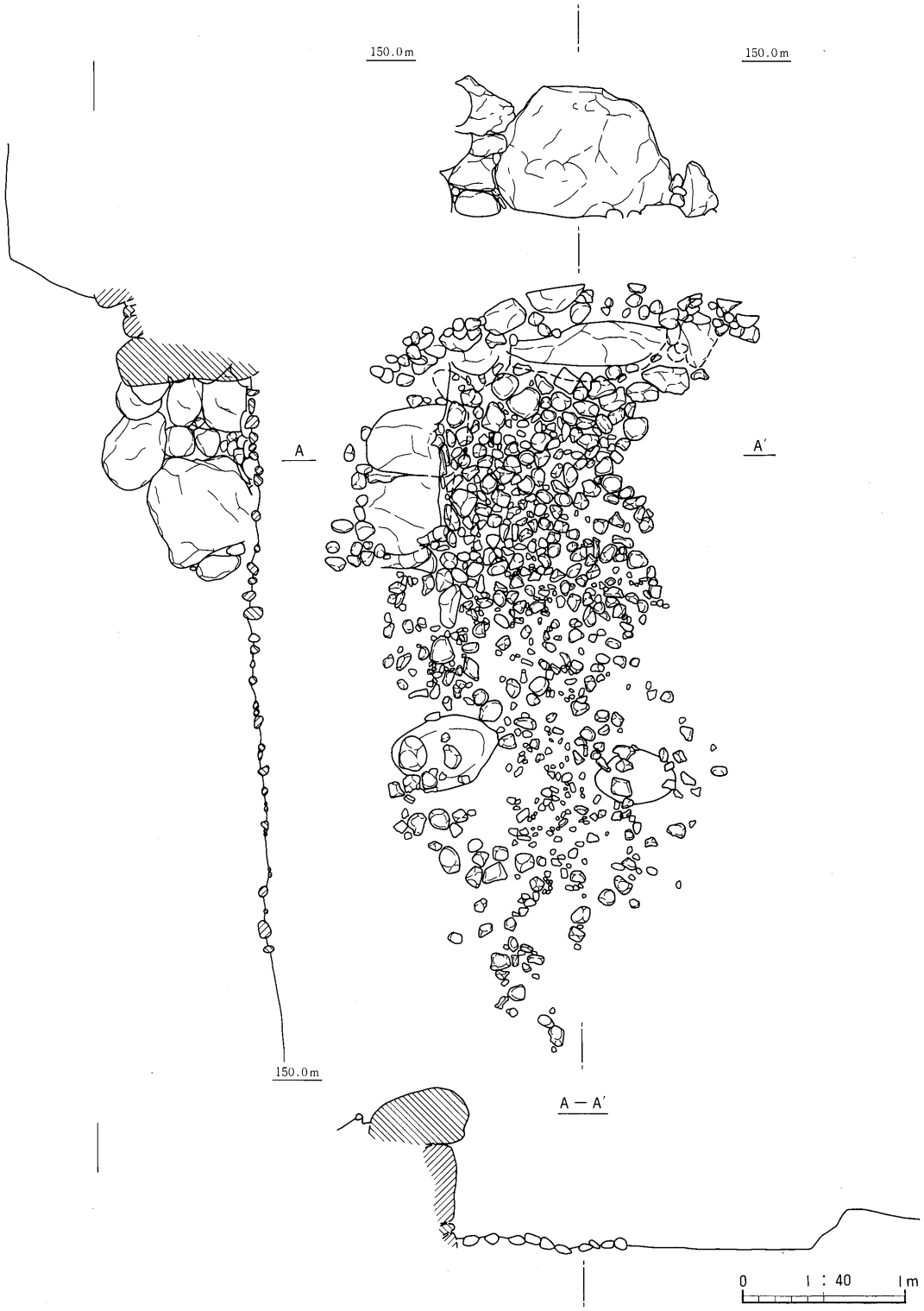
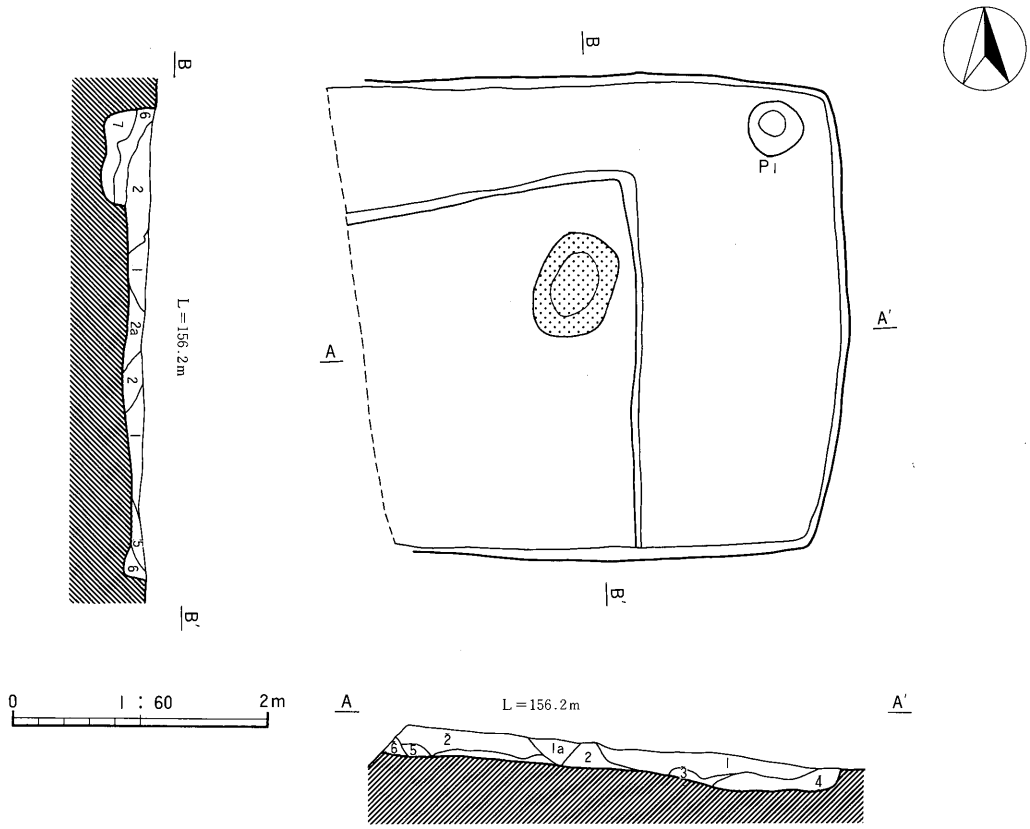


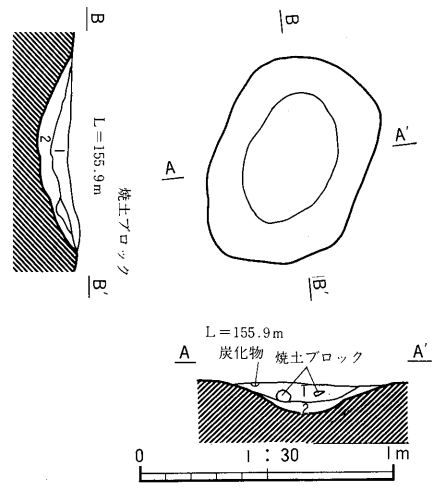
Fig. 26 M－2号墳石室展開図

H－11



H－11号住居址

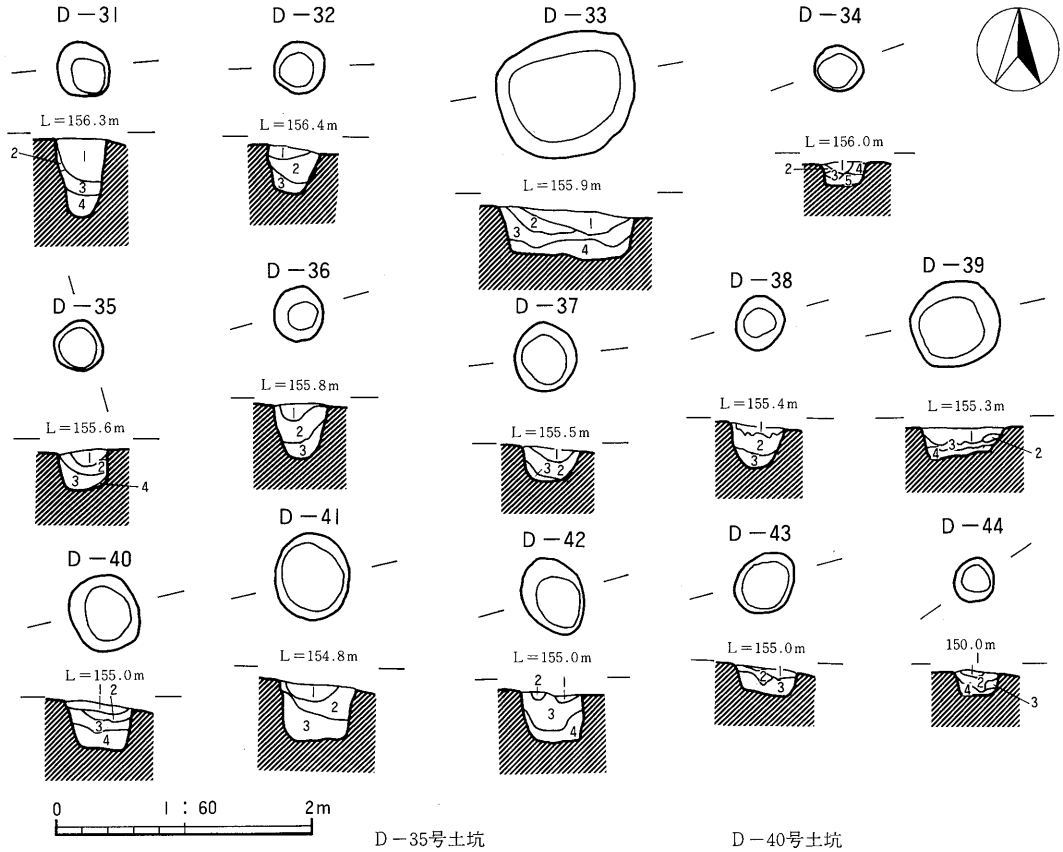
1　層　褐色粗砂層　粘性無、締り無。
1 a 層　褐色粗砂層　粘性無、締り弱。炭化物含む。
2　層　暗褐色粗砂層　粘性無、締り弱。
2 a 層　暗褐色粗砂層　粘性無、締り弱。焼土含む。
3　層　黄褐色細砂層　粘性弱、締り有。
4　層　褐色細砂層　粘性無、締り有。
5　層　暗褐色細砂層　粘性無、締り弱。炭化物含む。
6　層　黒褐色細砂層　粘性無、締り弱。
7　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締り弱。



H－11号住居址　炉

1　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締り弱。炭化物含む。
2　層　褐色微砂層　粘性弱、締り弱。

Fig. 27　H－11号住居址



D－31号土坑
1　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締り弱。
2　層　褐色微砂層　粘性強、締り弱。
3　層　暗褐色細砂層　粘性有、締り有。
4　層　黄褐色細砂層　粘性弱、締り弱。

D－32号土坑
1　層　黒褐色粗砂層　粘性無、締り弱。
2　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締り弱。
3　層　褐色微砂層　粘性弱、締り有。

D－33号土坑
1　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締り弱。
2　層　褐色微砂層　粘性弱、締り弱。
3　層　褐色微砂層　粘性有、締り有。
4　層　褐色微砂層　粘性強、締り強。

D－34号土坑
1　層　黒褐色粗砂層　粘性無、締り弱。
2　層　暗褐色粗砂層　粘性無、締り無。
3　層　褐色細砂層　粘性弱、締り弱。
4　層　褐色細砂層　粘性有、締り有。
5　層　黄褐色微砂層　粘性強、締り強。

D－35号土坑
1　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締り弱。
2　層　褐色細砂層　粘性弱、締り弱。
3　層　褐色微砂層　粘性有、締り有。
4　層　黄褐色微砂層　粘性強、締り強。

D－36号土坑
1　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締り弱。
2　層　褐色微砂層　粘性有、締り有。
3　層　黄褐色微砂層　粘性強、締り強。

D－37号土坑
1　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締り弱。
2　層　褐色微砂層　粘性有、締り有。
3　層　黄褐色微砂層　粘性強、締り強。

D－38号土坑
1　層　暗褐色粗砂層　粘性無、締り無。
2　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締り弱。
3　層　褐色微砂層　粘性有、締り有。

D－39号土坑
1　層　黒褐色粗砂層　粘性無、締り弱。
2　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締り弱。
3　層　褐色微砂層　粘性有、締り有。
4　層　黄褐色微砂層　粘性強、締り強。

D－40号土坑
1　層　暗褐色粗砂層　粘性無、締り無。
2　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締り弱。
3　層　褐色微砂層　粘性有、締り有。
4　層　褐色微砂層　粘性強、締り強。

D－41号土坑
1　層　黒褐色粗砂層　粘性無、締り無。
2　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締り弱。
3　層　褐色微砂層　粘性有、締り有。

D－42号土坑
1　層　黒褐色粗砂層　粘性無、締り弱。
2　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締り弱。
3　層　褐色微砂層　粘性有、締り有。
4　層　褐色微砂層　粘性強、締り強。

D－43号土坑
1　層　暗褐色粗砂層　粘性無、締り無。
2　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締り弱。
3　層　褐色微砂層　粘性有、締り有。

D－44号土坑
1　層　暗褐色粗砂層　粘性無、締り無。
2　層　暗褐色細砂層　粘性弱、締り弱。
3　層　褐色微砂層　粘性有、締り有。
4　層　褐色微砂層　粘性強、締り強。

Fig. 28　古墳時代の土坑

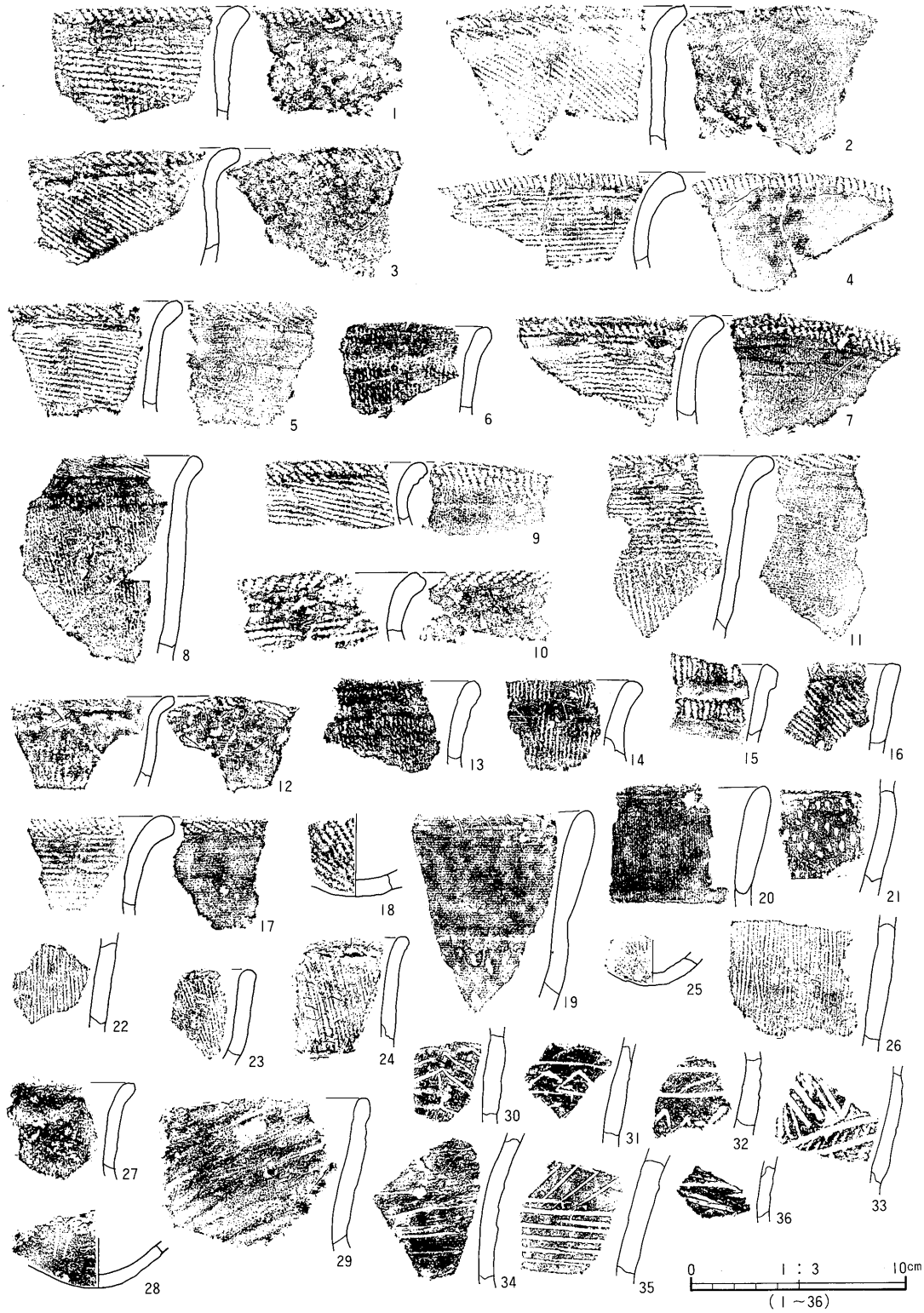


Fig. 29 縄文式土器(1)…Ⅰ～Ⅲ群土器

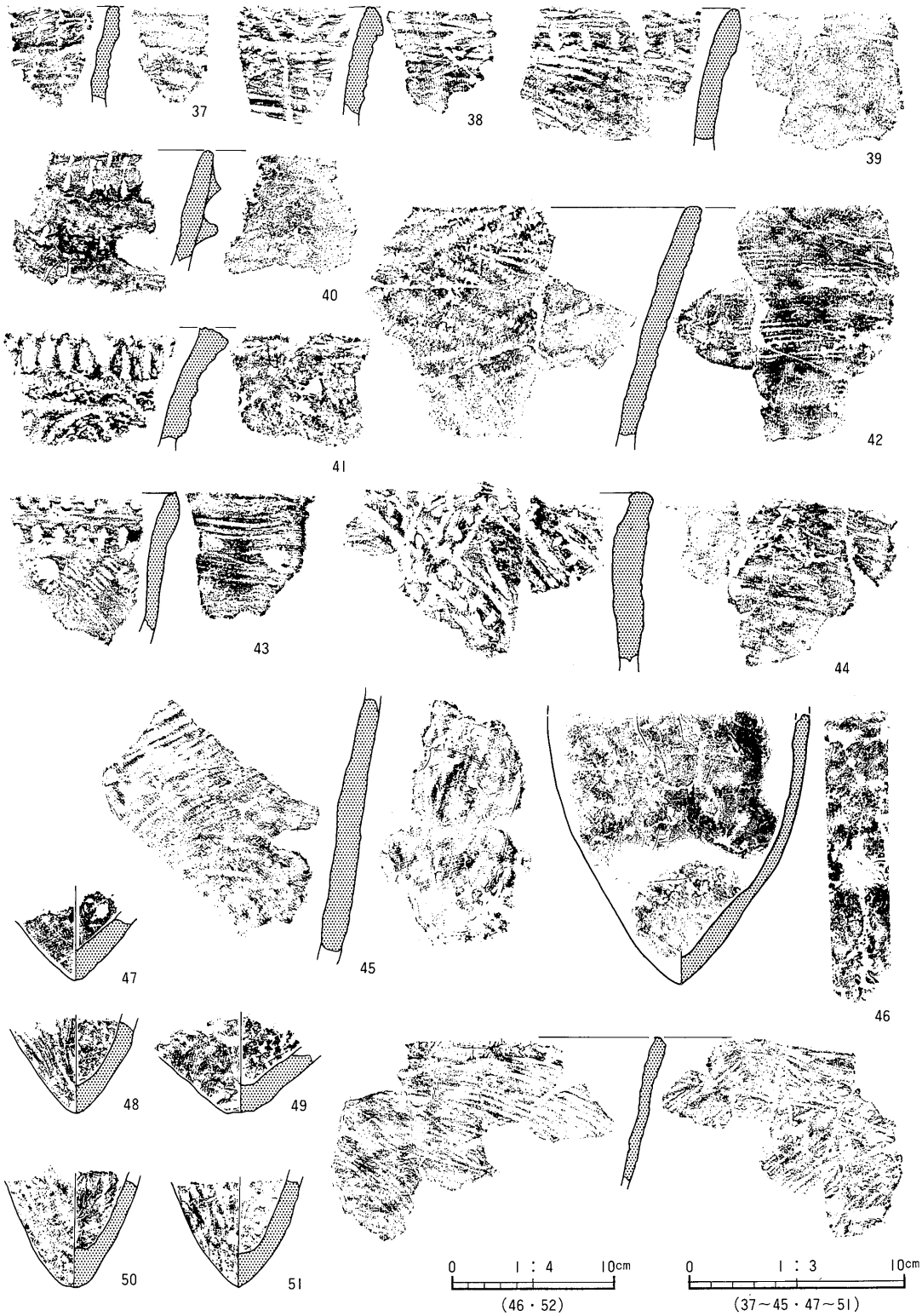


Fig. 30 縄文式土器(2)…Ⅳ群土器

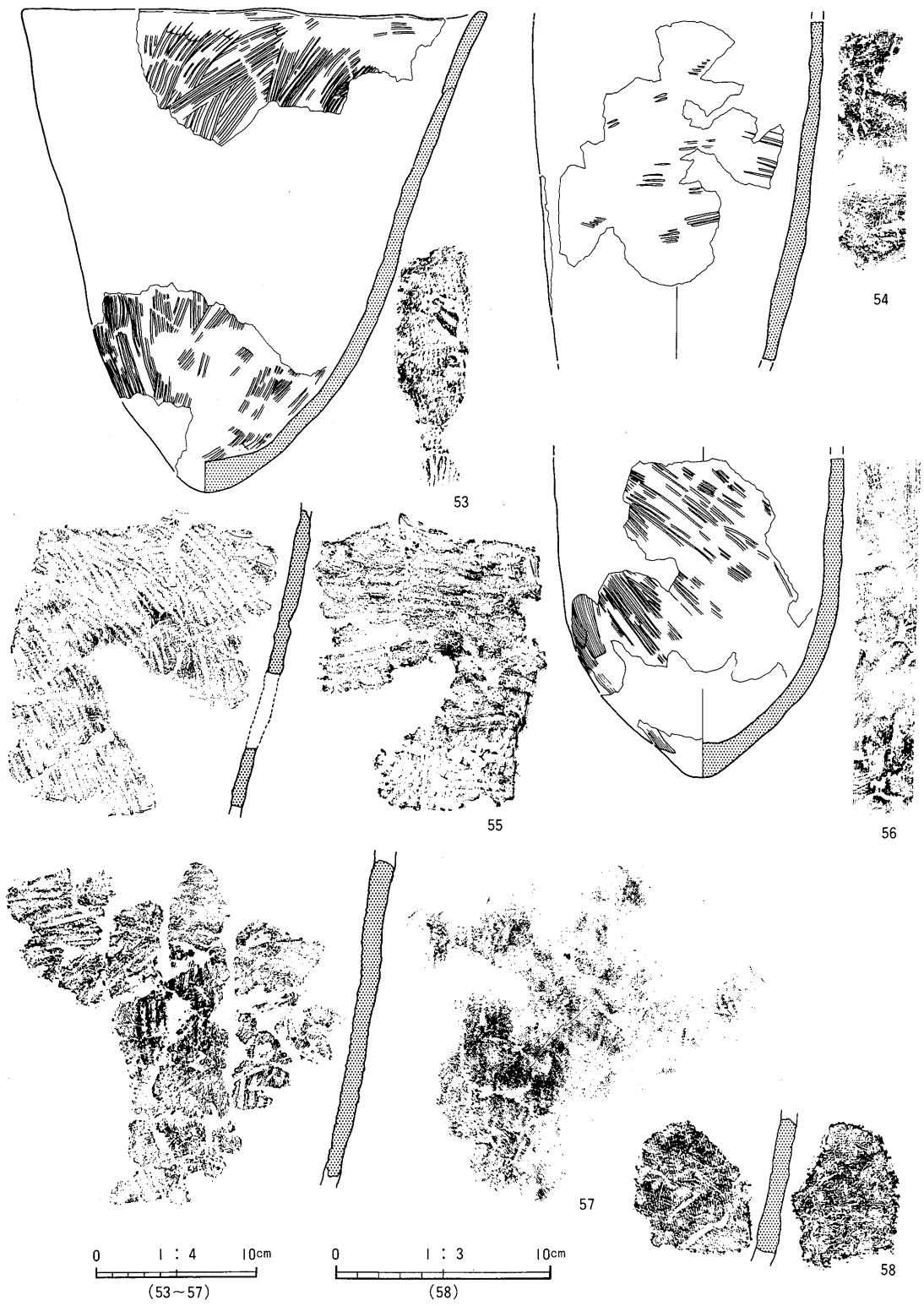


Fig. 31 縄文式土器(3)…Ⅳ群土器

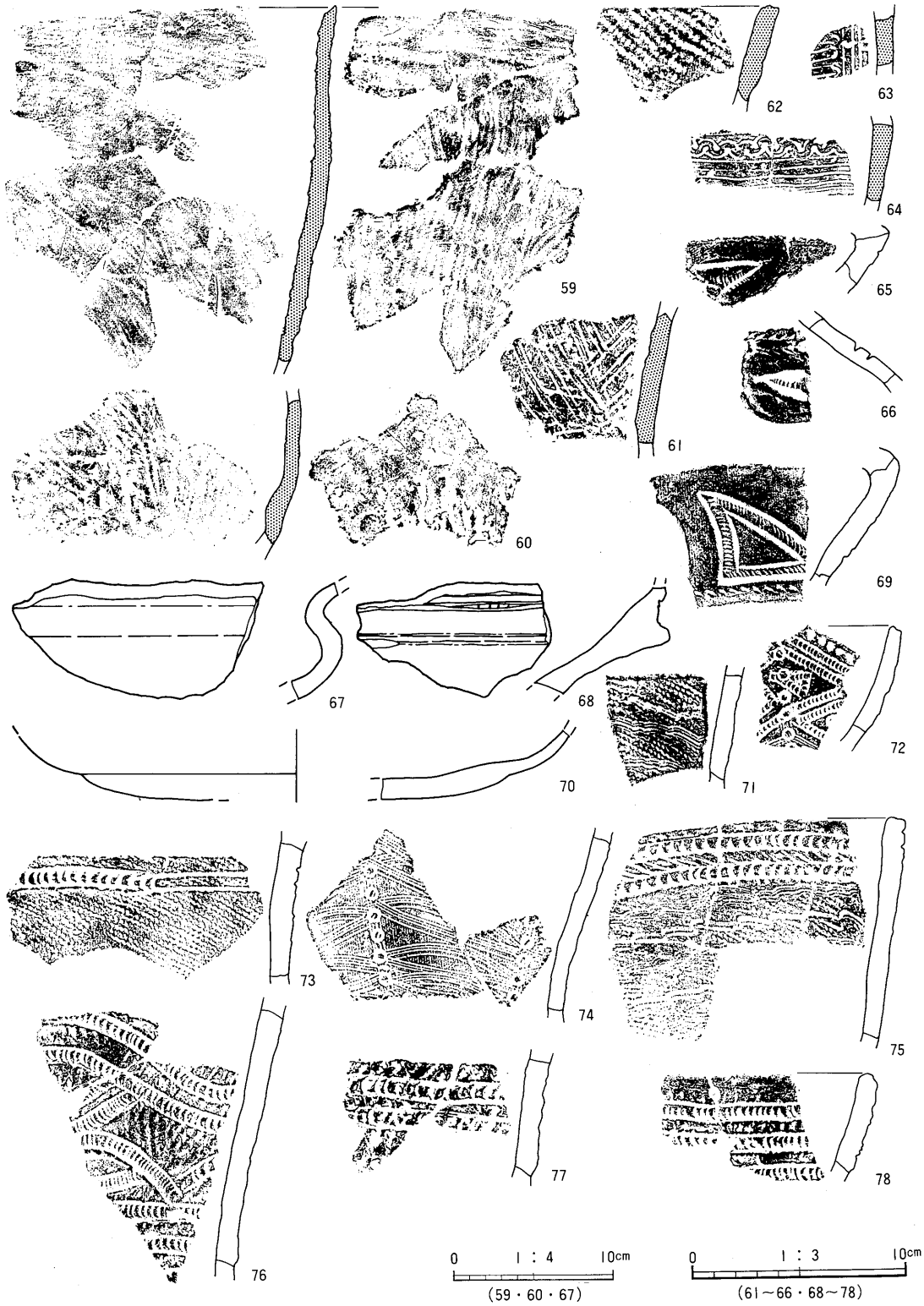


Fig. 32 縄文式土器(4)…Ⅳ～Ⅵ群土器

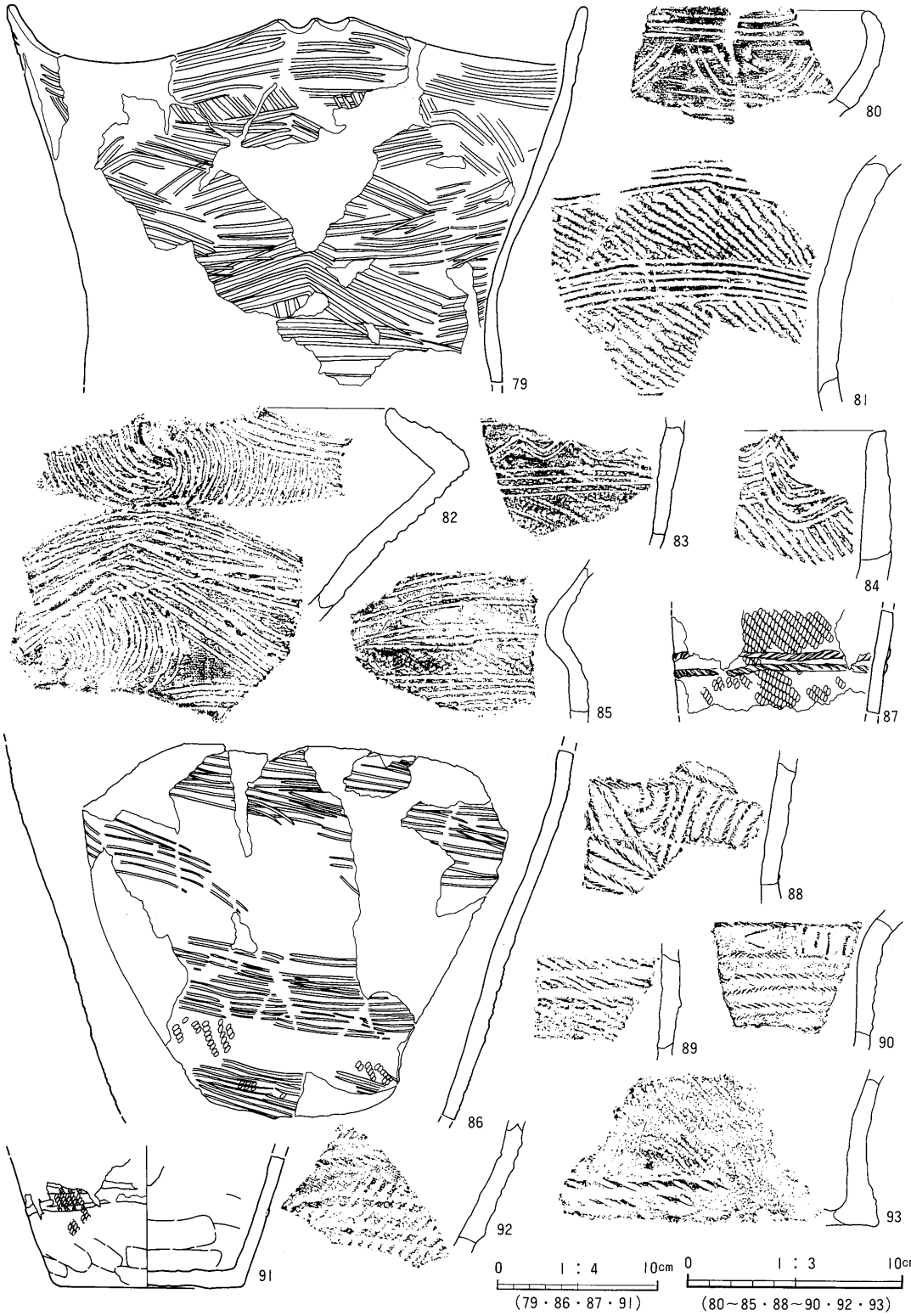


Fig. 33 縄文式土器(5)…Ⅵ群土器

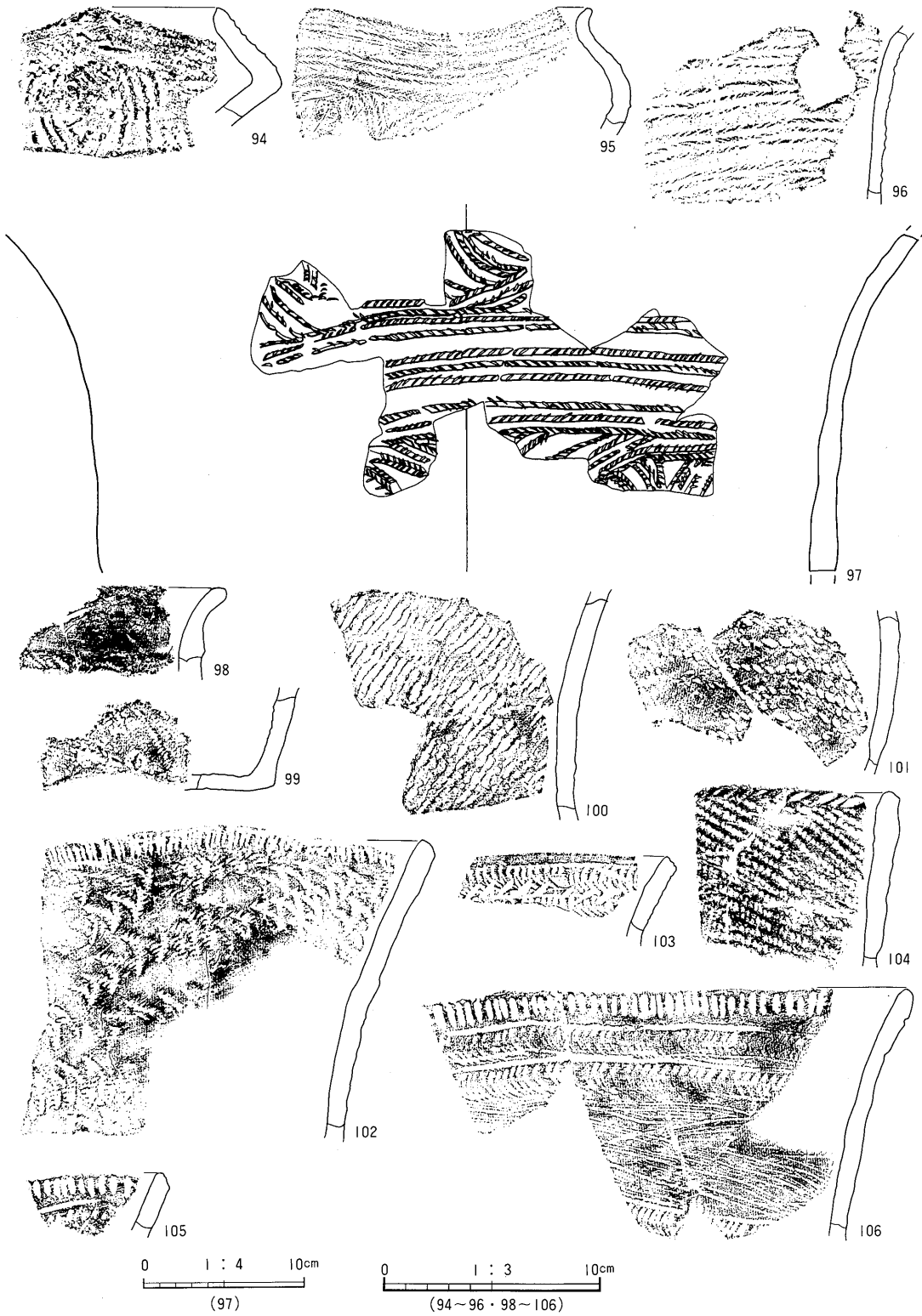


Fig. 34 縄文式土器(6)…Ⅵ群土器

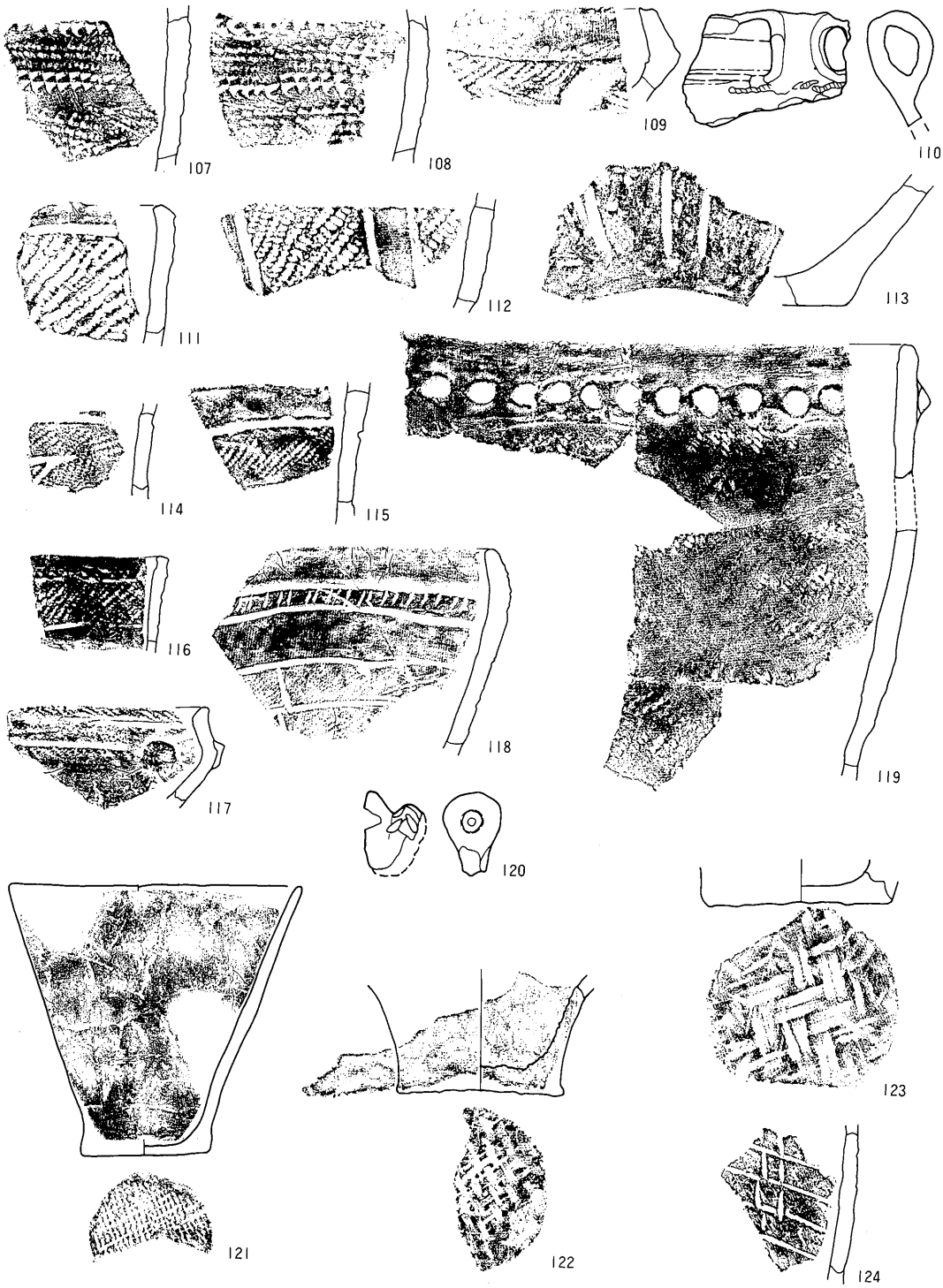


Fig. 35 縄文式土器(7)…Ⅵ～Ⅷ群土器

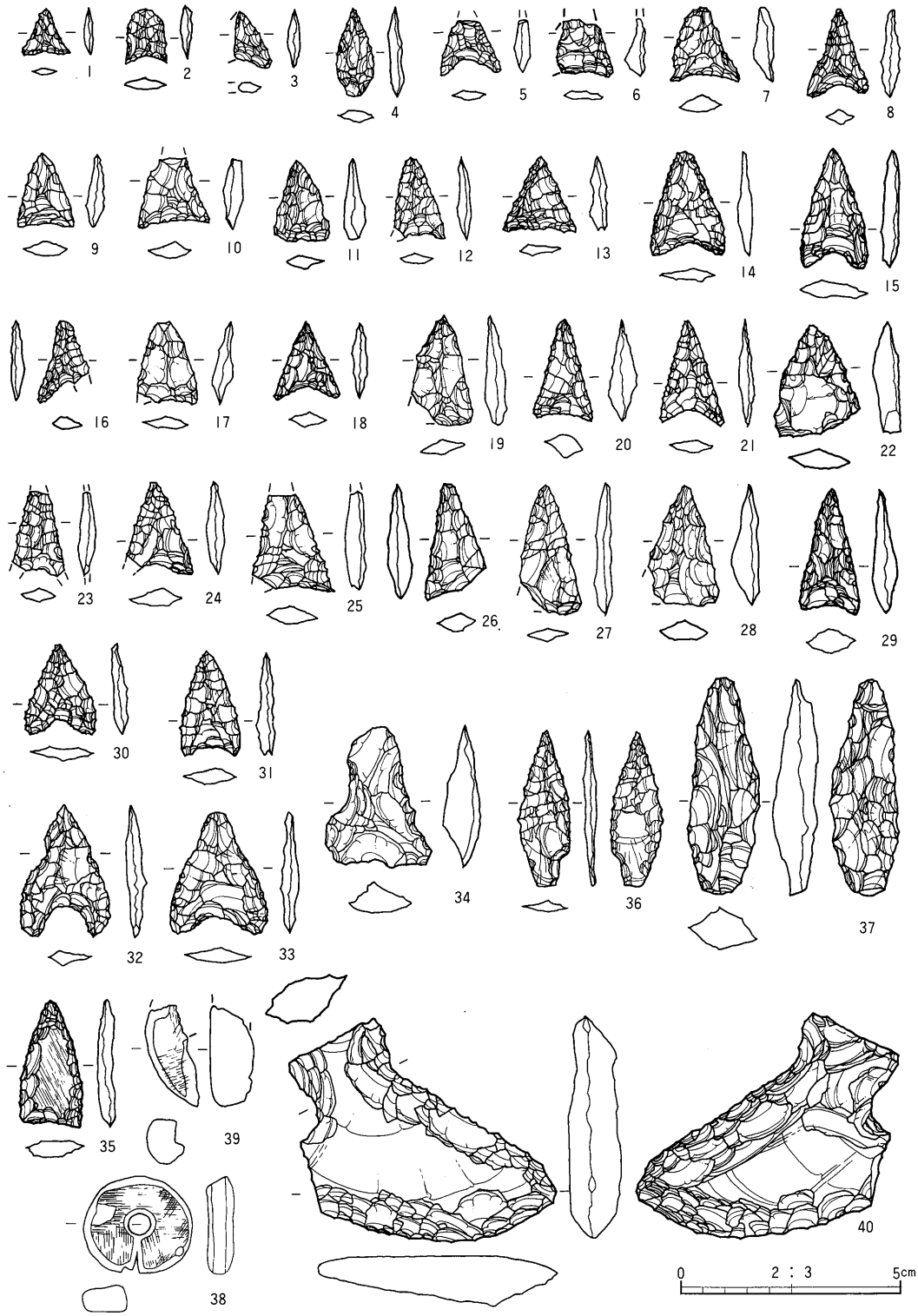


Fig. 36　縄文時代の石器(1)

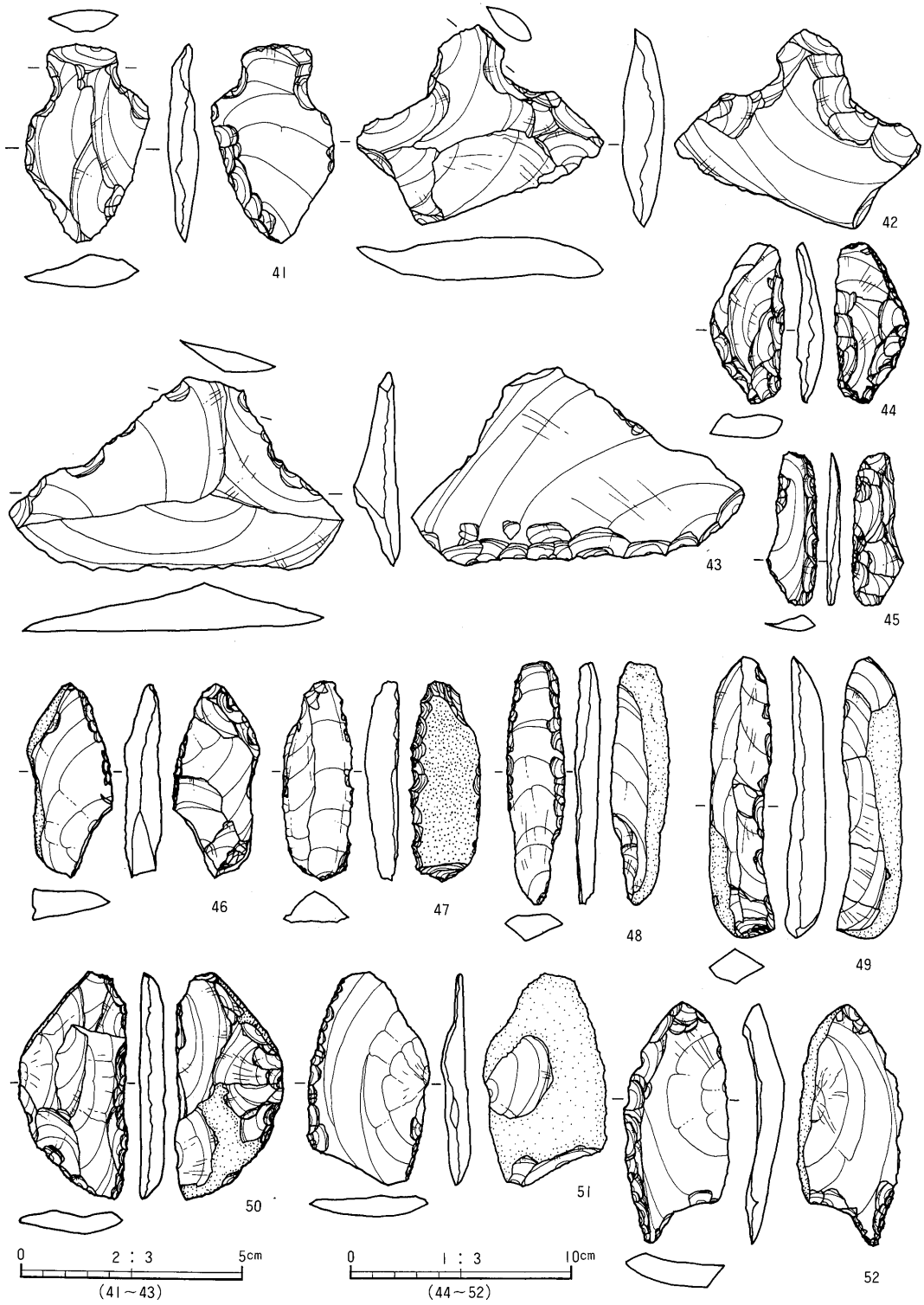


Fig. 37 縄文時代の石器(2)

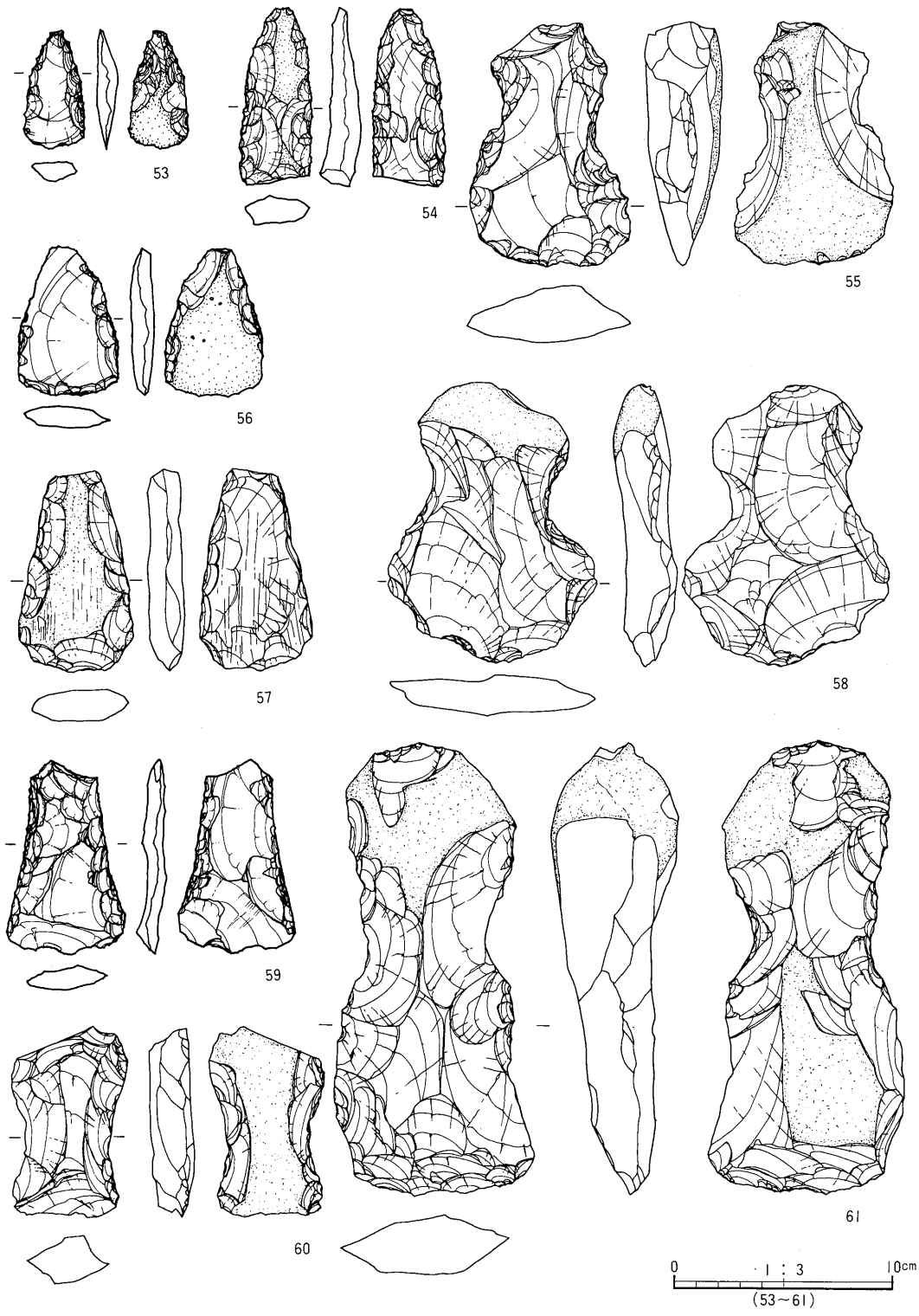


Fig. 38 縄文時代の石器(3)

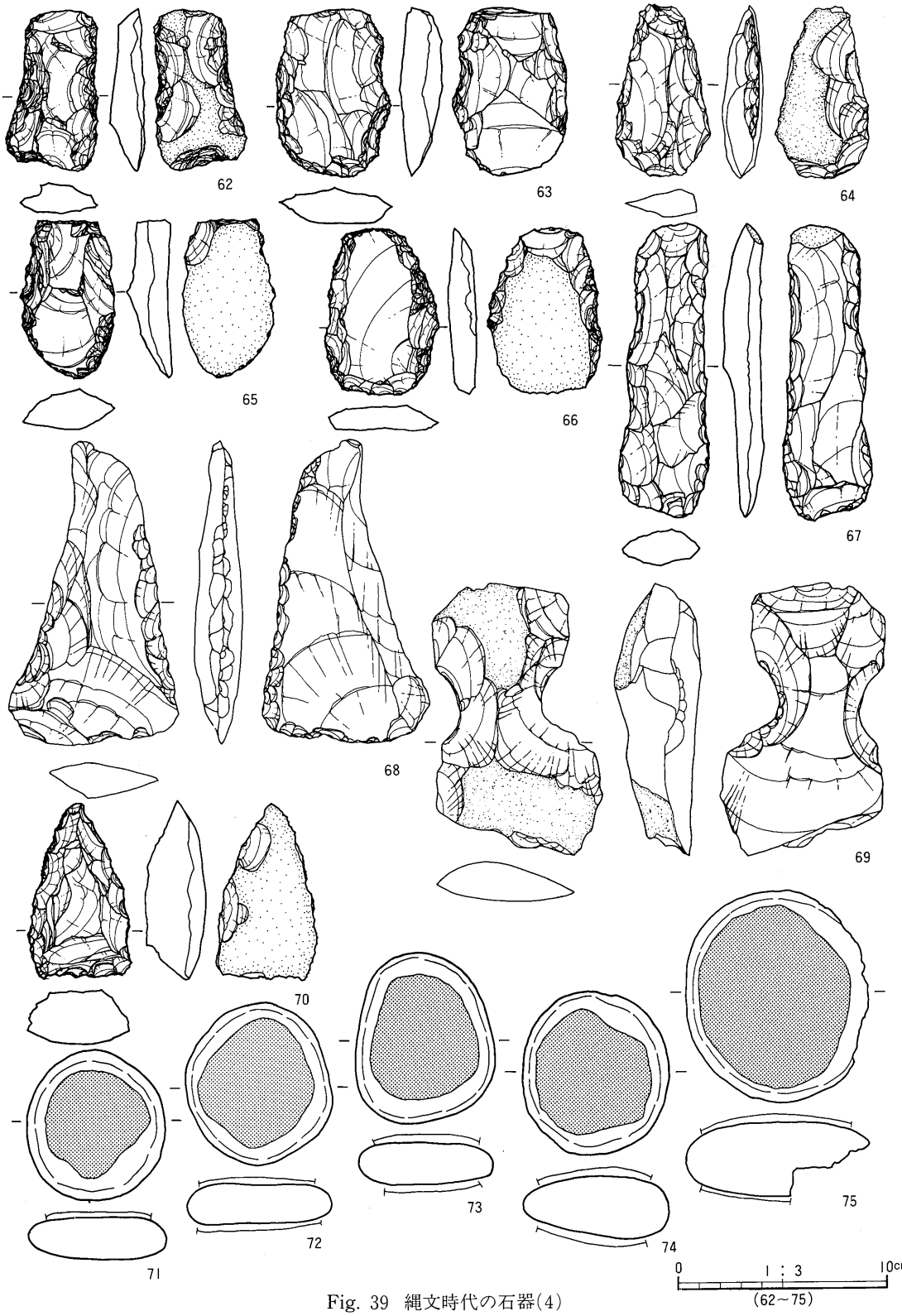


Fig. 39 縄文時代の石器(4)

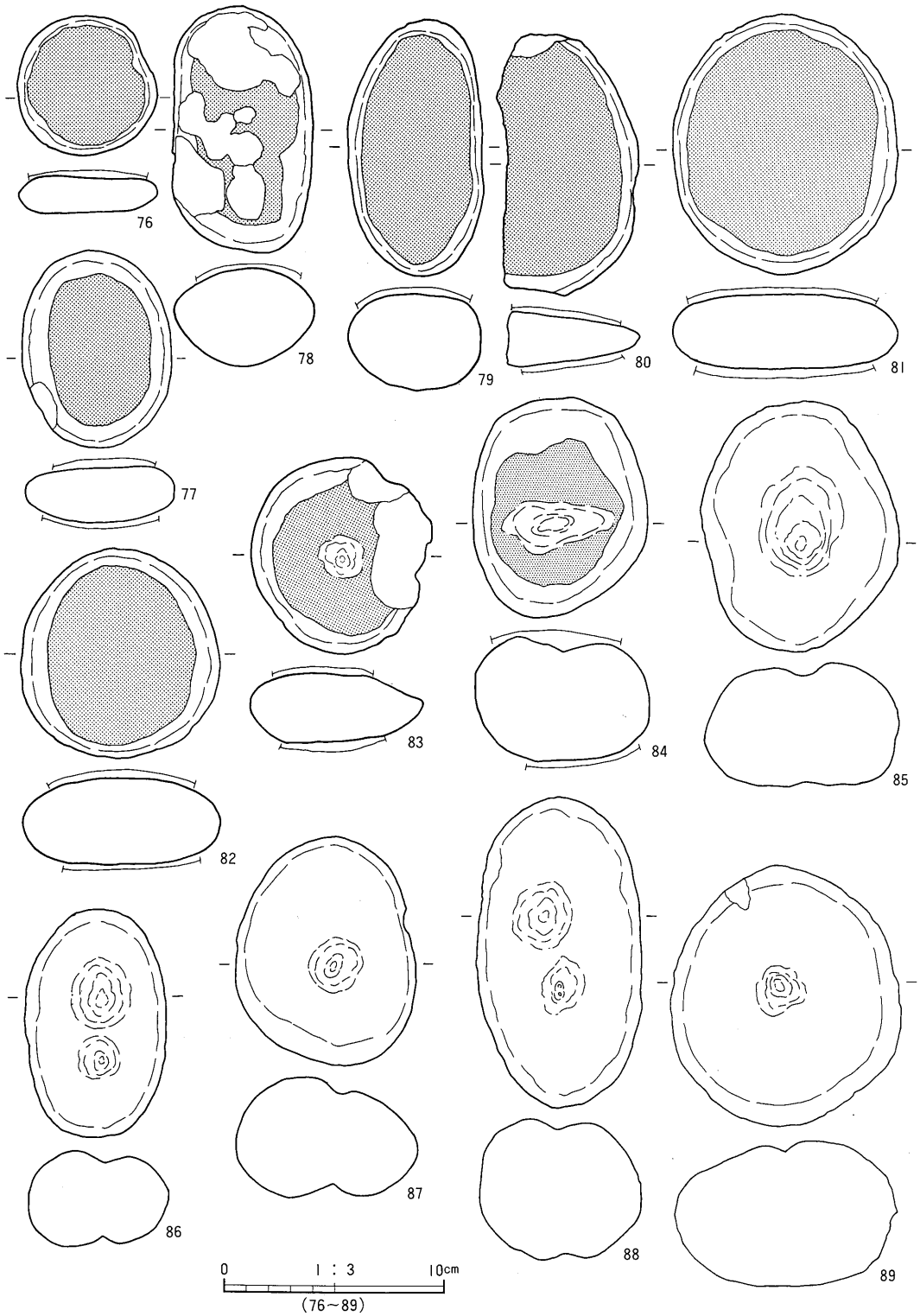


Fig. 40 縄文時代の石器(5)

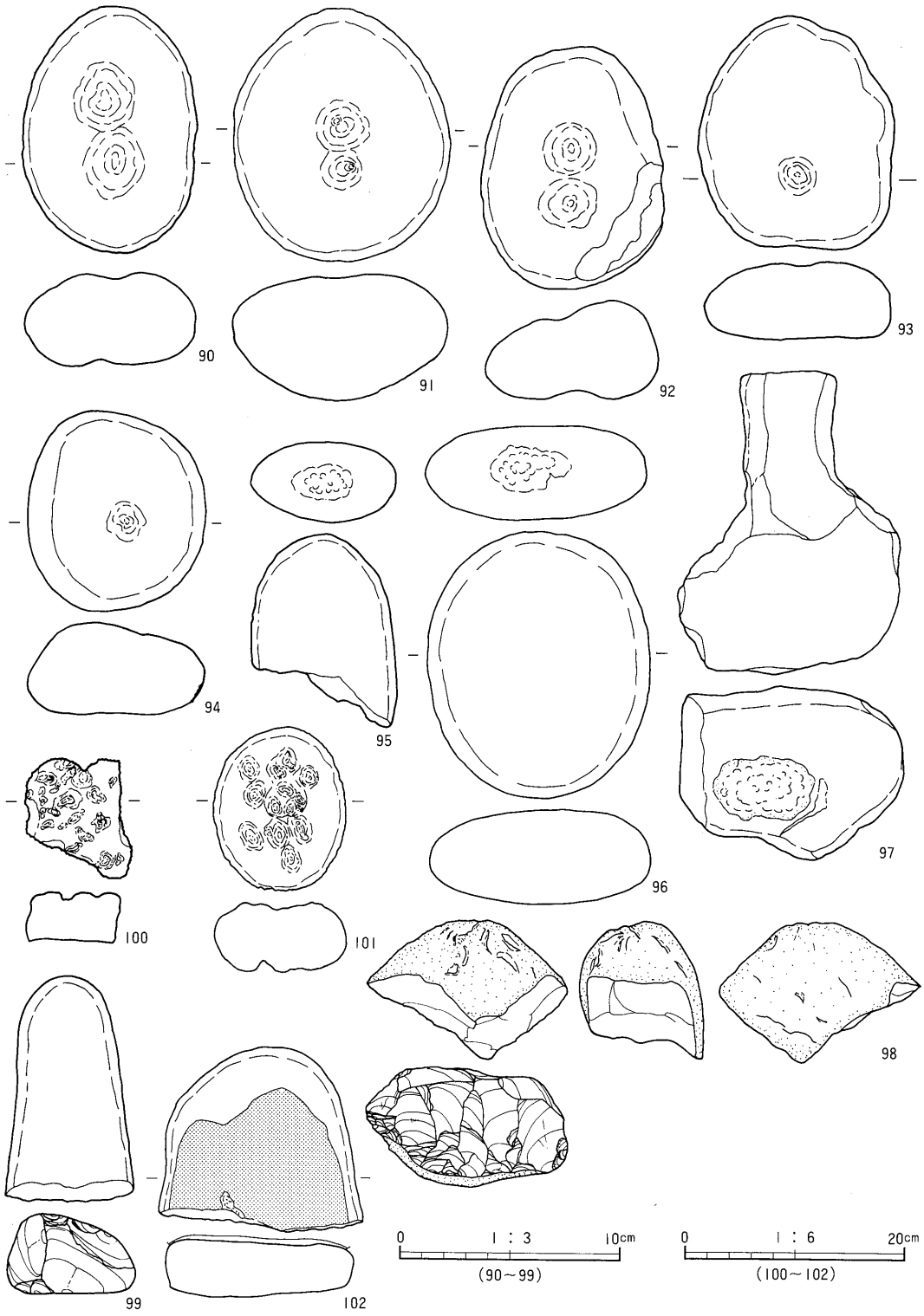


Fig. 41 縄文時代の石器(6)

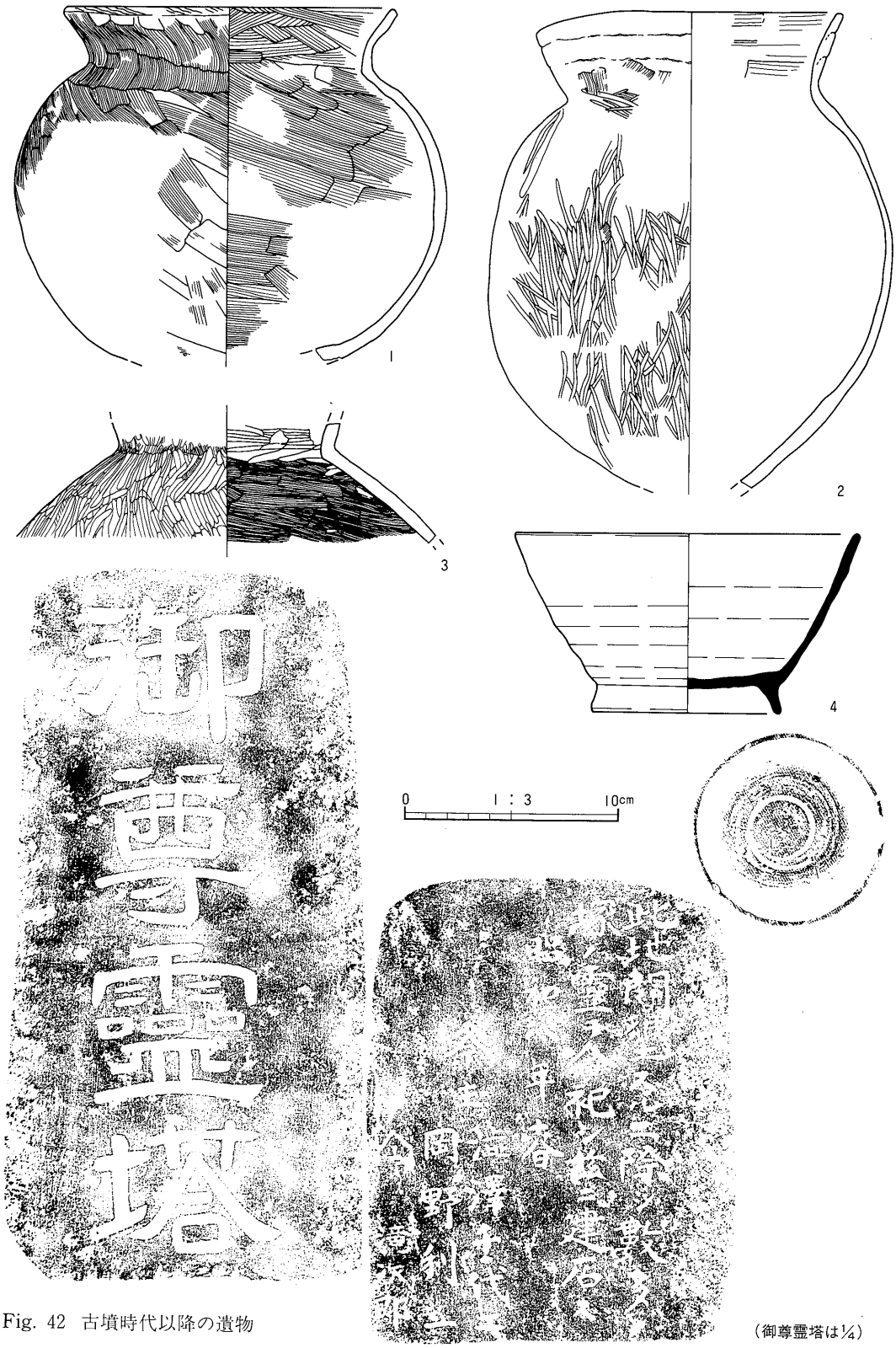


Fig. 42 古墳時代以降の遺物

（御尊霊塔は¼）

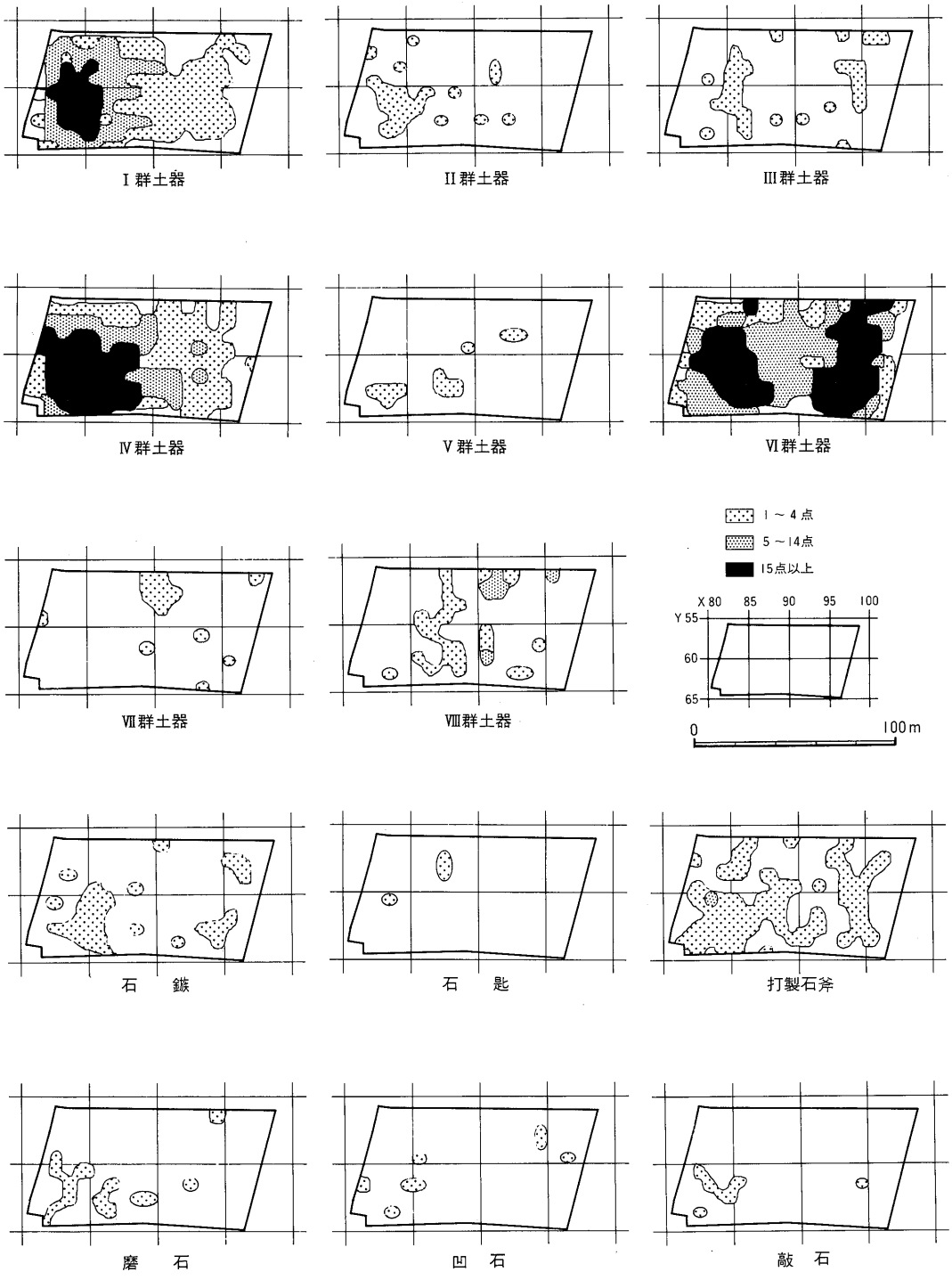
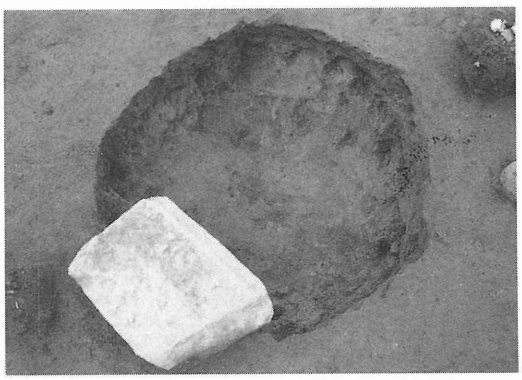


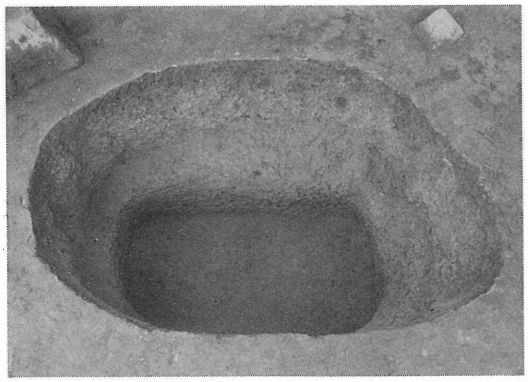
Fig. 43　縄文時代遺物包含層の遺物分布

1．熊の穴Ⅱ遺跡Ａ区全景（東から）

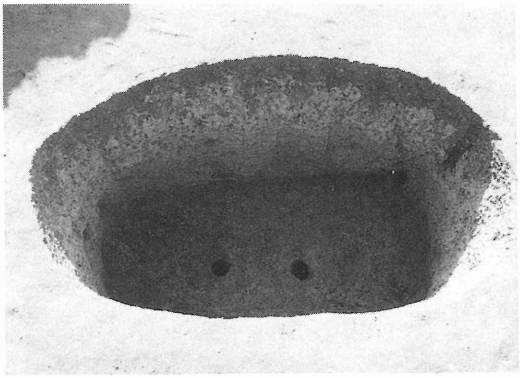
2．Ｓ－７号集石（東から）



3．ＪＤ－29号土坑（西から）



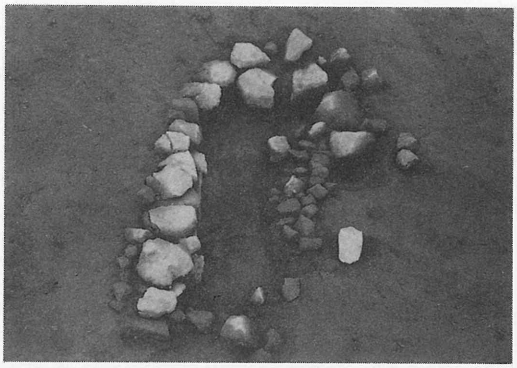
4．ＪＤ－31号土坑（南から）



5．ＪＤ－36号土坑（北東から）

PL. 2

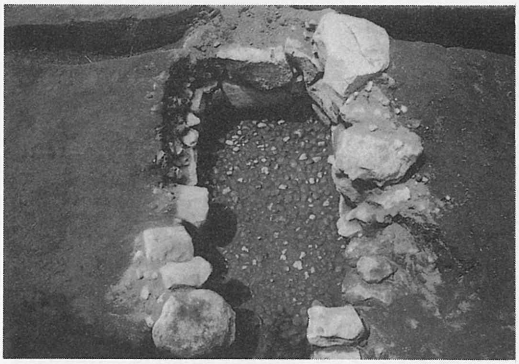
1．Z－2号配石基検出状態（東から）



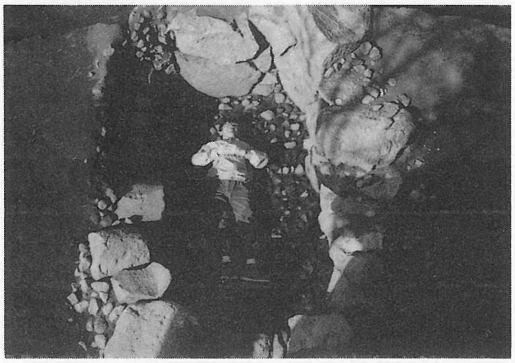
2．Z－2号配石基（東から）

3．M－12・13・14号墳（西から）

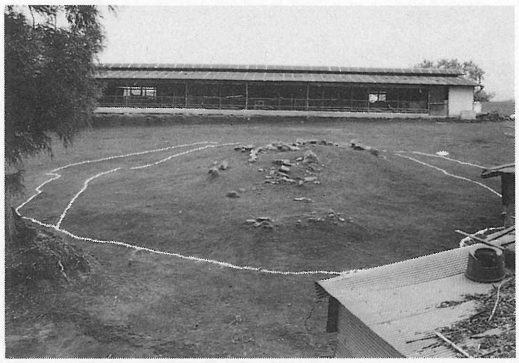
4．M－11号墳主体部検出状態（西から）



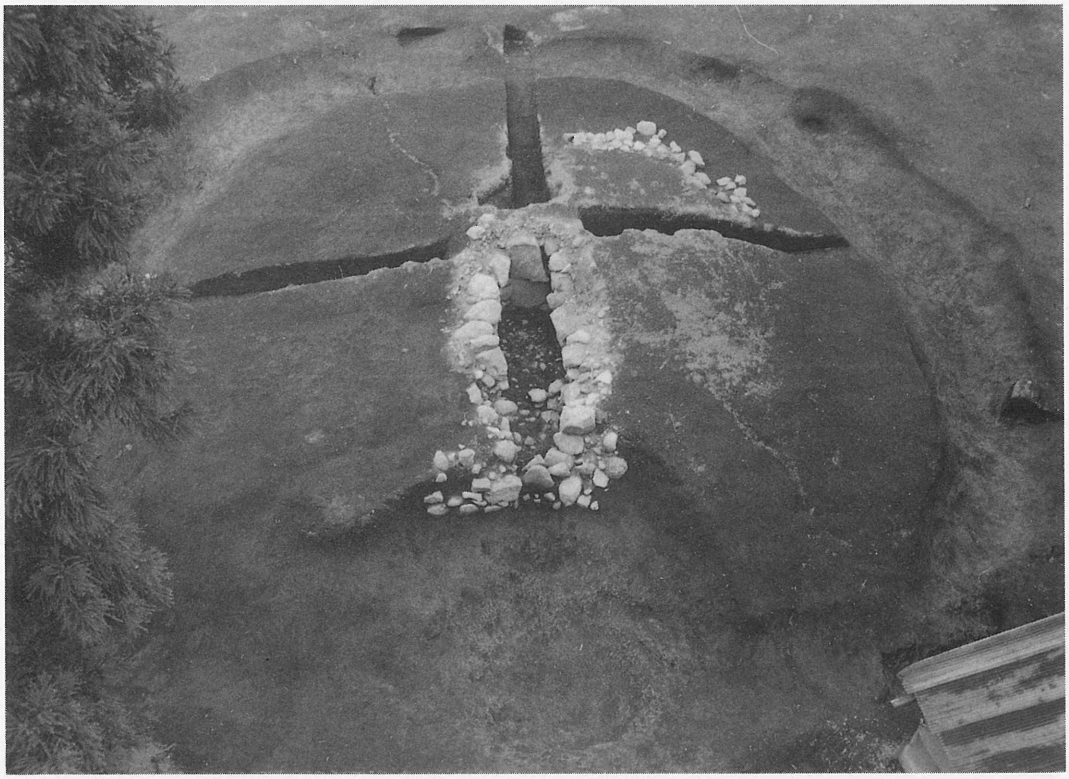
5．M－11号墳主体部（南から）



1．M－11号墳主体部（南から）



2．M－12号墳（調査前・南から）

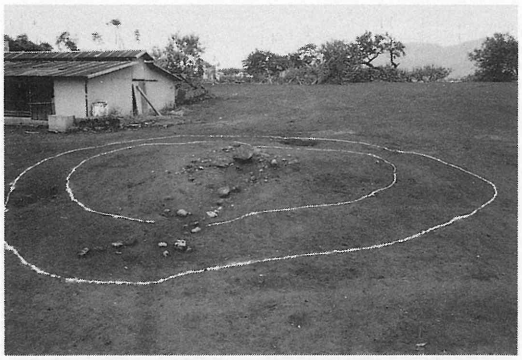


3．M－12号墳（南から）

4．M－12号墳主体部・前庭部（南から）

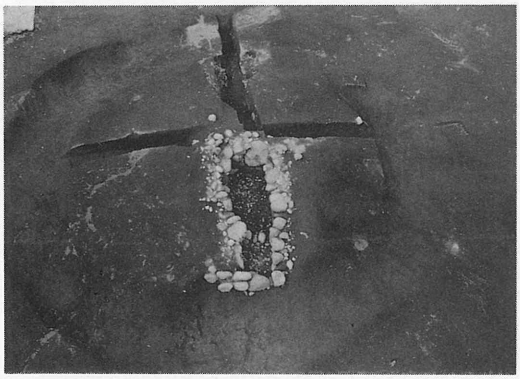
5．M－12号墳主体部（南から）

PL. 4

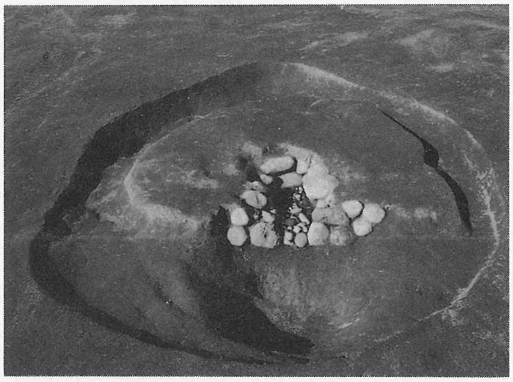


1．M－13号墳（調査前・南から）

2．M－13号墳主体部・前庭部（南から）



3．M－13号墳主体部（南から）



4．M－14号墳（南から）

5．上横俵遺跡全景（南西から）

1．M－２号墳（南から）

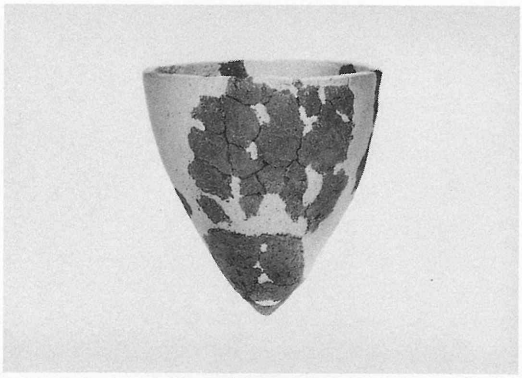
2．K－１号炭窯址（東から）

3．熊の穴遺跡全景（南西から）

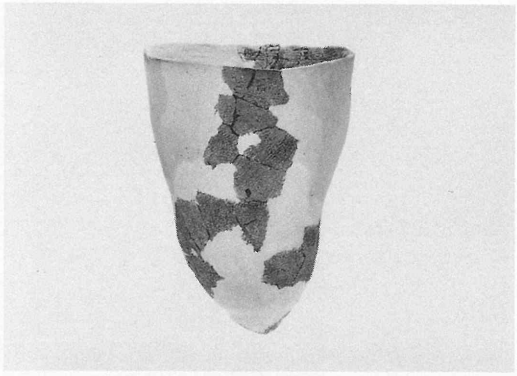
4．H－11号住居址（南から）

5．調査を終えて

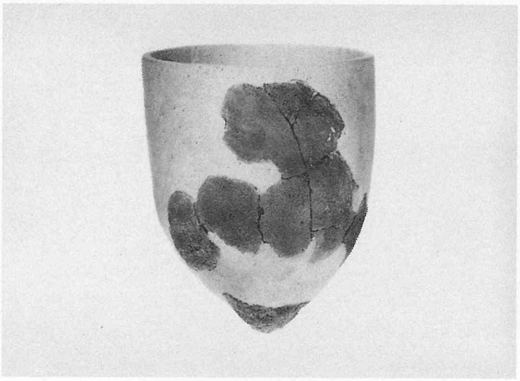
PL. 6



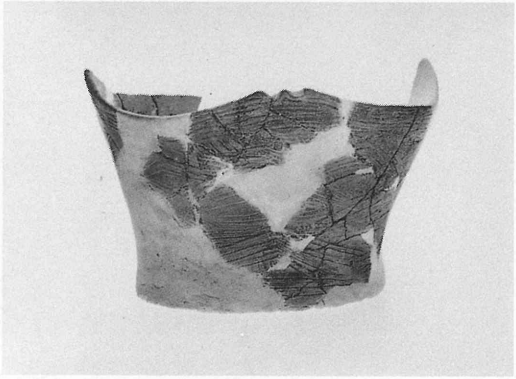
1．X85Y62グリッド(46)



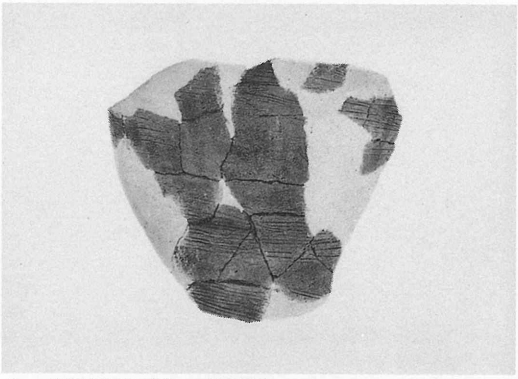
2．X82Y61グリッド(53)



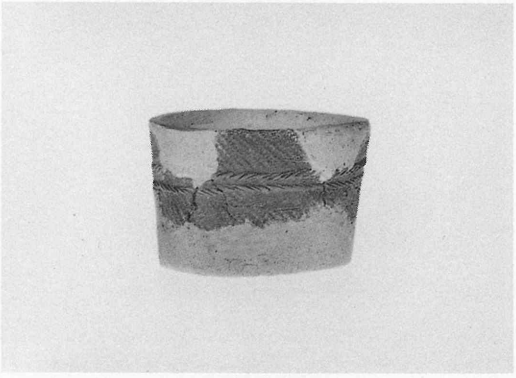
3．X83Y61グリッド(56)



4．X91Y63グリッド(79)



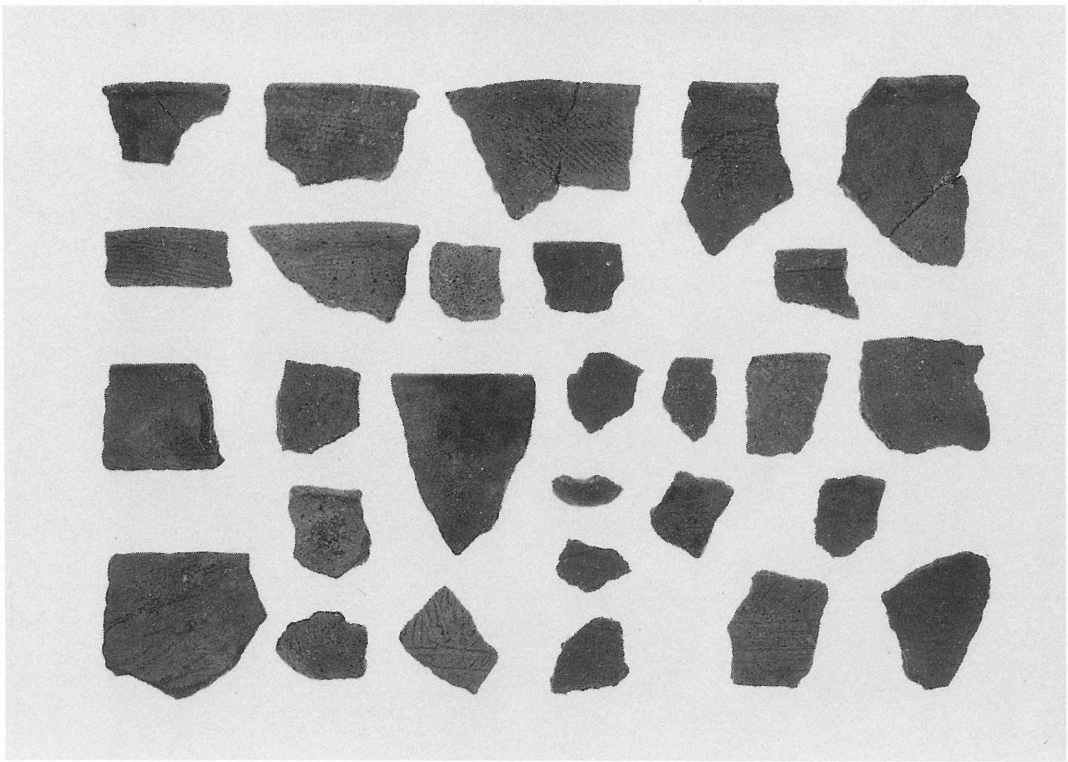
5．X95Y59グリッド(86)



6．X93Y57グリッド(87)

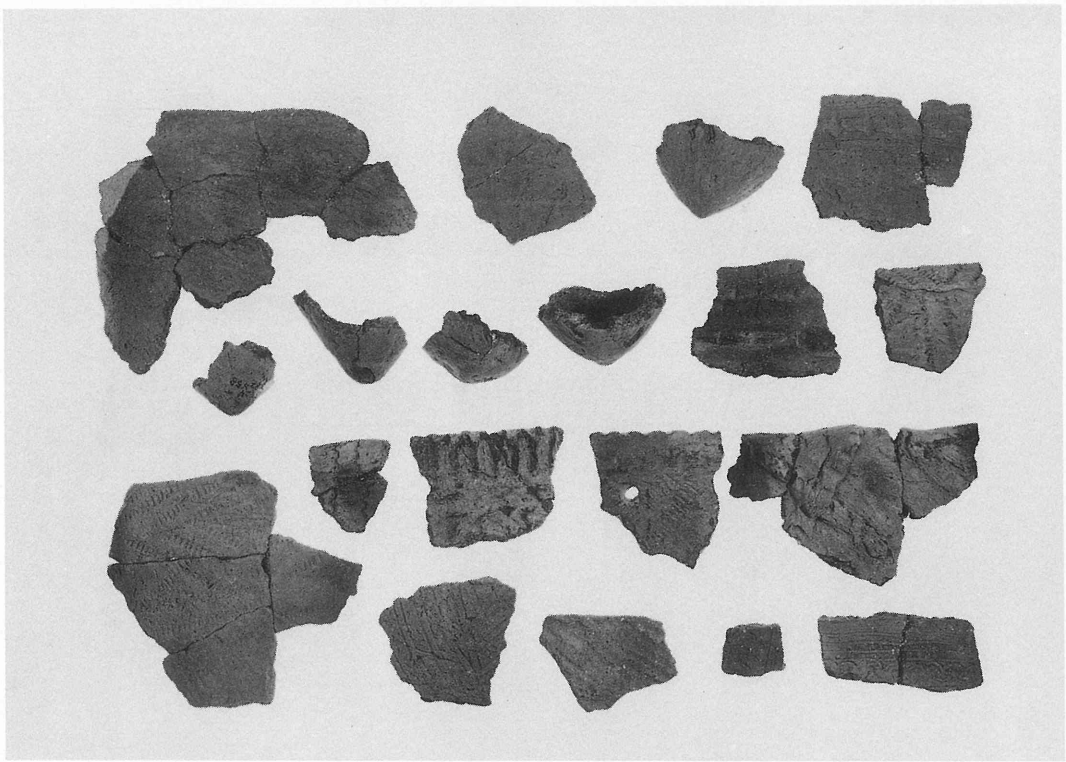
7．X83Y59グリッド(91)

8．X90Y62グリッド(121)

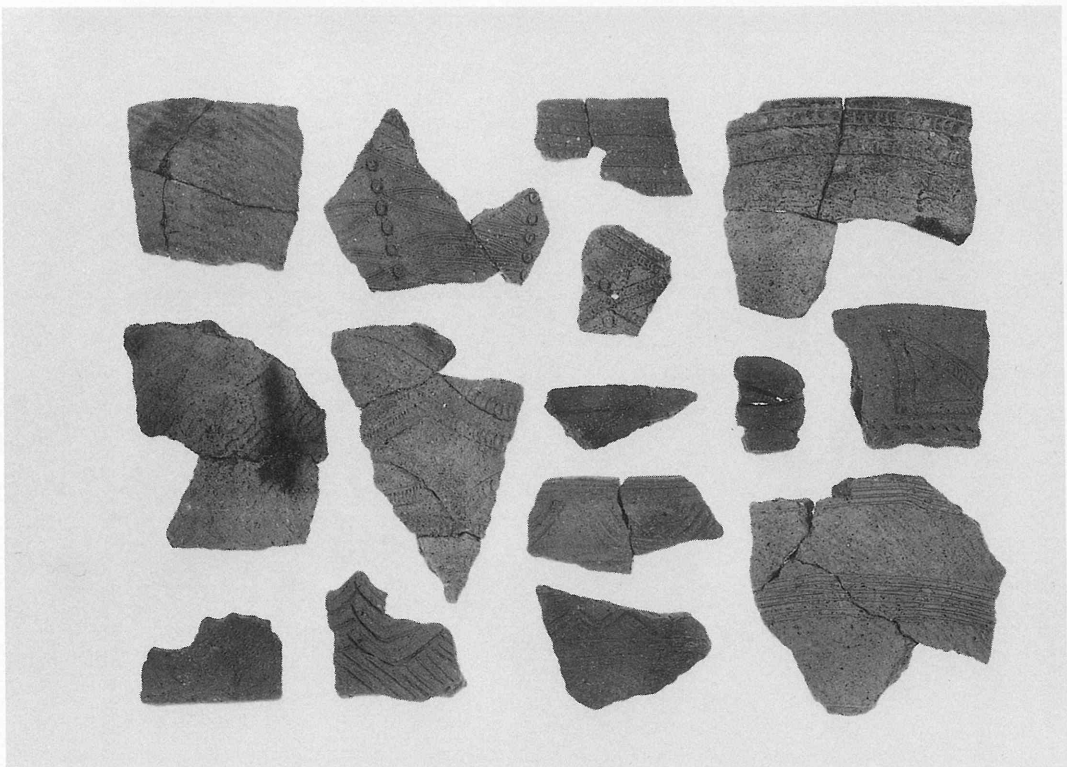


1．Ⅰ～Ⅲ群土器

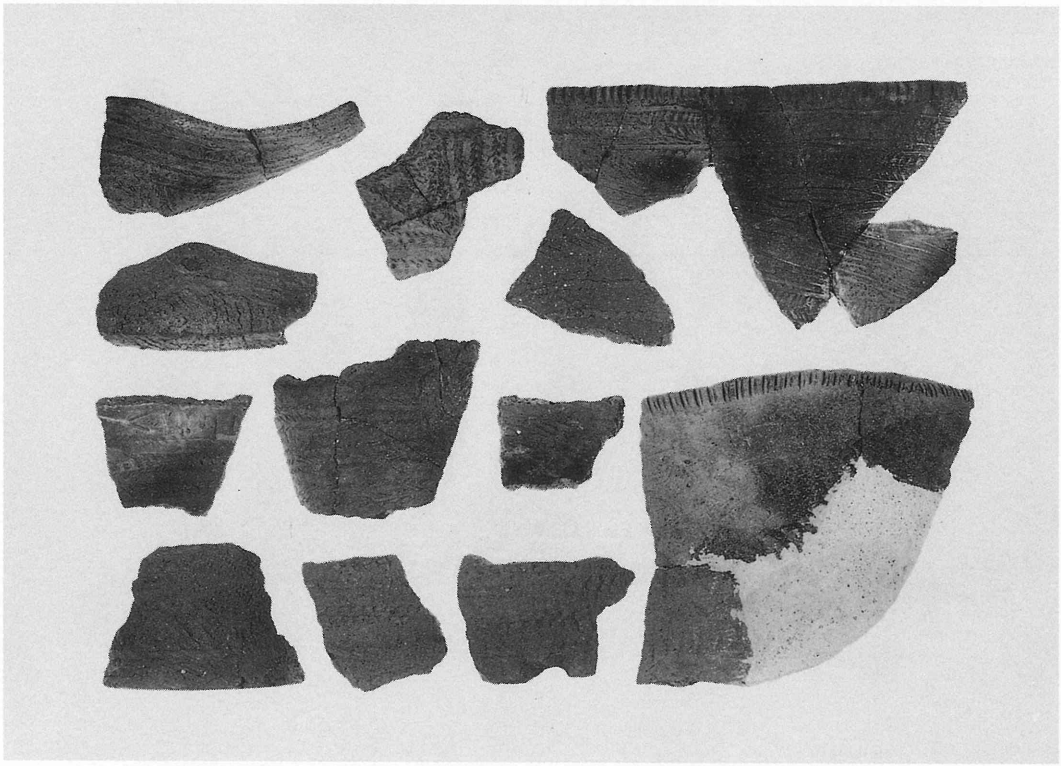
2．Ⅳ群土器



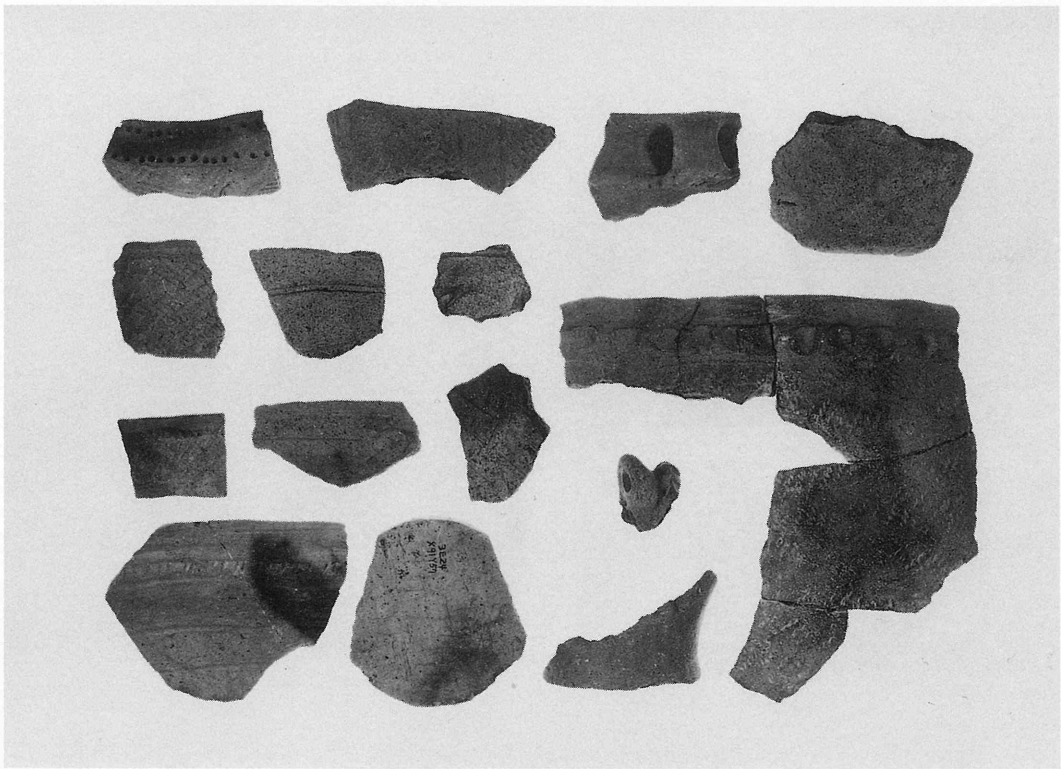
1. Ⅳ・Ⅴ群土器



2. Ⅵ群土器

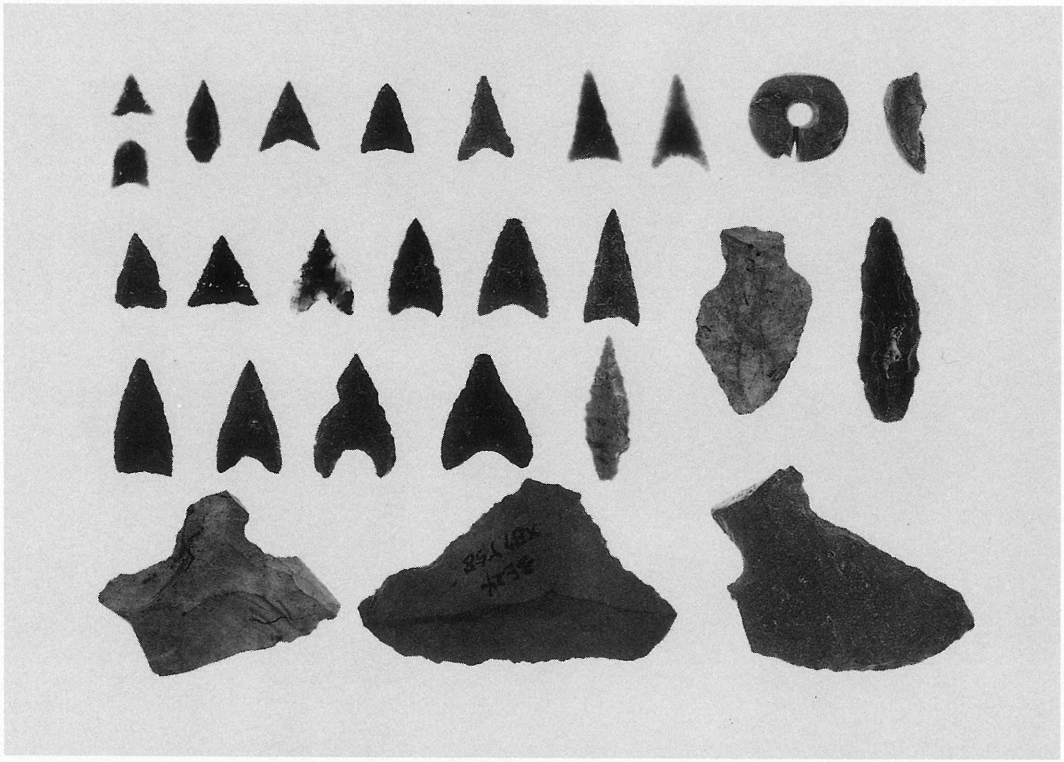


1. Ⅵ群土器

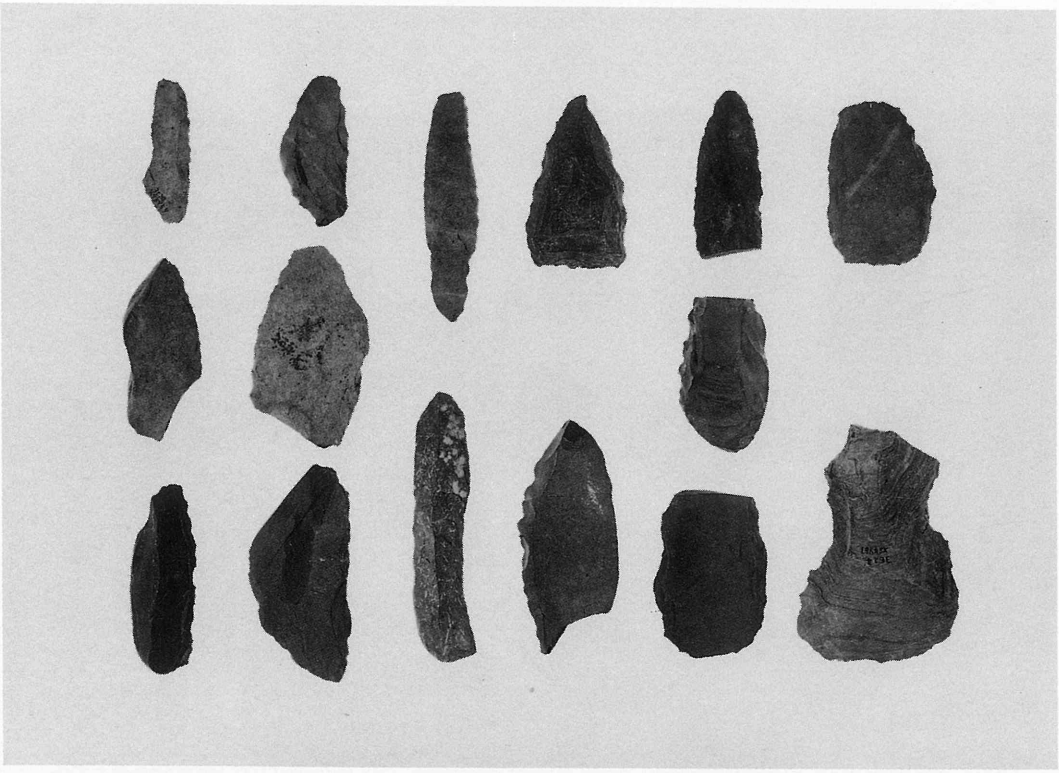


2. Ⅶ・Ⅷ群土器

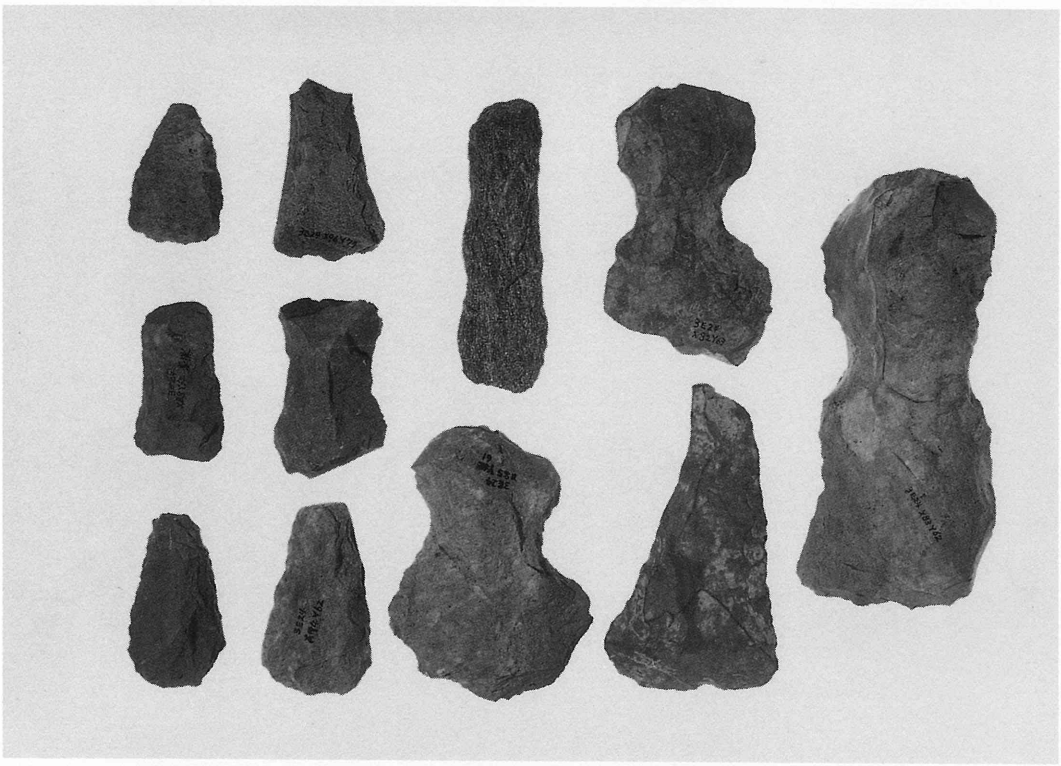
PL. 10



1．石槍・有舌尖頭器・石鏃・玦状耳飾・石匙



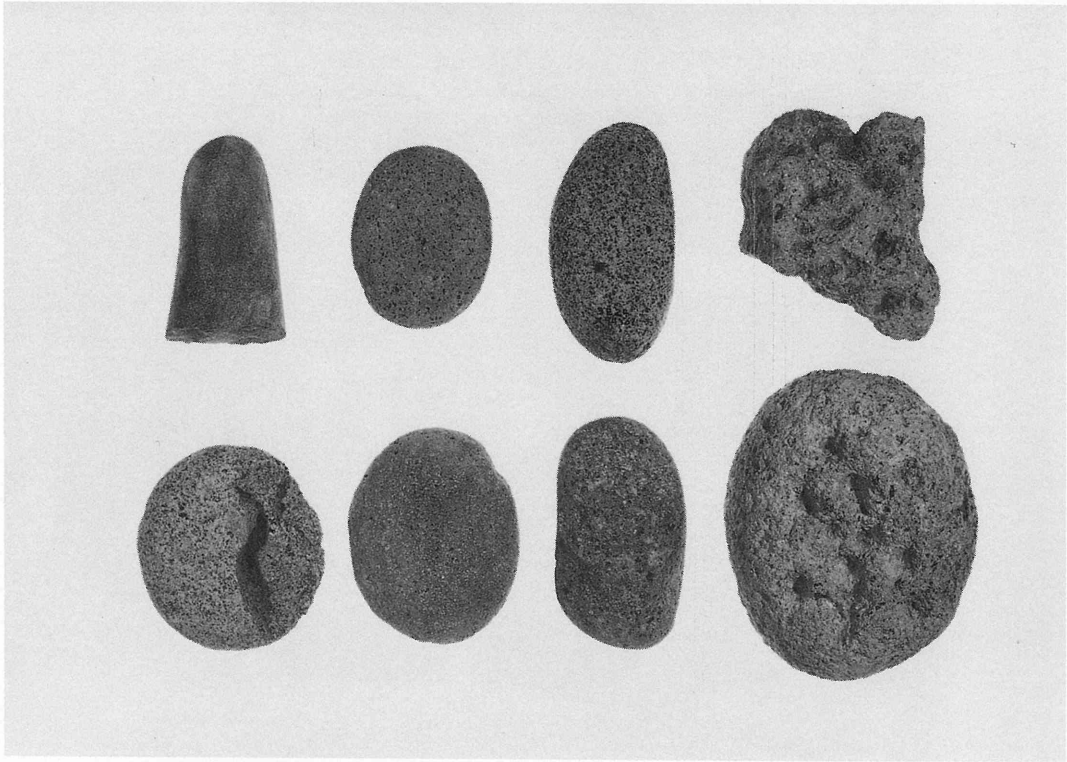
2．削器・打製石斧



1．打製石斧

2．凹石・敲石

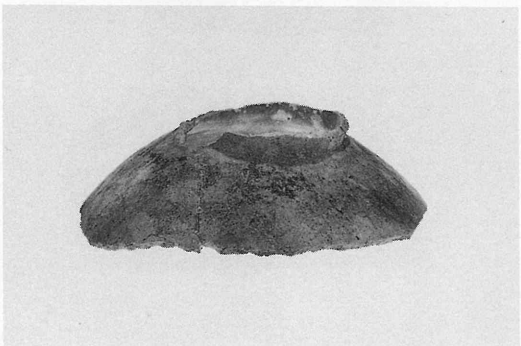
PL. 12



1．スタンプ形石器・磨石・蜂の巣石

2．H－11号住居址(1)

3．H－11号住居址(2)



4．H－11号住居址(3)

5．M－11号墳(4)

調　査　要　項

遺跡名称　横俣遺跡群（よこだわらいせきぐん）
上横俣遺跡（かみよこだわらいせき）…1・2・3E18
熊の穴遺跡（くまのあないせき）　…1・2・3E19
熊の穴II遺跡（くまのあなにいせき）　…2・3E24

遺跡所在地　群馬県前橋市西大室町28－1番地ほか

調査期間　平成3年5月13日～平成3年11月20日

調査面積　12,500㎡

開発面積　550,000㎡

調査原因　荒砥工業団地造成

調査依頼者　前橋工業団地造成組合　　管理者　小寺弘之

調査主体者　前橋市埋蔵文化財発掘調査団　　団長　遠藤次也

事務局　事務局長　福田紀雄　　事務局次長　遠藤和夫
財政係員　高橋賢靖　　井上敏夫　　庶務担当　須田みずほ　　古川真喜子

調査担当者　都所敬尚　　大山知久　　上野克巳

調査参加者　阿部こう　阿部シゲ子　飯島いし　飯島民弥　江口よしの　落合高男　木村かくの
喜楽トヨ　桐谷秀子　久保田海一郎　小島勝雄　小沼豊子　小沼はつ　近藤三代子
斎藤まき子　下飯有利子　鈴木民江　須藤か津ゑ　高橋やすの　田口桂子　多田啓子
田中喜代子　田中秀道　長岡徳治　中村新太郎　原島なか　深町　真　福島逸司
松倉菊江　松倉りつ　村山ふで　山口きく枝

調査協力　群馬県教育委員会文化財保護課　　群馬県埋蔵文化財調査事業団　　前橋工業団地造成組合
飯島静男　　飯塚　誠　　柏瀬順一　　加部二生　　亀山幸弘　　小島純一
小菅将夫　　小鮒智紀　　佐藤明人　　杉山秀宏　　関根吉晴　　早田　勉
大工原　豊　　田口正美　　田中隆明　　千明徳至　　西田健彦　　西村勝広
㈲イズミトレス　　技研測量設計株式会社　　シン航空写真株式会社　　スナガ環境測設
株式会社測研　　たつみ写真スタジオ　　東京ＮＥＣ商品販売株式会社　　株式会社パスコ
プラス株式会社　　（五十音順　敬称略）

横俣遺跡群 V

平成4年3月13日　印　刷
平成4年3月16日　発　行

編集発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町　664－4
ＴＥＬ．0272－31－9531
印　刷　上毎印刷工業株式会社